

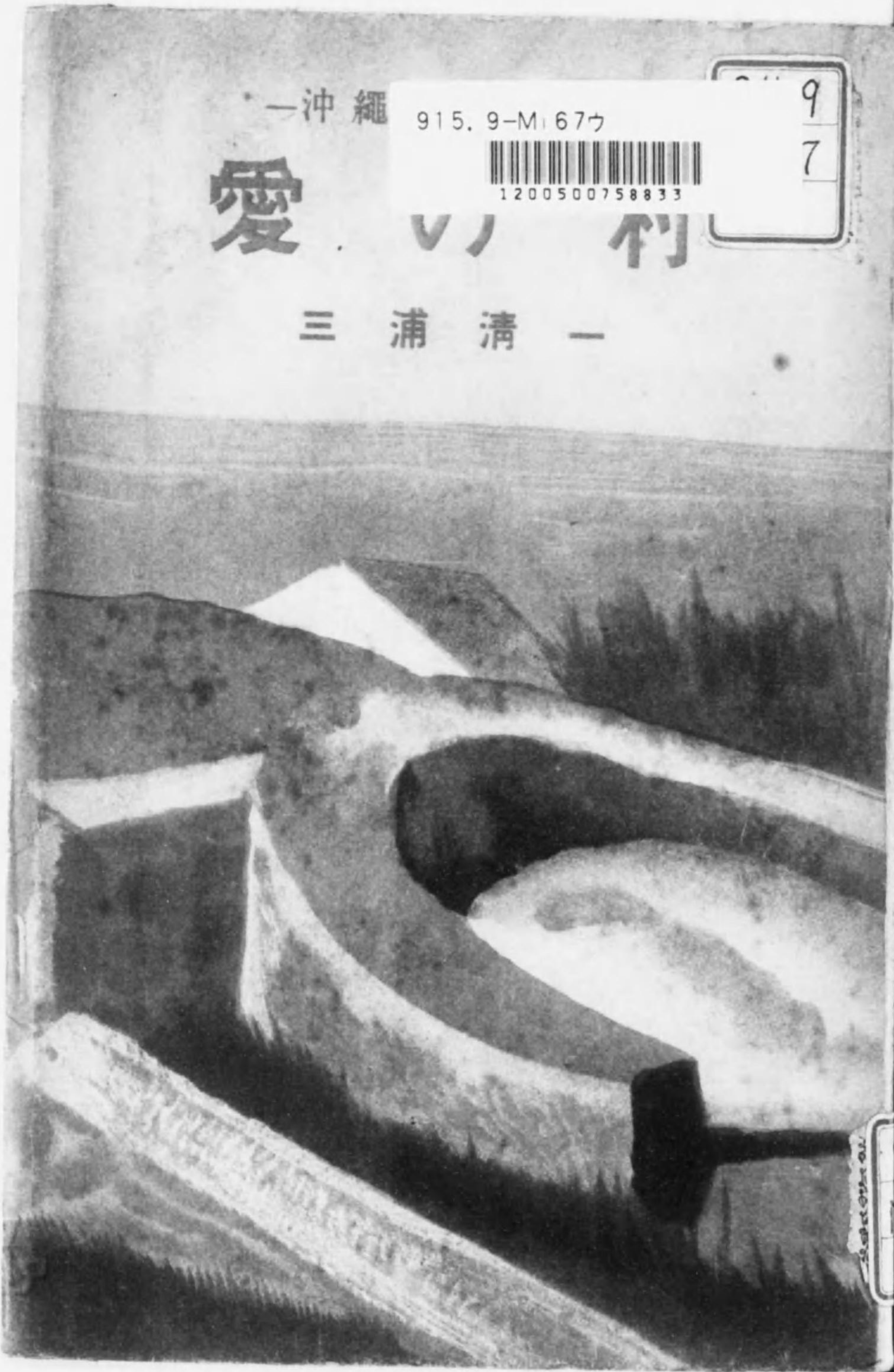
—沖繩 915.9-M167ウ

愛の村

三浦清一



9
7



始



915.9

MI 67

愛の村

沖繩救癩秘史

三浦清一



國立癩療養所 — 愛樂園全景

鄰友版





園長 鹽沼博士



愛楽園の職員

装幀 内田 巖

994
69

愛の村 目次

日の丸への合掌 三

アダン林の家 一六

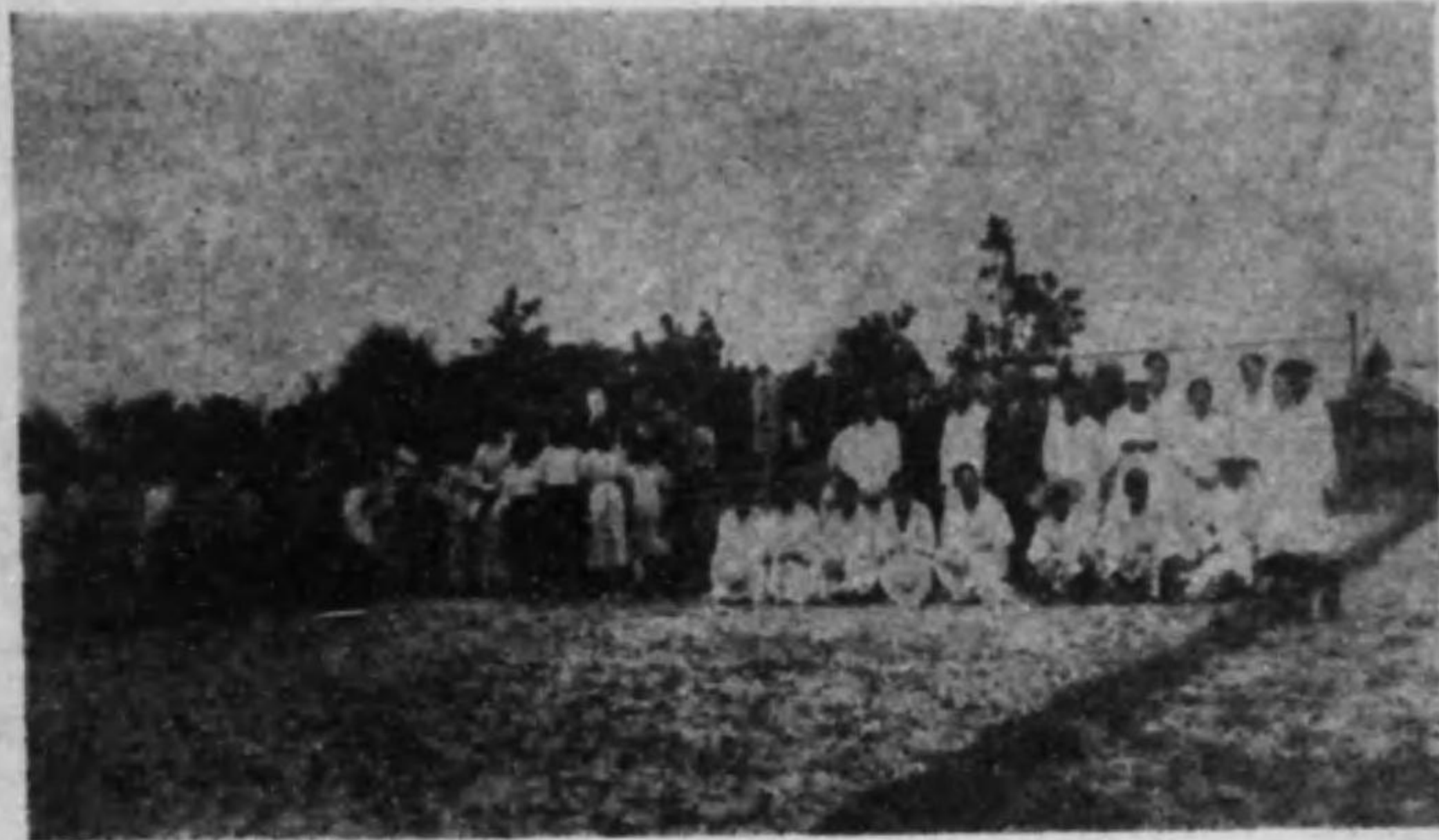
星の祈り 三四

蓆を蒲團にして 五一

新しき任務へ 七一

神の旋風 八七

愛の村 九八



愛樂園の職員と患者



青年時代の青木恵哉

苦しむ者と共に苦しむ神……………一〇

皇恩に咽ぶ……………一三〇

永遠への階子……………一四五

挺身隊……………一五五

雲の柱のみちびく儘に……………一七四

御歌たまはる日……………一九二

逞しき建設へ……………二〇四

—— 卷末に ——

愛の村

—— 沖繩救癩秘史 ——

皇太后陛下御歌

つれづれの友となりても慰めよ
行くことかたきわれに代りて

日の丸への合掌

【國旗に注目】

澄み切つた團長の言葉が、一際高く響くと、三百いくつの瞳が、一齊に中空にむけられた。青々と晴れた蒼穹に、へんぼんと翻つてゐるのは、日の丸の旗であつた。

三百の瞳は、吸ひつけられるやうに、日の丸に眺め入つた。おごそかな沈黙が、人々の心を捉へた。

『では、いつものやうに、これから、謹んで、御歌を奉唱することに致します』

いつの間にか、高い壇の上に立つてゐた團長が、おちついた聲で斯う宣言すると、女醫の松田さんが、器用にタクトを振るのであつた。

つれづれの

友となりても

なぐさめよ

行くことかたき
われにかはりて

ソプラノとバスの二つの聲が、巧みに一つとなつて、廣場の上をたゞよひ昇ると、爽やかな朝風が、何處かちともなく、花の香を匂はせて来る。

御歌の奉唱が終ると、一同の者は、團長の指揮に従つて、靖國の英靈のために、又皇軍將兵のために、感謝の黙禱をさし上げるのである。

『解散』

此の聲がかゝると、百五十餘の患者たちは、急に賑やかな聲を立てながら、或は掃除に、或は食事運搬に、或は水汲みにと、おの／＼の分擔に従つて、仕事を始めるのである。

——斯うして、癩療養所の、朗らかな、楽しい、一日の生活は始まるのであつた。

青木恵哉は、先刻から、廣場の一隅に突立つた儘、病友たちが賑やかに立ち働らくのを、微笑みながら、眺めて居た。

『一日でもよいから、ゆつくりと落ついた、ほんたうの我が生活といふものを作りたいものだ』と、長い間待ちに待つてゐた希望がやつと達成されたのだ。有難いことだ。もうこれで病友た

ちも、乞食をしたり、流浪たりする必要はなくなつたのだ。——ああみんな喜んでるな。……

おや、誰か、いゝ喉で唄つてるじやないか！』

旅の出で立ち観音堂

千手観音伏し拜み

黄金酌とて立ち別る

……

『上り口説』が、寂のある喉で、唄はれてゐる。唄は炊事場の方から聞えてくる。

青木恵哉も、いつのまにか、低い聲で、

袖にふる露おし拂ひ

大道松原歩みゆく……

……

と、調子をあはせてゐると、

『どうだい青木君、ばかに陽氣じやないか』

不圖、背後に聲がしたので、びつくりして、うしろを振かへつてみると、そこに愕然々々し

ながら立つてゐるのは、園長の鹽沼博士であつた。

『まあ、園長さんでございましたか、一寸も存じませんで——』
うろたへて、お辭儀をすると、

『うまいじゃないか君は、いつの間に八重山節なんか稽古したかね』

『いやあ、お恥かしい次第で……。稽古なんかしたつてわけじやありませんが、ほんの聞き覚えに過ぎないのですよ』

『聞き覚えにしても、實際うまいもんだね』

鹽沼博士は、如何にも感心したやうにさう言ふと、今度はちいつと、青木の顔色を凝視ながら、

『時に、此頃の健康はどうかね』

『有難うムいます。別にどうつて言ふんじやないのですが、相變らず、歩行くのが、どうもうまく行きませんで……』

『血友病といふのは、急にはかばかしく癒るもんじやないからね。何と言つても忍耐が第一だ。それに、君の病氣は、ながい間の過勞に基づくものだからね』

『はあ、此頃は、もうすつかり諦めて居ります。よし此儘たふれるにしましても、こんな立派な療養所で死なせていたゞけたら、何にも言分はございません。墓場や洞穴を住居とした昔のことを思へば、何も彼もが、感謝で一杯です』

『療養所が、此の屋我地島に建てられたといふことも、元はと言へば、矢つ張り君の、ながい間の御苦勞の結果だよ』

『滅相な』

と、青木は、如何にも恐縮したやうな眼を、まともに園長に向けながら、

『どうか、そんなことは仰やらないで下さいまし、療養所が、斯うした沖繩の涯にまでも出来ましたのは、全く、「御歌」の——毎朝、國旗の前で奉唱させて頂く、「御歌」のたまものでござりますよ』

園長は黙つて、二つ三つ、うなづいた。

『ほんたうに君の言ふとほり、これは、「御歌」のたまものである。——有難いことではある。

「御歌」の御仁慈は、遠い此の南の島にまでも及んで來たんだよ』

『ほんたうにさうです。「御歌」をたまはつた頃までの私たちの生活といふものは、實際みじめ

なものでございました」

「その頃はたしか、君たちは、あのジャルマにゐただね、無人島に！」

「さうです。あの淋しい無人島に、全く世を避けてゐたのです」

「……………」

「……………」

園長の鹽沼博士の顔にも、青木恵哉の顔にも、過ぎし目を偲んで一種沈痛な表情が浮んだ。

「併し園長先生」

と、青木がやや改まつた調子でよんだ。

「御歌の御威光によりまして、沖縄の此の地にも、療養所が建てられました。今度は、御歌が、海を渡る日が来ると、私は此頃しみ／＼と考へさせられてをりますが……………」

「なに？ 御歌が海を渡る日があるんだつて？」

「さうです、海を渡る日です」

「ふうむ、それは一體どうしたことかね」

「實は園長先生、こゝに是非とも園長先生に読んで頂きたい詩があるのです」

かう言ひながら、ポケットの中から取出したものは、一枚の小さな新聞であつた。それは救癩協會から出してゐる『楓の蔭』といふ機關新聞だつた。

「園長先生、こゝに詩が一つ出て居ります。「御歌海を渡る日」といふ詩です。どこかの療養所あたりに居る患者ではないかと思ひますが、とても私はひきつけられたんです」

「ほう、さうした詩が出てゐるかね。ひとつ読んで聞かせてくれ給へ」

「こんな詩ですが——」

支那に百萬、佛印に三萬

泰國に五萬、ビルマに十萬

馬來に三千五百、比律賓に一萬

東インド諸島に二萬

しかして印度にある百萬の病友！

おなじ血の

おなじ肉の

おなじ病の

これら大東亞三百萬の癩者が

いま聲を擧げてさし招いてる姿が私たちには見える

聞える、聞える、聞える

慰めを求むる聲が

救ひをもとむる聲が

來りて我らを援けよとの大なる聲々が！

兵隊が強いだけぢやない

銃後の備へが完全なばかりではない

拵るべし、日本には——日本の癩者には「御歌」があるのだ

あの聲は、あの聲は、「御歌」を求むる聲だ。

ああ、小さな船に日の丸をおし立て、

日本の癩者が海を渡る日はいつか

ああ、その日、癩者海を征く日こそ

大東亞三百萬の同胞が東方の太陽を、「御歌」を、拜する日なのだ。

見よ、海の彼方より我らをさし招く手を、手を、手を！

聞け、海の彼方より我らを喚ぶ聲を、聲を、聲を！

青木は読み終へると、静かに園長に言った。

「私はすっかり此の詩に感激したんです。私は此の詩を読んだ時、心の底から、ああこれが眞の日本人の魂の聲だと思つたんです。體は腐つてゐても、血は濁つてゐても、日本人は日本人です。大東亞共榮圈が打建てられやうとする今日、大東亞三百萬の癩者に、心から呼びかけることの出来るのは、それは私たちです。私たち癩病人です。此の詩は、かうした氣持を、よく歌つてゐるではありませんか」

『うらむ、全くだ、實際「御歌海を渡る日」が来なくちやならぬよ、實際だ!』
鹽沼園長は、うなるやうに斯う言ふと、首を高く擧げて、遠く水平線の彼方へと眼をやるのであつた。

『私は思ひ出します』

と、青木はまた、口を開いた。

『今から十幾年前、癩者をたづねて、此の沖繩にやつて来ました時のことを。その頃、沖繩の病友達はほんたうにみじめなものでした。然し必ず沖繩の病者にも、御恵みの及ぶ日が来るに相違ないと信じて居たのです。そして、遂に其の日が来たのです。私たちは今、何の不自由もなく、此の療養所で、療養の生活をさせて頂くことが出来てをります。ほんたうに有難いことです。けれども、大東亞に三百萬の病者が居ると聞きますと、實際斯うして吞氣にはやつて居られないやうな気がします。私はもう體が弱つてゐますので、何のお役にも立ちませんが、此の詩のやうに、何かの形で、「お歌」が海を渡る日が来なくちやならぬと考へますが……』

『よく言つてくれた、青木君。君たちのさう云つた熱誠は、決して空しくなるもんじやないよ。「御歌海を渡る日」も、さう遠いことではあるまい。そして今の詩にあるやうに、小さな船

に日の丸を押し立て、眞先に出かけるのは、それは沖繩に居る僕たちの團體でなくつちやならぬエ!』

鹽沼園長も感慨深げに見えた。

『沖繩から船を押出す時には、私も連れて行つて頂きますよ』

青木は眞剣な表情で斯う言つた。

炊事場の方からは、また、寂のある上り口説が聞えて來るのであつた。

立つる煙は硫黄ヶ島

佐田の岬もはい並らで、

エイ、あれに見ゆるは御開聞

富士に見違ふ櫻島

.....

『ああ、みな朗らかでいな。あゝした朗らかさを、大東亞三百萬の病友にもわかち度いものだね』

「御歌」が海を渡りさへすれば出来ますよ」

二人は黙つて、上り口説に聞き入るのであつた。青木の顔にも、園長の顔にも、明るい微笑が湧き上つた。

暫らくすると、園長は急に何か思ひついたやうに、

「時に青木君」

と、やゝ改まつた調子で、

「これはまだ内々のことだが、實は園當局の方では、君が多年の御苦勞に對して、何とか優遇の道はないかと、いろいろと考へた結果、此際君に、あの記念館の方へ這入つて貰はうといふことに、大體の意見がきまつてゐるんだが……」

「えい、記念館にですつて？」

「御承知のやうに記念館は、沖繩救癩運動のために三井報恩會が寄附してくれた金で建てた最初の保養所で、國立の此の療養所が出来る迄は、君たちが這入つてゐたものなんだが、あそこに君に這入つて貰つたらと思つてゐるんだがな」

「だつて、あそこは今、圖書室になつてゐるんじゃないやありませんか」

「さう、圖書室にはなつてゐるが、しかし少し手を加へたら立派な部屋になると思ふ。園の方では、君に這入つて貰ふて、一には疲れた體をゆつくりと休ませて貰ふと共に、又一には、そこから、入園者全體の精神的指導にあつて貰ひ度いと思ふのじや。殊に、此頃どしくふえて行く少年少女達のことを考へると、私は實際憂鬱な心になるよ。身は病魔に犯され、前途の希望は消え果て、而も兩親の許から離れて、こゝに來てゐる子供たちのことを思ふと、たまらない氣になる。私が君に願ひ度いことは、これから君には、この小さい子供たちの爲に、お父さんの代りをやつて貰ひ度いことなのじやが、……」

青木は、園長の聲が急にうるんでくるのを感じた。ちらと眼を擧げてみると、園長の瞳には、涙が光つてゐた。何か言はうとしたが、喉がつかまつてしまつた。

「青木君、承知してくれるだらうな」

園長の熱のある聲に、青木が、頭を擧げる途端、ちいつと自分を凝視して居る園長の瞳と、ぱつたり出會つた。四つの瞳は燃えてゐた。

青木はよう口が利けなかつた。たゞ黙つて、うなづくのみであつた。言葉が出なかつたのだ。
「有難う」

園長は、軽く頭をさげると、につこり微笑んだ。

銅鑼の音が、どんくくくと……と、聞えて来た。

『あゝ、もう朝飯の時間だね。——ではおわかれしよう』

鹽沼園長は、さう言ふと、さくさくと小砂利を踏みながら、官舎の方へと歸つて行つた。

青木は默然として、園長の後姿を見送つてゐたが、やがて頭を擧げて空を見た。泪にうるんだ彼の瞳には、青空の下にへんぼんと翻つてゐる日の丸の旗が云ひやうもなく尊いものに見えるのであつた。

青木はおこそかに、日の丸の旗を仰いで合掌した。そしてしみくと、苦闘十四年間の、沖繩の生活を、思ひめぐらすのであつた。

アダン林の家

青木惠哉が、沖繩に居る癲病患者を訪ねて、始めて國頭郡の名護にやつて来たのは、今から十四年の昔であつた。

彼が、棒のやうになつた脚を引きづつて、名護の入口にさしかゝつた時は、もうとつぷりと陽は落ちてゐた。

『變装したら、誰にも氣づかれはしないよ。帽子を眞深かにかぶつて、手袋をはめて見給へ。誰も君を病人とは思はぬから。そして乗合自動車に乗ることだ。那覇から名護まで幾里あると思ふ。十八里もあると言ふじやないか。それを徒歩で行くなんて、そんな無茶をするもんじやないぜ。……』

親切に斯う言つてくれる老牧師の言葉をしりぞけて、那覇から歩いて来た彼だつた。途中でなんども自動車を呼びとめやうとしたのであつたが、持つて生れた一徹な氣象は、二日ばかりで、とう／＼十八里の道を征服した。

『これなら、普通の健康者には、ひけは取らぬぞ』
斯う思ひながらも、

『しかし、何と言つてもえらかつた。氣力はちよつとも衰へないつもりだけれ共、實際體が言ふことを聞かぬのでなア』

思はずさう獨ごつと、そこに立どまつて、ほつと息をついた。頭は鉛を溶し込んだやうに。

ぼんやりとしてゐた。嘘がばかに重たかった。

「だが、いよいよ、名護に來たんだ」

さう思ふと、疲れた心は、また急に、活氣づいて來るのであつた。

琉球松の並んでる間から、黒ずんだ海が見えた。遠い水平線の彼方には、毛筆で引いた程の微かな夕映が残つてゐた。道傍には、黄色いユウナの花が、夢のやうに、夕闇の中に咲いてゐた。

青木はユウナの花を一つ摘み取ると、そつと鼻のあたりに持つて行つた。

花には甘い香があつた。

不圖心の中に、憂鬱に似たものが、ぼつりと湧いて來た。

「さて、これからどうしたものか？ 木賃宿に泊るか、或は昨夜みたいに農家の小屋にでも寝るか。——それともいつ、そのこと、病者の家をさがすか」

那覇を立つとき、荒砥牧師から聞いた言葉が、思ひ出されて來た。

「海岸の方だよ、病者の家のあるのは。一つ見つけたらもう大丈夫だ。あとは甘藷蔓式に、次から次に、見つかつて行くのだから……」

斯う言つた牧師の言葉が、疲れ切つた頭の中に浮んで來ると、彼は、ぐつと脊をのばした。

「宿屋に泊ることはやめやう。斷られたら癪だからな。これからまつすぐに、病者の家に行くことにしよう！」

さう決心すると、また重い脚を引ずつてぼそ／＼と歩き出した。

町は明るかつた。

何所からともなく、魚を焼くにほひがして來た。それがたまらなく食欲をそよつた。

「一寸お尋ねしますが」

彼は、大きなフクギの茂つてゐる暗がり、頭の上に物を載せて、裸足で歩いてる一人の女をよびとめた。

そして、町疇にお辭儀をしながら、四邊を憚かるやうな小さな聲で、

「海岸の方へ出るには、どの道を行つたらよいでせうか」

「海岸の方へ？」

女は暫らく、ちいつと灯影に照し出された顔を凝視してゐたが、

「海岸はこれから、二町ばかり、左の方へ行つたところですが……」

女はかう言つて、くはしく道筋を教へてくれた。

『どうも有難うございました』

青木は又叮嚀にお辭儀をすると、女に教へられた細い小徑を左へ取つて、ぐんぐんと歩き出した。

町の家並はすぐになくなつた。

四邊は急に静かになつた。

徑は稻田の間につづいて居た。

浪の音が聞えてから、五分ぐらゐも歩いて行くと、そこはもう海岸であつた。

彼は立どまつて、あたりに眼をそゝいだ。黒い海に沿うて、蘆の穂がざわ／＼と騒いでゐる。

不圖ハブのことを考へ出した彼は、リュクサツクの中から、懐中電燈を出して、足許を照すことにした。

ココココ、ココ、ココココ、ココ……と、哀れな淋しい聲を出して、ひめあまがへるが啼き出した。

小徑はなくなつて、高い防波堤につきあたつた。アダンの葉が鬱蒼としげつてゐる。防波堤に足を踏みかけた時、彼は思はず、

『おや』と、聲を出した。

アダン林が、鬱蒼としげり合つてる中に、かすかに灯の洩れてゐる掘立小屋が、懐中電燈の光の中に横はつて居た。

ぐつと、唾を呑んだ彼は、ちつと四邊の静けさに耳をすました。

小屋の中はひつそりとしてゐた。

一寸ためらつてゐたが、思ひ切つて、席でつくつた戸を、ぐいと引つばつてみた。戸はすぐにあいた。

『今晚は』

斯う朗らかな聲で挨拶すると、彼はづかづかと小屋の中に、這入つて行つた。

藁をどつさり土の上に敷いて、その上に蓆を敷いた狭くろしい小屋の中には、十五六歳ぐらゐの少年が、獨りぼつんと、足を投げ出して坐つてゐた。

カンナラの薄ぐらい光の中に、少年の少しゆがんだ顔を見出したとき、すぐに、それが神経

癪であることがわかった。

見知らない人間が、出しぬけに這入つて來たのを見ると、少年は如何にもびつくりしたやうに、暫らくの間は、口も利かないで、たゞ眼を瞠つて、青木の顔を眺めてゐるのみであつた。青木は、愕然と笑つた。

『御免なさいね』

すると、少年が、つぶやくやうに、口の中で、何やらものを言つたが、彼にはそれがよう聞えなかつたので、少年の眼の前に、ぐつと體を近づけて、もう一度、やさしく聞いた。

『此の家には、君一人かねエ』

少年は、口をもぐもぐ動かしてゐたが、今度は、やゝはつきりした言葉で、

『たーやみせーびーが？』

青木には、さつぱり、その意味がわからなかつた。

『え、なんだつて？』

斯う言つて、少年の顔を、まともから凝視した。

少年の唇は、きつく一方に引つけられてゐた。髪の毛は、唐黍の毛のやうに、赤くちぢれたのが、くつついてゐた。指も殆ど曲つてゐた。

少年は又呟やくやうに言つた。

『まあからやみせーびーが？』

青木は全く困つた。琉球語については、なんの智識も持たなかつたのである。

『君は、國語でお話することは、できないかね』

と、ゆつくりと、一語々々が分るやうに、尋ねてみた。

少年は、暫らく、考へてるやうだつたが、やがて

『すこしばかり』

と、答へた。

『では、國語で、話してくれ給へ。私は、琉球の言葉は、少しもわからないから』

青木はさう言ひながら、部室の中を、ちろちろと觀察するのであつた。

家は丸太を何本か立て、壁は半分は板で、半分はアダンの葉でつくり、屋根は、竹を何本か並べて、その上に、藁を積んであるやうであつた。

柱には古釘が一本打つてあつて、ぼろ／＼の著物が一枚、引かけてあつた。室の中には石炭箱が置いてあつて、その上には、小さなカンテラが、盛んに黒い油煙を吐きながら、ちら／＼と焰をあげてゐた。

土間には石でつくつた、どが一つあつて、今しも鍋に、何やら煮てるところであつた。上りがまちのところに、まな板とも、お膳ともつかぬ板切れが一つあつて、その上には、茶碗やら小皿やらが、雑然と置いてあつた。

『飯をたいてるかね』

さう、聞くと、少年は、黙つてうなづいた。

『この家には、君ひとりかね』

彼はまた尋ねた。

少年はだまつて頭を振つた。

『外に誰がゐる』

『ちやーちやー』

『ちやーちやーつて、誰かい』

『ちやーちやーは、お父さんのこと——』

少年はさう答へると、始めて、にこりと微笑んだ。

その時、筵の戸が、ぱたりとあいて、そこに這入つて来たのは、五十がらみの小柄の男であつた。

『ウー、ちやーちやー』

少年はとんきやうな聲を出して手を舉げた。それが、少年の父であることは、すぐにわかつた。

『やあ御免なさい。お留守のところにお邪魔しますよ』

青い野菜を入れた籠を土間に置くと、父親は、不審さうな顔をして、じろ／＼と青木をながめてゐたが、相手が病者であることが分ると、何か安心したやうな表情になつた。

そして『ぬーぬ、ぐゆうやいびーか』と言つたが、青木が解せぬ顔をしてるのを見ると、

『何の御用ですか』と、改めて言ひなほした。

『あなたは、よく話ができますかね』

『え、大がいは、わかりますが……』

『それはけつかうだ、どうも息子さんの言ふことが、ちよつともわからないのでね、困つてゐたところですよ』

青木がさう言ふと、父親は、愛想笑ひをしながら、

『それはお氣の毒でした。わたしは若い頃に、兵隊に行つてゐたから、言葉だけは、まあ人並にはわかるやうになりました』

『兵隊に？ さうですか、そして、何處の隊でしたかね？』

『熊本でした。輜重隊の方で——』

『なに、熊本の輜重隊に？ それはどうもおもしろい御縁だ。實は私も熊本から来た者ですよ。』

——回春病院……御存じですか、ほら、私たちのやうな病人を世話する、病院があります。私のはあの病院からやつて来た者ですよ』

青木がさう言ふと、父親は又もいぶかしげにリュクサツクをかついだ、洋服をきた、ゴム靴をはいてゲートルを巻いた青木の姿を、頭の上から足の先まで、ものも言はないで観るのであつた。

『今晚はひとつ泊めてくれませんか。いろ／＼お話したいことがありますから』

さう言ふと、青木はもう、リュクサツクをおろしてゐた。

カンテラの光に照し出された父親の顔は、赤いてら／＼した浸潤型で、眼も可なり犯されてることがわかつた。聲も少しはかすれてゐた。

父親が歸つてくると、少年は急に活々となつて、半ば曲つた指を巧みに動かして、炊事をはじめた。

さつきから、鍋の中で煮てゐたものは、さつまいもだと言ふことがわかつた。

少年は甘藷の鍋を、くどからおろすと、今度は、さつき父親が外から持つて来た野菜を、ぢやぶ／＼と水で洗ふと、茶碗やら箸やらを載せてある板切れを取つて、ことごと、庖丁で切りはじめた。庖丁には柄がついてゐなかつた。

少年は野菜を刻むと、小さな鍋を、暗いところから持つて来て、お汁をつくるのであつた。

『今夜は他府縣からのお客さんだからな、汁のなかには、だしを入れるんだよ』

父親がさう言ふと、少年は『うー』と、口の中で返事しながら、また土間の暗いところから、瀬戸物の壺を取出して来た。そして竹切れみたいなもので、何か壺の中からつまみ出すと、そ

れを汁鍋のなかに入れて、振きまはした。

あとで、それが、豚の脂だとわかつたとき、青木は急に、むかつきを覚えて来た。

しかし、いもと野菜の汁の夕食がはじまつたとき、青木は、『おいしい』と言って、お汁のお代りを求めた。甘藷はてんでに、鍋の中から、取つて食ふのであつた。

『御遠慮なく、うさがいみせーびれー』

父親はしきりに、青木にいもをすゝめた。

食事をしながら、三人は、すつかりうちとけた話を交すやうになつた。

『時に、あんたは、いつ頃から、病氣が出たんです』

青木は、父親の、赤いてらくした顔を覗きながら、さう聞いてみた。

『もう古いことです』

父親は、暫らく、黙つてゐたが、やがてぼつりぼつりと語り出すのであつた。

『兵隊から歸つて間もなくです。はじめは此の子のやうに、神経がやられてゐたのですが、それが段々と變りまして、いまでは、御見かけのとほりになつてしまひましたよ』。

『おかみさんは、どうしました』

『女房ですか』

と、一寸言ひ濁んゐたが、

『此の子に病氣が出ると間もなく、私たちに愛想づかしをして、家出をしてしまひまして』
『まあさうですか！』

青木は溜息をついた。そして、ちりちりと少年の方をぬすみ見た。少年は青木と視線が逢ふと、うろたへて逸らしたのであつたが、やり場に困つたやうに、頭をがし／＼と掻いた。

『可愛想な子供だ！』

さう思ふと、もう、斯うした話を、ながく続けることは不可なと思つた。

何か話題を變へ度いと思つたが、一寸適切な話が、浮んで來なかつた。

風が窓戸を、ばたばたと動かして、走つて行つた後は、またしいんとなつた。

三人はおそくまで話した。

青木は此の父子の口から、沖繩の癩病人が、どんなに惨めな生活を送つて居るかを、いろいろと聞かされた。多くの病者が、住むに所なく、墓場や海岸の洞窟にのがれて其の日／＼の哀れな生活を送る話が、次から次にと出て來るのであつた。

聞いてゐるうちに、心はづき／＼と痛んで来た。

『俺がはるばる此の琉球までやつて来たのは、斯うした氣の毒な病者たちに、生きる希望を持たせる爲なのだ。此の使命をはたすためには、どんな辛いことでも、避けてはならない』

青木は心の中に堅く誓つた。

三人が寝たのは、かれこれ二時近くであつたらう。三人は一枚の藁をかぶつて、帯も解かず、ごろりと横になつた。此の親子には布圍がなかつたのである。少年を眞中にして、父親と青木とが、兩側に足を伸した。

季節は十月の半ば頃であつた。起きてゐる時にはそれほどには思はなかつた寒さが、横になつてから、急に感じられて来た。

しかし親子は、かうした生活にすつかり慣れてると見えて、横になると間もなく、すうすうと、軽い寢息を立て、眠つてしまつた。

青木はどうしても寝つかれなかつた。

體はたしかに疲れてゐた。十八里の道を二日ばかりで歩いて来たことゝして、體はぐつたりと疲れてゐた。それにもかゝはらず、頭はすつかり冴えて居た。眠らうと努めれば努めるほど、

いよいよ反對に眠は逃げて行くのであつた。

いつの間にか、少年は、青木にびつたりと體をくつつけて、すやく／＼と眠てゐた。

青木は、そつと手を動かして、少年の手に觸れてみた。少年の手はあたたかかつた。青木はまた、自分の頬を、少年の頬にあてゝみた。少年の頬は暖かつた。

『可愛い子供だ』

すると、思ひ切つて、少年を抱しめてやり度いやうな氣持を覺えた。健康な世人に對する時に味はふことの出来ない、甘い情愛が、沁々と感ぜられた。

『これが同病愛といふものかな？』

そんなことも考へられた。

『病者と病者が互ひに接する時に、そこに何とも云へぬ温さを感じられるといふのは、實に不思議なことだ。而もかうした不思議な血が、こゝに寝てゐる自分たち三人だけでなく、琉球の島々に居る澤山の同胞たち、否、日本國中に居る一萬六千の同胞たちの間にも結ばれてゐるのだ！』

祖と、同情と——此二つのものが溶け合ひ、融和したものが、自分たち癩者の、血族社會で

はなからうか？……』

頭の中には、こんな思ひも、湧いて来た。

こんなことを考へながら、ちいつと闇の中に眼を見開いてみると、昔もなくそこに現はれて来るものは、熊本回春病院の友人たちの面影だった。

『青木さん、たのみますよ。沖繩のために人柱となつて下さいね。みんなで祈つてますから。祈の風が、龍田山の麓から捲おこつて、南の島まで疾走することを、忘れちゃいけないよ』
みんなの瞳が、いつせいに、さう言つてるやうに思はれた。

その中の一つ、丸い大きな顔が、青木を覗いて居るのであつた。

『あゝ、徳田だ——徳田の顔だ！』

青木は徳田の大きな顔を、またゝきもしないで、見つめた。

不圖、徳田の顔が、ゆがんで来た。

徳田の眼から、涙がぼろ／＼とこぼれて来た。

『沖繩は俺の故郷だ。詛はしい故郷だ。けれども、俺に取つては、なつかしい故郷だ。どうか故郷の人たちに、生きる望みをあたへてくれよ』

心ばかりの送別會が済んだ後で、回春病院の庭の大きな楠の下で、青木の肩をつかんでさう言つた時、徳田はすっかり泣いてゐた。

『あゝ徳田がまだ泣いてる！』

青木は、闇の中に、徳田の泣顔をもう一度探さうとしたが、もうそのときには、徳田の泣顔は消えてゐた。そして、そこにあらはれてゐたものは、白髪童顔の老牧師荒砥啄哉先生の、にっこりと微笑んだ顔だった。

『よく来てくれた。僕は君がやつて来るのを待つてゐたよ。沖繩は君を呼んだのだ』

数日前、運上丸から那覇の波止場に吐き出された青木の手をむづとつかんで、しんみりとさう言つてくれた老牧師の面影が、いまあり／＼と眼底にあらはれて来た。

『先生、あなたと御一緒なら、私は死んでもやりますよ。七十五歳の先生お一人に、どうして働かせて濟みませうか。癩者の傳道は、癩者の責任ですもの』

青木は心の中で、白髪童顔の幻に、つよく／＼叫ぶのであつた。
夜は更けて行つた。

頭はいよ／＼冴えて来た。

星の祈り

青木は、そおつと、起き上つた。親子はぐつたりと眠つてゐる。青木は手さぐりで靴を履くと、戸をすうと明けて、外へ出た。

青木はアダン林の間を抜けて、渚の方へと歩いて行つた。渚の砂は、靴の下で、さくさくと音を立てた。彼の眼の前に、海は魔女のやうに、黒い外套をかついで、寂然と横はつてゐた。立どまつて、天を仰ぐと、びらうどの様な帳の中に無数の星が輝やいて居た。

『なんて綺麗な星空だらう！』

思はず獨ごちながら、満天の星に、すつかり心を奪はれた青木には、その星のひとつひとつに、心があるやうに思はれた。輝やきの大小が、色調の青や赤が、恰かも笑ふが如く、泣くが如く、媚びるが如く、慕ふが如くに思はれた。

莊嚴なる天空を仰いで居るうちに、心はいつとはなしに、過去の思ひ出にと、走つて行くのであつた。

過去を思ふことは、辛いことであつたが、併しまたその辛さの中には、言ひ知れぬ慰めもあつた。

何と言つても、一番辛い思ひ出は、發病した當時のことである。それは郷里の小學教員講習所を卒へて、小學校の教員となつた二年目の夏だつた。或日のこと、顔面や手足の關節に、一種異様な疼痛を覺えたのであつたが、その疼みは日に日につのるばかりであつた。そしてそのうちに、皮膚の或る部分が、殆ど、感覺を失つてしまつたのであつた。

『若しや』と思ひながら、福岡の大學病院に、多分の不安を胸に包んで飛び込んだ時、皮膚科の部長から聞された言葉は、

『どうも言ふに忍びないですが、併し、隠すことはかへつてあなたの爲にならぬと思ひますから、事實を知つて頂くことに致しませう。——實はあなたの御病氣は、普通の皮膚科では、絶對に癒すことの困難な病氣です。……御想像にまかせます。若し御入院なさるとせば、草津や大島にも療養所がありますし、又熊本には、回春病院といふ有名な病院もあることですから、此際自分のこと、家族のことなど、充分にお考へになつて、善處さるゝことが、必要だらうと思ひます』

部長は言ひにくさうに、併し、言ふだけのことと言つてしまふと、さつさと診察室を出て行つてしまつた。

泣くにも泣けない心で、ぼかんと、まるで喪心したやうに、椅子に残された彼に、優しく話しかけたのは、まだ年若い看護婦だつた。

『失望しちやいけませんよ、ねエ。人間はどんな境遇になつたつて、生きる道は、ちやあんと開けて来るんですよ。氣を強くして下さいね。——ねエ、わかつて下さつたでせう』

さう言はれたとき、青木は初めて、涙をぼろぼろと流した。『斯うした、他人の同情を受けねばならなくなつた、自分となつたか！』——そんなに思つた時、急に、自分といふ者が、可哀想になつて来るのであつた。

『あゝあの日から、俺の、ながい／＼流浪の生活がはじまつたのだ』

青木は下唇を、ちいと噛んで、足許の砂に見入つた。

なつかしい故郷を後にしたのは、二十二歳の秋も、暮れかけてゐる頃だつた。由布岳には、もう雪が訪れてゐた。父も兄も、黙々として、青木の出て行くのを見てゐた。

『家族が浮ばれるか、浮ばれないかの瀬戸際だ、惠哉一人が犠牲となつて、身をかくして呉れ

るのも、止むを得ないことだ』

これが、父の胸の中であり、また、兄の胸の中でもあつた。社會の人々に取つて、癩病は天刑病であつた。そして、癩病患者の出た家とは、縁組をすることは愚か、場合に由つては、親類間の交際さへも絶つといふ社會である。青木はよくそれを知つてゐた。父と兄が、一言もとめてくれないで、唯黙々として、家を去るのを眺めて居る氣持も、青木にはよくわかつてゐた。青木は兄や父を、ちよつとも、恨みがましくは考へなかつた。

しかし、流石に母親は、さうではなかつた。母親は、味噌倉の中に部屋をつくつて、そこに青木を匿して置くやうにしたいと、相當つよく迫つたけれ共、父親は首を縦に振らなかつた。

十一月十日——いまでも青木は記憶してゐる、一二枚の着代へと、すきな書物を二三冊入れたトランク一つを手持つて、住み慣れた我が家を後にした、あの日のことを。

日はもうとつぷりと暮れて居たが、村の人達に氣づかれないやうに、わざと抜け道を通つて、山の峠へと出た。

母は峠まで送つてくれた。

『時々は便りをおくれよ。お母さんはお前のことはどうしても忘れることは出来ないからなア。』

「お金も何とか工夫して送つてあげるから、決して無茶をするもんじやないよ」
母は青木の肩に手をかけて、いつまでも泣いてゐた。

「あゝ、あれからもう十年にもなるかな」

大きな嘆息が、腹の底から、込みあげて来た。そしてちいつと、星空を仰いで居る視野に、ありありと浮んでくるのは、臥龍の恰好をした、紅葉燃ゆる丘陵の上、美しく刈込のされた生垣のうちに、幾棟かの建物が木の間隠れに瞥見される光景であつた。磔の敷き詰められた傾斜路を登り切ると、そこには白塗りの正門が、左右に開かれて居る。門内には鬱蒼と茂つた樟の大樹があつて、それが玄關前の、剪^は鋏^の跡も鮮かな灌木と相調和して、見るからに平和な、何となく神々しい雰圍氣をつくつてゐる。

——熊本回春病院だ。

黙々として眼の前に突立つてゐる由布岳を前にして、峠の道で、母と泣いて別れた後、青木恵哉が辿りついたところは、熊本回春病院だつた。

回春病院の生活は、青木には、楽しいものであつた。彼はそこで信仰の道を知つた。人間以上の或る大きな力が、自分をつかまへて居ることを、深く知つた時、闇い心の中にも、何時と

はなしに、明るいものが生じて来た。「生きることの悦び」が、日光の下に崩え出る若草のやうに、憂鬱な胸の中にも、芽生えて来るのであつた。

回春病院の明け暮れは、青木に取つては、楽しいものであつた。

併し、青木が漸やく、療養生活にも慣れて来た頃であつた。或日青木は、悲痛な一通の手紙を手にした。それは、母の死亡の知らせであつた。

「お母さんは、二三日前から、心臓を悪くして臥て居たが、とう／＼昨晚、死んでしまつた。別に言ひ残した言葉とてもなかつた。たゞなくなる一時間ばかり前に「恵哉、恵哉」と、二口ばかりお前の名を呼んだ丈であつた。……葬式も、こちんまりと済すことにしたから、お前は、わざわざ歸るには及ばぬ」

手紙には斯うしたことが書いてあつた。それはたゞ義理で書かれた文字に過ぎなかつた。兄の手蹟であつた。

青木は、此の手紙を受取つた時の、悲しかつたことを、忘るゝことが出来なかつた。

「お母さん、お母さん」

青木はまるで子供のやうに、幾度も／＼母をよびながら、裏山に這入つて泣いたことをおぼ

えて居る。母が死んだあくる年には、こんどは父が死んだ。此時は一週間ばかり経つてから、葉書で知らせて来ただけであつた。父の死んだ知らせを受取つた時には、母が死んだ時のやうに泣かなかつた。此時は、たゞ無茶苦茶に、兄の冷淡なやり方が、腹立つてたまらぬのであつた。

『あゝいよくこれで、古里とも、縁が切れてしまつたのか！』

青木は沁々とさう思つた。それは此上もなく寂しいことではあつたが、併し、それからすつかり、心は落ついて来た。

けれども、その頃青木は、どうすることも出来ない煩悶に陥つてゐた。

それは、同じ病院に入院してゐる、正子といふ若い婦人に、ひそかに、思慕の情を燃してゐたのであつた。

正子は二重瞼の可愛い娘であつた。厚化粧でもしてゐると、とても病者とは思へない程の、綺麗な容貌であつた。神經癩の、それも、極めて軽症な方であつた。

青木と正子とが親しくなつたのは、青木が、母の訃報を手にして、深い悲嘆に沈んでゐる時であつた。

早咲の櫻の色が、ほろ／＼と散りかけてゐる黄昏、しよんぼりと庭園のベンチに腰かけて、

もの思ひに沈んでゐた時、

『青木さん、あんまり悲しむもんじやないことよ。いくら悲しんだつて、一度死んだ人が、またと歸つてくることはないからね。元氣を出すことだわ』

そつと近づいて、斯う言つて慰めてくれたのが、正子だつた。それから自分も、こゝに入院してから、間もなく母を失つたことや、兄の冷淡な仕打などを、それからそれへと話してくれるのであつた。彼女は沖繩縣の首里の、身分ある家の娘であつた。年は青木より三つか四位は上であつた。

『……いまと何をか言はんたいちど

かなはば母とかたりたきものを

歌としてはつままないかも知れないけど、こんな歌を作つた私です。とても、とても、母が戀しかつたのです。けれども、とう／＼、母には別れた切り、一目も逢へないで、死なせてしまつたのよ。ほんたうにもうあの頃は、首でもくくつて死にたいと、どんなに悲しんだかわかりませんでしたわ。けれ共、病人には病人としての、生きて行くつとめがあると考へては、やつとこさで、死にたい程のかなしみに打堪へて来た私です。——ねえ青木さん、あなたはまだ

若いよ。それに決して重症だといふんじゃないし、氣を取りなほして、強く生きて行くこと
ですわ』

かうしたことを、繰り返しく言つては、慰めてくれるのであつたが、青木は、恰度姉に
も慰められるやうな心になつて、はては甘えてみたいやうな氣さへするのであつた。

『あなたと私は、よく境遇が似てますわね』

正子はこんなことも言つてくれた。

田舎の裁縫女學校に一年だけ通つたのであつたが、そのうちに病氣が出て、それから間もな
く郷里を去つたといふことであつた。

『何もかも、よく、似てゐる』

青木も心からさう思つた。

それから、二人は、よく話すやうになつた。庭園の芝生の上に坐つたり、櫻の下を歩いたり、
或は縁側に腰かけたりして。

青木はいつの間にか、正子を戀ふてゐる心が、自分にあることを、はつきりと知るやうにな
つた。

『俺は戀をしてゐる！』

さう自分で悟つた時は、とても苦しかつた。それは、つね／＼『癩病人同志は、戀はしては
ならない』と言ふことを、考へてゐたからであつた。

戀愛——結婚——出産……そして、癩病人を両親として生るゝ子供が、どんな運命の下に在
らねばならぬかを、冷やかに考へるとき、思はず、ぶる／＼と全身に戦慄を覺えるのが彼であ
つた。

而も、回春病院は、宗教上の關係から、絶対に病者同志の結婚を許さない立前たてまへになつてゐる。
『戀愛は美しいものかも知れぬ。併し、それが他の運命にまで、癒いすことの出来ない傷を與ふ
ものであるならば、絶対に、これには打克たねばならぬ』

とさう考へては、胸の奥から込みあげてくる強い感情を、ぐつと抑へつけるのであつたが、し
かし、青木に取つて、それは苦しい／＼闘ひであつた。

理性と感情——靈と肉——本能と理想——此の二つのもの間に立つて、人知れぬ苦悶を重
ねなければならなかつた。

或時は、矢も楯もなく、一切のことを正子に打あけやうとしたこともあつた。或時は、絶対に正子と會話することさへ、やめてしまはうかと考へたことさへもあつた。併し結局のところその何れも、實行が出来なかつたのである。

苦しい辛い心の闘ひは、二年間近くも續いたのであつたが、もう堪へられなくなつた青木は、或る夜漂然として、回春病院から、姿をかくしてしまつたのであつた。

そして汽車にも乗らず、とぼとぼと歩きながら、熊本から阿蘇山の下をとほつて、豊後の竹田へ出て、それから別府へと行つた。

阿蘇山の麓の宮地の宿屋で、彼は回春病院の院長と、同室の徳田と、それから正子にあて、簡単な手紙を書いた。

「暫らく郷里に歸つて來ることに致します。無斷で出ましたことをお許し下さい」と言ふのが院長へあてた手紙であり、徳田には

「心の苦しみを癒すために、しばらく旅に出る、行く先は内密で知らせるから、他言しないでくれ」と書いた。

正子に對しては、幾度も紙を破つた後で、たゞ和歌を一首、書き送ることにした。

たえがたき憂を内に持つごとし

煙も吐かで眠る火の山

別府で數日を通した青木は、なつかしい古里の山を遠くに望みながら、四國行の船に乗つたのである。

それからであつた、長い、遍路の生活がはじまつたのは。白い衣を着て、眞深に笠をかぶつて、鐘を鳴らしながら、札所々々を巡り行く自分の姿を、青木は、どんなに涙ぐましい眼で見たくも知れなかつた。ところが恰度二年目であつた。徳島の裏町の木賃宿で、回春病院の徳田から貰つた一通の手紙には、正子の死んだことが書いてあつた。

『正子さんは、君の噂をしよつちゆうしてゐたが前からいたためてゐた肺の方が、急に悪化して二ヶ月ばかりも床についてゐたが、たうとう死んでしまつた』

斯うしたことを書いたあとで、徳田は、

青木君、

僕は君の胸中に深く秘められた或る悲しみを、全く知らないではありません。君の純情と、正直さが、どんなに君を苦しめたかを、私は充分に知つてゐます。併しもう正子さんはゐな

いのです。若し正子さんの死を無意味に終らせたくないなら、もう一度病院に歸つて、こゝにゐる幾多の氣の毒な人々のために、奉仕をしたらどうでせう。——正子さんの骨は、首里の實家からは誰も引取りに來ないから、そのまゝ回春病院の納骨堂に入れてあります。と、書いてゐた。

『あゝ、たうとうあの人は死んだか！』

暫らくの間は、ぼんやりと、手紙をみつめてゐた青木は、やがて、疊の上に顔を埋めて泣くのであつた。思ふ存分涙のありつたけを泣くのであつた。——そしてその日、直ちに徳島をあとにした彼は、ふたたび回春病院へと歸つたのであつた。

再び回春病院の生活が始まつたのであつたが、その頃から、彼が耳にするやうになつたことは、沖繩の癩に關する話であつた。

『日本には、公認された癩者が一萬五千もある』とは、青木たちが、しばしば聞かされたことであるが、併し、青木たちは、斯うした數が、あまりあてにならないことを、よく知つてゐた。これは普通、人目に立つものだけであつて、素人眼にわからぬ者が、どれだけあるかも知れないことを、彼等はよく知つてゐた。それが三萬人か、五萬人か、兎に角公認された以外に、三

倍以上の病者があることは、まちがひなしと言ふのが、彼等病者達の言ふ所であつた。

そして、此の公認された一萬五六千人の中で、いちばん多いのは沖繩であつた。沖繩では、一萬の人口に對して、十五六人は居る計算である。全國平均は、人口一萬に對し、約二人と云ふことになつてゐるが、沖繩はその平均數の七、八倍もあることになつてゐる。而も、徳田に言はせると、沖繩の癩者は、いづれも年齢が若いと言ふことである。

『それに、沖繩では、此の病氣に罹ると、實際非道い目にあはされるよ。いよいよ病氣といふことが、はつきりと判ると、村中の者が強迫して家を追出すのだ。追出された者は、結局乞食になる外に、おちつくところは無いのさ。——だから、沖繩では、一度此の病氣にかかつたが最後、死刑の宣告を與へられたも同様なことだ』

徳田は、顔をしかめながら、恐ろしい回想に耽るやうにしては、よく斯うした話を青木にするのであつた。

回春病院には、毎年四人か五人ぐらゐ、沖繩から入院者があつたが、その度に青木が聞かされたことは、沖繩の病者が、陰惨な生活を送つてゐることであつた。

かうした話を聴く毎に、青木の心は、しめつけられるやうな、一種の壓迫を、覺えさせられ

るのであつた。

彼はだん／＼と、沖繩に引きつけられるやうになつた。

青木は、幼い時に聞かされた、美しい龍宮城のお伽噺を思ひ出した。浦島太郎や乙姫様が現れたり消えたりした。

そして此の物語にある龍宮城を、琉球の王城ではないかと考へてみたりした。琉球は傳説の國であり、ローマンズの國であつた。

『此の美しいお伽の國に、多くの同胞が、癩のために苦しんでゐるのか！』

さう思ふ眼のまへに、ありありと浮んで來るのは、なくなつた正子の、二重瞼の、厚化粧した、上品な顔立であつた。

『正子さんは白骨となつても、沖繩に歸ることを、拒まれたのか！』

青木には、あの美しい正子の靈魂が、何處かにさ迷ふて居るやうな氣さへされた。

そして何時とはなしに、沖繩と正子と、それから自分と、此の三者の間に、斷絶することの出來ない、何か宿命的なつながりがあるやうな思ひさへされるやうになつた。

斯うした思を持つてゐるところへ來たものは、那覇の地に居る、荒砥啄哉といふ老牧師の手

紙であつた。

荒砥老牧師は、もと回春病院附屬教會の牧師職であつたが、沖繩の癩病人の間に宗教運動をしなければならぬといふ、強い責任感に動かされて、七十歳を五つも出た齡でありながら、數年前より沖繩に渡つて居る人である。

荒砥牧師の手紙には、沖繩の癩者の窮狀がこまごまと書かれてあつたが、その中には、『癩者のために働らく者は、どうしても癩者でなくてはならない、私は諸君の中から、驟然と奮起して、此の地へ渡り、熱心に奉仕する勇者のあらはれんことを待つてゐます』との數行の文字が書いてあつた。

此の手紙は全患者にあてゝ書かれたものであつたが、此の手紙を讀んで、どうしても、ちい／＼として居られない心をおこしたのは、青木恵哉であつた。

『若し、俺が何かの役に立つなら、沖繩へ渡り度いものだ。——ああ、或は正子さんの魂が俺を呼ぶのかも知れない！……どうせ死んだ筈の俺だ、ひとつ沖繩の同病者のために、生命を投げ出してみやうか！』

さう思ふと、安閑として、自分だけが、此の病院で、療養生活をつづけることが、罪惡のや

うにさへ思はれるのであつた。

やがて熊本を後にする日が来た。黒眼鏡をかけて、マスクを口にし、手袋をはめた洋服姿の青木が、沖繩行の三等船室の中にこつそりと身を潜ませてゐたのは、それからまもなくであつた。『あゝ、たうとう俺は、沖繩へ来てしまつたのだ。——俺が自分勝手にやつて来たんぢやない、沖繩が俺を喚んだのだ、正子さんが俺をよんだのだ。……これから、俺はどうすればよいのだ？ 生命がけになつて、氣の毒な同病者たちに、奉仕をさせていたゞくのだ。悲しめる友は慰めてやらう、失望してる人間には希望を持たせてやらう。——俺は、沖繩の病友と一緒に、うんと苦しんでやらう！』

——ながい回想の中から、太い溜息を吐いた青木は、頭上に光る星を仰ぎ乍ら、ひとり斯う呟いた。

祈り度くなつた。——星が祈つてゐた。

彼は、自分の眼の前にひろがつてゐる海をながめながら、又壯嚴な空を仰ぎながら、これから自分が進んで行く道が、決して平坦な道でないことを考へた。

『俺は喜んで沖繩の人柱とならう！』

斯う腹の底で決心すると、しづかにまた渚傳ひに、アダン林の小屋へと歩いて行つた。親子はふたりとも、ぐつすりと、眠つてゐた。青木はそおつと、少年の横に、體を横へた。

蓆を蒲團にして

その翌日から、青木は、アダン林の中の小屋を中心として、病者の訪問をはじめた。仲村渠父子（アダン林の家の親子は、父親を仲村渠元次郎と言ひ、息子を元作と言つた）は、青木の先頭に立つて、次から次に、病者の家に案内した。

病者たちは、殆んど海岸一帯にわたつて、住んでゐたのであつたが、どれもこれも、不潔と貧乏とで、眼もあてられぬ有様であつた。

一週間餘りの間に、二人が訪問した病者は、百人を越えてゐた。

『これでは、沖繩の病者は、どれだけあるか、一寸見當がつかかぬな』

青木は、てく／＼と歩きながら、つく／＼とさう思ふのであつた。殊におどろいた事は、患者の多くが、何れも年齢の若い者であることであつた。十二三歳より三十歳前後の者に、殊に

病者が多かつたのであつた。小屋より小屋へと訪問をつづけながら、心の疼みを抑へることが出来なかつた。

そしていろ／＼と考へた結果、理髪器を一式買ふことにした。病者たちは、何れも頭髪が蓬々と伸びて、中には肩のあたりまで長髪を垂らしてゐる者もあつた。

心を綺麗にする前に、先づ體を綺麗にしてやることだ。——青木はさう考へたのであつた。理髪器はすぐ手に入つた。那覇の荒砥牧師から、箱に入れて、小包にして送つて來た。

理髪道具が手に入ると、もう其日から、仕事が始まつた。彼はすぐに、仲村渠父子の髪を刈つてやつた。父親の元次郎も、息子の元作も、きれいなくりくり坊主になつた。

髪を刈つてやると、元作は、急に可愛い少年になつた。

『元作、お前はこれから、小父さんと一緒に、床屋さんになるんだぜ』

青木はそれから、元作をつれて、俄か仕立の巡回散髪屋となつた。

小屋を出やうとする時、青木は、『さうだ、ついでに、竹箒を一本持つて行くことにしよう』と、竹箒を元作に持たせることにした。

『小父さん、どうするのかい、この箒は？』

元作は目を丸くして青木に聞いた。

『いまにわかるさ』

青木は機嫌よく、右につりあがつた口の邊りに軽い笑を浮かべながら、さつさと歩いて行つた。

『ゐるかい上與那原、今日は髪刈つてやるぞ』

海岸の土手下に降つて、掘立小屋の中に斯う聲をかけると、中からこそ／＼と這ふやうにして出て來たのは、顔中紫色の結節におほはれてゐる男であつた。

『髪も伸びてるが、家の中も汚ないな。さア手傳ひをするから、ちと清潔にしようぢやないか』

青木はさう言ふと、もう箒を手にして、さつさと掃除をはじめるのであつた。小屋の中は臭氣がむつとしてゐた。床の上に敷いてある筵まではぐつて、一とほりの掃除をすると、

『これからが散髪だ』

と、元作を助手にして、器用に、バリカンの柄を動かすのであつた。

そして、くり／＼坊主が出來あがると、しんみりと、

『たとひ體は腐つても、魂までは腐つてはいけないぞ。人間には誰にでも、天の使命といふものがあるもんだ。決して悲觀してはならないぜ』

と、論してやるのであつた。

上與那原は、發病と共に、自分の部落から追ひ出された若者であつた。時々母親が、人眼をさけながら、こつそりと食物を持つて來て與へてゐた。

上與那原の小屋を去ると、二人は、竹箒と理髮器具とを携へて、こんどは、そこから稍離れたところにある、墓場の方へと歩いて行つた。

陰氣な墓場をつきぬけて行くと、そこには、死人を入れる棺桶でつくつた、マッチ箱みたいな小屋があつた。そしてその前の大きな石には、一人の老人と、その娘らしい女とが、黙然として腰をかけてゐた。

『今日は』

青木は出来るだけ快活な聲で呼びながら、ふたりに近づいて行つた。

『爺、御姉、達者かい？』

竹箒を擔いだまゝ、元作も、元氣のいゝ聲で挨拶した。

ふたりとも黙つて顔をあげた。

爺は青木を見て、心持ち顔を和らげた。娘は眼の中に、一寸うるほひを見せただけで、すぐ

にぐつたりと頭を垂れた。

『温いすね』

青木はまた、此頃うろおぼえに憶えたばかりの琉球語をつかひながら、顔中に笑を浮べて二人の前に立つた。

そしてつくづく、ふたりを観察した。父親はひどく老けては見えるが、まだ老人といふ年ではないやうだ。餘程の重症と見えて、顔は全面紫色にふくれあがつてゐる。そして左膝から下の皮は、すつかり剥がれて、赤い肉がはみだし、足の趾まで赤くむけて腫れて居る。

娘も癩結節でふくれあがつてゐる。髪はほとんどなくなつてゐる。赤ちやけた髪が、指でつまむぐらい、ちよこんと残つてゐるのを、それでも手際よく結んで、細いかんざしまでも差してゐた。しかし餘程疲れてゐると見えて、父親の世話をする勇氣もなく、たゞ黙然として石の上に尻をおろして居るのである。

『悲惨だ！』

數年間、或は熊本の病院で、或は四國の旅で、醜くきものゝ數々を眺め盡したつもり青木も、流石に此の二人の前に立つては、言葉もなく、茫然と突立つ外はなかつた。

『何か食べたかい』

と、やさしく耳元にさゝやいてみた。父親は力なく、首をわづかに振つた。

『いつから食べないでゐるの』

今度は娘に聞いてみた。

『昨日の晝から』

娘はこれだけ言ふのも關の山のやうであつた。

青木はあたりを見廻した。ババィアか、バナナがありはしないかと思つて。

『俺、ババィアのあるところ、知つてるぜ』

元作がはづんだ聲でさう言つた。

『なに、ババィアの木を？ さうか、何處にある？』

青木の聲もはづんでゐた。

『此の山のうしろだ』

『果がなつてるかも知れないぞ。お前急いでもいで來ないか』

うん、——行つてくるよ』

元作はさう言ふと、もう駈け出してゐた。それから三十分ばかりも経つと、ふところを一杯ふくらませて、息を切つて、飛んで來た。

『あつたぜ、小父さん、たつた一つだけだが……』

元作は如何にも嬉しさうに、ふところから、大きな木瓜を一つ取り出した。

『誰にも見つからなかつたんだい』

少年は得意らしかつた。

青木は微笑しながら、ババィアの果を、二つに割ると、父と娘の手に一つづつ握らせた。

『遠慮なく食べるがよいぜ』

さう言ふと、二人は、如何にもうまさうに、皮まですつかり食べてしまつた。

『あしたから、飯を持つて來てやるから、安心してゐるがよいよ』

さう言ふと、父と娘は、一語も言はずに、たゞ頭をさげるのみであつた。

娘が何か口の中でもぐもぐと琉球語で言つた。

『え、どうしたの』と、元作が聞き返した。

『くうてえん、ぬめえやあんで、うむやびいん……』

青木には、その意味が、さつぱりわからなかつたが、元作は、

『あゝ水がほしいのかい』

と言ふと、元氣よくそこを離れて、小屋の入口にかけてあつたひしやくを手に取ると、すぐに傍の流れから水を酌み取つて、娘の手に握らせてやつた。娘はがぶ／＼と、息もつかずに飲み干した。

『爺も飲みたいだらう』

斯う云ふと少年は返事も待たないで、又ひしやくにいつばい酌んで、父親の手に與へた。

『では、いまから、髪を刈つてあげやうね』

青木は父親のうしろに廻つて、バリカンを動かし始めた。伸び放題に伸びた髪の毛は、ところ／＼、ふけて團子のやうに固くなつてゐた。

父親は黙々として、白い前がけの上に、ぼろ／＼と落つる髪の毛をながめて居た。

元作は小聲で、鼻唄をうたひながら、アダンの葉で、臭い膿にたかる蠅を追つてやつた。

『さアこれで氣持がすつかりよくなるぜ』

青木はさう言ひながら、がし／＼とふけを搔いてやつた。

『あゝいゝ氣持になりました』

始めて老人は心から嬉しさうにさう言ふのであつた。父親は宮城龜十と言ひ、娘はかまどといふ名であつた。娘は三十歳だといふのであつたが、父親の方は、年はいくつか分つてゐなかつた。

その翌日から、青木は、棺桶の家に住んでゐる龜十父娘に、握飯を運んでやることにした。

『さア、飯が来たよ、早く食ワシヤガレべなさい』

斯う言つて渡す握飯を、父も娘も、掠ふやうにして手に取ると、息もつかずに食べるのであつた。

併し、食事が済むと、二人共一言も口を利かないで、たゞつくねんと、坐つてゐるだけであつた。蠅はいつも、黒くたかつてゐた。臭氣は日一日と、ひどくなるばかりであつた。

青木は、何とかして、談話をさせやうと、いろ／＼と話しかけてみても、ふたりはたゞ、頭を動かすか、又は止むを得ない場合に、簡単に言葉を發するかぐらゐであつた。それも、とて

も大儀さうに見えた。

三度々々、飯を運んでやることは、多少厄介な事ではあつたが、併し、たゞ一つの握飯を、唯一の楽しみとしてゐる、此の氣の毒な親子を考へると、棺桶の小屋へと、引つけられるやうにして、飛んで行くのであつた。

年末が近づいてから、急に冷い風が吹き出した。毎年九月頃から、支那の高氣壓が發達するために、それより吹き出す北東の季節風が卓越して、強風に達することが、珍らしくないのである。

今年は例年の季節風が、おくれて來た爲めか、いつそう寒さが、強く感ぜられた。

風は毎日々々、冷い塊を、大地に叩きつけた。

沖繩に來、最初の強風に吹つけられた爲か、青木はすっかり弱つてしまつた。手足が冷え、づき／＼と、關節が痛み出した。

『小父さん、今日は爺と御姉の握飯は、俺が持つて行つて來やう』

顔をしかめながら、づきづきと痛む手足をさすつてゐるのを見て、横からさう聲をかけたのは元作であつた。

『さうしてやれ元作。けふはお前が一走り、行つて來ることだ』

父親の元次郎も、澤庵をごと／＼切りながら、へつ／＼の横から、さう言ふのであつた。

『それじゃ元作、御苦勞じやが、一寸行つてもらはうか』

青木は、少し熱ばんでゐる額に、手をあてながら、元作の方を振り向いた。

元作が出かけやうとすると、青木の言葉が後から追かけた。

『ばかに寒いから、俺の外套をひつかけて行くがよいぜ。寒冒を引いちや、つまらんからな』

『いゝんだよ、小父さん』

と、言ひながらも、元作は、きまり悪さうに、青木の外套に手を通すと、いそ／＼として出て行つた。

元作が出て行くと、急に疲れを感じて、ぐたりと、そこに倒れた。

『氣分が悪さうだな。要心しないといけませんよ』

元次郎は、そつと傍に坐つて、しげ／＼と顔を覗き込んでゐたが、やがて筵を持つて來て、青木の體にかけてくれた。

彼には、斯うした元次郎の親切が、とてもうれしかつた。毎晩三人でかぶつて寝る席の下に、

久しぶりで、らくらくと手足をのばしたのであつたが、しかし、鋭い寒さが、ぞくぞくと脊髄の中まで沁み込んで来るのを、どうすることも出来なかつた。

『此の一枚の筵で、此の冬を越すことは、實際無理だ。何とかして、薄いのもよいから、布團を一組求め度いものだ』

蓆の下でさう考へながら、財布の中に這入つてる金を胸算用してみた。回春病院の三宅院長からは、毎月二十五圓づつ、送つてくれることになつてゐる。そして、此の十二月分も、すでに受取つたのではあるが、中村渠親子と龜十たち二人と、それに自分と、五人の米代の外に、理髪器を買つたり、繻帶材料を少々買つたりしたので、もう財布の中には、ほとんど金は這入つてゐない筈である。

そつと懐中をあけて中をのぞいてみたら、がまぐちの中には、紙幣の外に銅貨まで合せて、三圓足らずしかはいつてゐなかつた。

『これじや布團どころか、まごまごすると、米代もないことになるぞ』
青木は太い溜息をついた。

『だが、此の寒空に、筵一枚を布團にして、掘立小屋の中に寝る者は、實際自分たちの外に、

何百人、否々、何千人あるかも知れないではないか。自分達三人だけが暖かな思ひをしても、あとの澤山の兄弟たちが、つらい目にあつてるんじや、何にもならないのだ。あゝ何とかして、ぼろでこさへたものでもよいから、せめては布團の中に、ゆつくりとやすませてやり度いものだ』

そんなことを、ひとり考へながら、ついうと／＼となりかけた時であつた。

『小父さん、大變だ、大變だ』

と、けたたましい聲を挙げながら、小屋の中に飛び込んで來たのは、元作だつた。

『どうしたッ』

青木はさう叫ぶと、むつくと、體をおこした。

元作の唇は色を失つてゐた。

心臓がはちきれさうに動悸を鼓つてゐることは、外から見ても、すぐに分つた。

『どうしたッ、えつどうしたッ？』

青木は、ぐつと力まかせに元作の肩をつかんで責めつけるやうにさう聞くと、
『死んでるよ、死んでるよ、——あの、あの……爺が、し、死んでるよ……』

『なにッ、爺が死んでる？』

棍棒か何かでぐわんと叩きつけられたやうになつた青木は、出来るだけ落つていた、静かな聲で、もう一度尋ねた。

『ねエ元作、お前はいま、爺が死んでると言つたんだな。それは一體ほんたうなのかい。よろ落つて、小父さんに、話しておくれ、ねエ、——ねエ』

ゆつくりとした、おちついた聲に、元作はだんだんと、胸の動悸がしづまつたやうであつたが、

『爺は、ほんたうに、死んでるんだよ、ほんたうに！』

元作は、眼の前に、まさしくと、悲惨な光景を描き出すが如くに、話し出した。

——青木の外套を着込んだ元作は、すつかり得意だつた。彼は父親がこさへてくれた握り飯が、少しでも冷ないやうにと、ぼろ／＼になつた布呂敷にくるんで、それを外套の内側に入れて、自分の体温であたゝめるやうに氣をつかひながら棺桶の家へと近づいて行つた。

元作は、爺と御姉とが、不自由な手に、巧みに握飯をつかみながら、おいしさうに食べる有様を想像しては無精に嬉しかつた。

『よろこぶだらうなア』

獨ごちながら、棺桶の家の中を覗いた瞬間、思はず元作は、『うあつ』と低く叫んだ儘、そこに棒立になつて仕舞つた。

爺の體は、床の上に、仰向けになつてゐた。その側には御姉のかまどが、失神したやうに、ぼんやりと坐つてゐた。

寒さが襲ふて來てから、父親の龜十は、急に弱つて來た。それは娘のかまどの眼にも、あり／＼と見ゆる程であつた。北風が毎日吹きまくつて、好きな日向ぼこも出來ないために、此頃龜十もかまども、すうと狭くらしい小屋の中に、横になつたきりであつた。

ところが昨日の夜——。

突然龜十は、『青木のどこへ行く』と言ひ出した。そして不自由な體を無理に動かすのであつた。

娘は一生懸命にとめた。けれども父親は、どうしたことか、いつもに似ず、頑固だつた。しかし實際のところ、父親の體は、自由が利かなかつた。

父親に急變が來たのは、さうしたことを口走つてから、二三時間の後だつた。

父親は胸を抑へて、『痛い』と言つた。

それつきりだつた。そして、それからずうと今朝まで、すっかり氣力を失つてしまつて、魂の抜けがらみだけに、黙つて屍の傍に坐つてゐるのが、娘のかまどだつた。

『小父さん、こんなわけだよ。今からすぐに、御姉のそこへ行つておくれ。——御姉も死ぬるかも知れんから』

元作にさう言はれて、青木はやつと立あがつたが、脚がふら／＼して、思はず前にのめらうとするのを、危く踏み堪へた。

外へ出ると、風の勢は、急に強くなつた。青木は眞正面から吹つける風に、まつすぐに顔を向けたまゝ、づき／＼と痛む脚を、引づるやうにして、墓場の方へと急いだ。元作と父親の元次郎とは、青木のあとから、鼻をちゆん／＼吸りながら、くつついて來た。

龜十はおだやかな貌をして眠つてゐた。おそらく龜十に取つて、最上の晴衣と思はれる單衣が、顔から體の方へかけて、すつぽりとかぶせてあつた。枕もとには、小さな箱を伏せて、その上に、さつき元作が持つて來た握り飯が、小皿に乗せて、ちよこんと供へてあつた。

青木を見ると、かまどは急に泣き出した。青木はかまどの肩に、靜かに自分の手を置きなが

ら

『ねエかまどや、何も心配することは要らぬよ。もう病氣の苦しみはお父さんにはないんだよ。お父さんは安らかになつたんだ。お前はこれから、儂が世話してやるから、安心してゐなさい』

やさしく言へば言ふ程、かまどはいよ／＼泣くのであつた。

『爺はいゝ人間だつた』

元次郎は、何度もなんども著物をめくつて、龜十の顔を覗きながら、同じことを繰返すのであつた。

元作は何處からか、雑草の花を摘んで來て、爺の枕もとに飾つてやつた。花はまつかな花であつた。

龜十の死は、間もなく附近の癩病者たちに、それからそれへと傳はつた。晝頃になると、二十三人の男や女たちが、あたりをはゞかるやうにして、山陰の墓場へと集まつて來た。そして黙々として葬りの準備にと取かゝるのであつた。

二三人の男たちは、附近の藪の中から、棺桶のこはれた板片を寄せ集めて來て、それでお棺をつくりはじめた。釘がないので困つてると、乞食をしてゐる男が、二十本ばかり使つてくれ

といつて、そこに持つて来た。

困つたのは墓である。

沖繩では、納骨堂然たる横穴式の墓に、棺を納める風習になつて居る。しかし此の貧しい類者は、自分の骨を納める墓を有つてゐなかつた。

止むを得ないから、人々は他府縣でやるやうに、土葬することにきめた。

元氣な若者たちは、附近の、大きな福木の根元に、穴を掘ることにした。

女たちは、何處から探し出して来たか、大きな薬罐やぐわんに湯を沸した。

みんなは、ふう／＼言ひながら、あつい湯を、てんでに飲むのであつた。

やがて一とほりの準備が出来上ると、青木は、かまどと、元次郎父子を手傳はして、納棺をすることにした。彼はシャツ一枚になつて、龜十の體を、湯できれいに洗つてやつた。全身癩結節に犯されてゐる龜十の體を、叮嚀ていれいに洗つてやりながら、青木の心はかなしかつた。

『俺は今から青木さんとこへ行つてくるんだ。そしてもつと綺麗な體にしてもらうんだ』死ぬる數時間前に、娘のかまどに、斯う云つたといふ話を思ひ出したのである。

『爺、これで、さつぱりしたらうねエ。ほんたうに長い間、氣持が悪かつたらうなア』

全身を乾いたタオルで拭きあげてから、青木はしみ／＼と、龜十にさう言ふのであつた。かまどは何時の間にか、小さな袋を拵へて、父親の首にかけてやつた。そして、不審がつてゐる青木に、

『これはお父さんに持たせてやるものです。この中には栗と縫針とが入れてあります。栗は冥途迄の父の食物です。それから針は、途中で咽喉が渴いた時に、水と替へて飲むためです』かう言つてかまどは眼をしばたいた。青木はそれが、沖繩の古い習慣であることを、さつた。だが、父の死の旅を思ふ娘の、唯ひとつのおくり物を、迷信だといつて、笑ふことは出来なかつた。

棺の中には古新聞紙が一杯貼りまはしてあつた。

青木とかまどは、龜十の體を抱くやうにして、棺の中に納めた。棺は青木の注文によつて寝棺につくつてあつた。手の自由な青年が、器用に、棺桶の蓋たかを、釘で打つけた。

棺はみんなの手で大きな福木の下まで運ばれた。青木は葬むりをする前に、静かな聲で、そこに居る一同の者に、『人間はたとへ肉の體は死んでも、靈魂は永久に消えてなくなるもんぢやない』と、話をしたのであつたが、咽喉がつまつて、思ふ半分も言へなかつた。

棺桶はしづかに墓穴の中におろされた。かまどは、チャーチャーと、しきりに父を呼ぶのであつた。

『これから後、此の沖繩で、私はいくつのお葬式を出すのだらう？——何一つ此の世では恵まれないで、ただ貧と病苦の間に、墓場へとくだつて行く私の同胞は、何といふ惨めなものであらう！——そして私の仕事は結局墓掘りだけだ……』

と、青木は深いため息と共に、考へるのであつた。

『——しかし、私の仕事はたゞそれ文をしてをれば、それでいゝんだらうか。……いや、それ文では相済まぬ。どうしても病者たちのために、もつともつと、住み心地よい天地を造つてやらなければ、うそだ。あゝ何故日本には、救癩の運動が、もつと熾さかに起らないのだらう』

小さな土饅頭の前には、花がたむけられた。

『龜十、やがて又逢はうぜ、今度は俺の番かも知れないよ』

一人の老人はしみじみとさう言ふのであつた。

風はいつの間にかをさまつてゐた。福木の棺はしづかであつた。そして、もう夕暮が、こつそりと足もとまで来てゐた。

新しき任務へ

その翌日十二月三十一日の夜、青木は思ひがけなくも、名護を後にしなければならなくなつた。昨日、龜十の葬式の際に、自分の信仰に基いて魂の永生のことなどを説き明したのであつたが、それがどうして傳はつたか、警察署の忌諱に觸れたのであつた。青木はその朝警察に喚ばれていろ／＼と問ひたゞされたので、自分はたゞ基督教の布教の目的で病者の間につくしてゐることを説明して、警察の誤解を解かうとつとめたが、警察の方では即時に名護よりの立退きを要求して譲らぬのであつた。かうして止むなく、青木は名護の町を去ることとなつた。

中村渠なかにし親子と、三四人の病者達は、名護の町はづれまで、見送つて來た。

彼らは握飯と澤庵漬と、それから紙片に包んだお饒別の金とを、嫌がる青木のポケットに、無理につつ込んでくれた。

青木は、一人々と握手して、さよならをした。

三ヶ月前に、希望を抱いて歩いて来た同じ道を、今は失望に近い思ひを以て、とぼとぼと、那覇へと引上げて行くのであつた。

餘程歩いてから振りかへつてみると、そこにはまだ、元次郎たちが立つて居た。

『小父さん』

と呼ぶ聲がした。元作の聲だつた。

『おうい』

と、青木も、手を舉げた。

石をもて追はるゝ如く古里を

出でしかなしみとはに忘れじ

學生時代に讀んだ石川啄木の歌が、いつとはなしに唇にのぼされて来た。青木はなんども何度も、『石をもて追るゝ』の歌を口ずさんだ。

胸の中には深い寂しさがあつた。

それに關節は相變らずきくゝと、ひつきりなしに痛んだ。

ポケットに手をつつ込んで、さつき饒別にとて貰つた金を、掌の上にひらいてみたら、一錢

銅貨や五錢の白銅や、中にはしはくちやになつた十錢の紙幣など合せて、みんなで壹圓ばかりあつた。

壹圓の金は泣き度いやうに嬉しかつた。彼は二度も三度も、その金包みを押いたゞいた。

『今に見ろ、俺は此の金を、三十倍、六十倍、百倍にして、あの氣の毒な病友たちにかへしてやるから！』

こんなことを考へると、眼がしらは、あつい涙で一杯になるのだつた。

しかし今は感傷的な氣持になつてゐるわけには行かなかつた。一刻も早く那覇へ行つて、荒砥老牧師と、今後の仕事について、相談をせねばならなかつたのである。

眠くなると、石の上でも、草の上でもいとはず、すぐに横になることが出来た。放浪の生活には慣れてる體であつた。

那覇に着いたのは、正月二日の朝であつた。

荒砥牧師は、まるで我が兒が歸つて来たかのやうに、喜んで迎へてくれた。

『何はおいても、先づ食ふことと飲むことだ』

荒砥牧師は、いそ／＼として、食事の準備をするのであつた。お正月だと云ふので、形ばか

りの雑煮も膳の上のぼされた。

老牧師は、折々眼には涙を浮かべながら、三ヶ月間の名護の働らきを聞くのであつた。青木が、警察から追立てを喰つたことを憤慨すると、老牧師は、しづかに諭すのであつた。

『君の氣持は、わしにはようわかる。けれども、抵抗してはいけないよ。どんな時でも、柔和な心を失はないことだ』

青木は、此の老牧師の前には、まだく子供であることを、しみぐくと、感じさせられた。そして、話をしながら、改めて、老牧師の身の周りを、注意深く眺めてみた。二疊の玄關と、三疊の茶の間と、それに六疊のお座敷と——そして、そこに在るものは、一閑の机と、大きな舊新約全書と、折釘にぶらさげた一着の古洋服の外には、何ら目星しいものとはなかつた。

『少しは道具類もあつたが、ほとんど金にしてしまつてなア』

老牧師はかう云つて、ははははと、朗らかに笑ふのであつた。

『失禮ですが、どうして、生活の方はやつてゐらつしやいますか』

『何も彼もが天地のお恵だよ』と、荒砥牧師は言ふのであつた。『家賃は幸ひにも、福岡の教務所から送つてくれるので、心配はいらないさ。ところで月々の入費だが、まア儼ひしには十二三圓



もあれば、腹のへらないだけは出来る。ところが不思議なもので、食ふだけのお金は何處からともなくは這入つてくるよ變なものさな……』

老牧師はまた、ははははと、きさくに笑ふのであつた。

『ところで君』

と、老牧師は、床の間を指さした。

『あのバンフレットが君には目についたかい』

青木は床の間に、どつしりと積んだ小冊子に目をつけた。

『あれは賀川豊彦さんの書いたバンフレットだよ。金森、山室のはどうも古くさいし、それで、賀川さんのを取つたが、わしは毎日々々病者の家を探しながら、あれを讀ませてやるんだよ。こないだ七圓がた買つたが、そのためにわしはとう／＼前後一週間も斷食したのさ』

老牧師はまた快活に笑つた。

青木はつく／＼と、困難を笑で吹き飛ばすことの出来る此人を、羨しく思つた。

荒砥牧師が住んでる垣花町は、漁師を主として、人夫や、労働者等が多く集まつてる町であるが、そこには亦、癩患者が少からず、集喰ふてゐるのである。

青木は暫らくの間、荒砥牧師と共に、那覇の病者たちの爲めに働らくことにした。二人には正月もなにもなかつた。青木は疲れた體を休ませる暇もなく、荒砥牧師と共に、毎日々々、パンフレットを携へて、病者の家を次から次に、訪問して歩いた。

併し、それは日のあるうちは都合がわるかつた。訪問は殆ど夜の仕事であつた。青木は何とかして、自分の寝る場所を、他に探さうとしたが、荒砥牧師はどうしても許さなかつた。「僕といつしよに居たつてよいではないか」

斯う言つて、青木が、他に部屋を求むることを、喜ばなかつた。

『だつて、先生、私は癩のバイキンを持つてる人間ではありませんか。先生と御一緒に居るなんて、そんな不道德なことが、私に出来るもんですか』

と、斯う言つて、しきりに他に行かうとしたけれ共、牧師は

『僕は今、癩病を身に持つてる氣持で仕事をしてゐるんだよ。併しまだ、實際身體は何ともないので、残念ながら世の病友たちに、「我ら病者は」と、思ひ切つて言へないのぢや。「君ら病者は」と言はねばならぬ間は、まだまだ何といつても、ほんたうな仕事は出来ないと考へてる。こんな僕だ。君といつしよにくらすことなんか、何とも思ひはせんよ。ねえ、二人で一緒になつ

て働らかうではないか』

と言つて、仲々、去らせようとはしなかつたので、仕方なく青木は、玄關の二疊を自分の寢室とすることにした。

那覇の病者たちは、名護の病者たちのやうに、單純ではなかつたので、荒砥牧師の布教も、勞多き割には、成績は決して好い方ではなかつた。彼等の生活は、名護に居る者にくらべると割合に樂な者が多かつた。彼らの中には、漁をする者もあつた。行商をする者もあつた。やたい車を引つ張つて、辻の遊廓附近のくらがりで、鳩を賣つてる者もあつた。寄附強要や押賣を専門にする者の中にはあつた。

青木はまた、病者の多いのに、少なからず驚いた。芋づる式に、病者は次から次に見出されて行つたが、此の調子では、どこまでゆくか、一寸見當がつかねたぐらゐであつた。

垣花町の癩病人は、殆んど家を持つてる者であつたが、荒砥牧師の話によれば、此の外に、一定の住みもなく、全く浮浪の生活をしてる者も、少からずあるといふ事であつた。

特に、辻の遊廓の附近から、波の上神社の下、海岸に添ふた墓場にかけて、浮浪癩が巢をつくつてることが、だん／＼と分つて來た。

『どうも、あの連中には、わしはよう手がつけられぬわ。どう言つて近づいてよいものか。さつぱり要領が分らないのでねえ』

老牧師は、頭を掻きながら、人の好い笑ひをするのであつた。

『それは御尤ですとも。あんな仲間には、實際手のつけられぬ連中ですからねえ。少くとも、あれらと、同じ所まで、おちて居る者でなかりや、ちよつと、近寄れませんか』

青木は、自分の使命が、此の浮浪者の間に、這入り込むのにあることを、つくづくと感じた。

『先生、私の仕事は、矢つ張り、あゝいつた者——世間の人からも捨てられ、自分でもどうすることも出来ないで居る人々の中に、もぐり込むことだと考へますが。どうせ、沖繩にさゝげた生命ですもの。ひとつ、今から這入り込んでみませうかね』

或る時、青木は、思ひ切つて、斯う牧師に相談してみた。

『ふうん、それもよからう、ではひとつ、やつてみたまへ』

牧師は、案外すなほに、賛成してくれた。

二月の風の冷い或る日、こつそりと荒砥牧師の裏口を出た青木は、遊廓裏の海岸の方へと、歩いて行つた。

波上神社は、海岸に突出した断崖の上に建てられた沖繩第一の靈社で、伊弉册尊を本宮に、相殿は左に速玉男尊、右に事解男尊の三神を奉祀してある。境内に立つと、周囲の珊瑚礁とケラマ島の風光とを併せて、雄大なる景色を、一望の中にをさめることが出来る。

神社に参拜して踵をかへすと、左手に古色を帯びて立つてゐるのは、眞言宗第一の巨利護國寺である。昔は王の祈願寺であつた。今から五百五十年も前に、日本の僧頼重法印が琉球に渡來して、とゞまつた所であると傳へられて居る。

これらの靈社、古刹の立並んでゐる下は、太平洋の波濤が直ちに打寄せてくる荒磯である。そして波打際から崖下へかけて、びつしりと立並んでゐるのは、大小さまざまな墓である。今しも青木惠哉は、數名の患者に取巻かれて、墓場の入口の大きな芭蕉の下に立つてゐた。

青木『ちや、君たちは、一定の住所もなく、此の邊をぶら／＼、うろついてると言ふのだな』
その一人『わしら、自分の家が欲しいことはきまつてるんだが、何しろ、かうした體では、誰も相手になつてくれませんか』

青木『どうして、食つてるかね』

その二『大概乞食ですさ』

青木「貰ひの方はどうだね」

その三「さつぱりですよ、此頃みたいに景気が悪くつては」

その四「いやあもう、乞食もあがつたりですぜ」

青木「かう見たところ、君たちは生れおちての乞食といふのではあるまいな、矢つ張し、食ふに困つて、いつとはなしに、乞食となつたわけだらうね」

その一「ええ、そりやその通りですよ。第一、親兄弟は勿論、親類先の者までも、相手にしてくれませんかね……」

青木「何處に寝るのかい」

その三「たいてい此の墓場か、遊廓の裏あたりの空屋の中なんかですよ」

青木「警察の方がやかましくはないかい」

その五「そりや矢釜しいですとも、此頃はうつかり町も歩けませんのさ、見つかつたら、追拂はれますからネ」

青木「いつたい、此の那覇には、君らの仲間が、どの位あるかねえ」

その四「さうだなア——どう少く見ても、四五十人はありませうかな……」

青木「ところで、君らの生活といふものは、一體一日に幾何ぐらゐあつたら、やつてゆけるのかい」

「さあ」

と、みんなの者が、ちよつと面を見合せた。

鼻がほとんど、つぶれかけてる男が、かすれた聲で、

「墓場や野つ原に住つて、甘藷でも嚙つてゐりや好い生活だから、まア一日に、現金の三、四錢もあれば、飢死するやうなことはありませんまいよ」

「ふうん、一日に三、四錢——月に一圓五六十錢か二圓もあつたら、食ふだけのことはできるわけだな」

青木は斯う言ふと、腕をくんで、ぢいつと考へ込んだ。

「今から、何ですかい、大將も俺らの仲間に這入らうといふのですかい」

鼻のつぶれかけた男が、さうたづねた。

「ひとつ入れて貰はうか」

青木は、にやりと笑つて、みんなの面を眺めまはした。

『そいつは豪氣だ』

と、今度は、顔から頸へかけて、大きな斑紋の出てる年若い男が、横から、愉快さうに聲を出した。

『大將が俺らの仲間に入つてくれると言ふなら、大いに意を強うするんですな』

青木は、その青年が、インテリめいた言ひ方をするので、注意深く、彼の顔を見つめた。

『君は、何處から來たの』

青木はその男に話しかけてみた。

『僕ですか』

と、彼は、鼻水をひとつ、ちゆうんとすゝりながら、

『元來僕は、首里の人間ですよ。中等學校にも一年ばかり行きましたが、此の病氣が出たので、やめてしまひましてね、それから、旅役者になつたり、女郎屋の板場かせぎをやつたりしてゐたんですが、もうどうしても病氣をかくすことが出来なくなつた揚句の果が、たうとう、こゝまで落ちたと、いふやうな始末でさあ』

彼はさう話すと、如何にも屈託なささうに、愉快に笑ふのであつた。

『おもしろい人だね、君は。で、君の名は何ていふのかね』

『僕ですか。僕は濱比嘉嘉三つて云ふんですが、仲間では馬の脚の嘉三つていふんでとほつてますよ。有難くもないが、まア、いゝ名ですよ』

彼はおどけたやうに斯う云ふと、又、大聲で笑つた。みんなも笑つた。

『では、これから、仲間入りをさせて貰ふことにしよう。四國あたりでは、仲間入りをするときには、お酒を一升買ふことになつてゐるが、こちらはどんな習慣かは知らぬが、わしは酒はきらひちやから、今日はひとつ、何か甘いものを、御馳走することにしよう』

すつかりよい氣になつて、さう言ふと、みんなは喜んでくれた。

『では、濱比嘉君——おつとちがつた、馬の脚の嘉三君、君によろしくたのむから、これで何なりと買つて来てくれ給へ』

さう言つて、嘉三の手に、五十錢紙幣を六枚握らせると、

『こいつは豪氣だ。——手登根、お前も一緒に來な』

手登根と呼ばれた十四、五の少年は、

『合點だ』

と言ふと、嘉三と一緒に、あたふたと、出かけて行つた。
間もなく二人は、焼いもやら、廻天焼やらを、どつさりと新聞紙に包んで、いそいそと、かへつて來た。

人々は、青木を圍んで、草の上に丸く輪をつくつて坐つた。

『さア皆さん、これは青木さんのお見知りです。一緒にいたときませうや』

嘉三がさう言ふと、十人あまりの者は、

『では、遠慮なく、頂きます』

と、てんでに、焼いもや廻天ヤキをつまむのであつた。

嘉三は、おもしろい事を言ふては、みんなを笑はした。

もと俳優であつた彼は、歌謡を唄ふことが好きでもあり、又上手でもあつた。

『今日は、ヤマトから、俺らの仲間入りをなさつた青木さんを、大いに歓迎する心で、これから馬の脚の嘉三さんが、ひとつお得意の歌をおうたひ遊ばして、みなさんに聞いて貰ふことにませう』

するとみんなが、

『所望々々、ひとつ「木やり」をやつてくれんかいな』

と、口々に、はやすのであつた。

『へ、へ、では、これから、みなさんの御言葉に従ひまして、つたないながら、「木やり歌」をお耳に達せしむることに致します』

おどけた調子で、斯う口上を述べると、輪のまん中に坐つて、もつたい振つた調子で木やり歌をうたひ出した。

サア、クワンザア國頭捌庫理、よいし、よいし

サア、ニヒコ二才達もいもちやめ、

ハイヨヤエー、ハーラーラー

すると二、三人の者が、

サア、ハリガヨイシ、サア、イシヨシヨシヨウシヨ

サア、ハリガリーリー、サア、イヒヒヒーヒ

サア、アハハ、ハハハ

と、にぎやかな、ハヤシを入れた。

嘉三は、澄み徹つた聲をはりあげて、また歌ふのであつた。

サア、名護山榎木や、よいし、よいし

サア、うなぎの前肌、ハイヨーエー、ハーラーラー

にぎやかなハヤシがまたそこに入つた。

サア、豊年の續きゆい、よいし、よいし

サア、ふたかちや御代さめ、ハイヨーエー、ハーラーラー

嘉三の喉は、いよ／＼澄みゆくのであつた。洋々として打ち展がる大海を前にして、寄せては返す瀾の音にあはせて、無心になつて、歌ひ且つ謠ふ病者たちを眺めながら、

「落ちるところまで落ちると、人間といふものは、案外、樂天的になるもんだなア」と、青木はしみ／＼さう思つた。

昨日は、名護の山陰の墓場に、『體がもう一度綺麗になるやうにして下さい』と、祈り得ざる祈を胸にたゝんで死んだ龜十爺を葬むり、今日は那覇の海岸で、にぎやかな「ホヤリ歌」を聞く數奇な運命を、かなしく思はないでは居られなかつた。

神の旋風

青木は、荒砥牧師の家を離れて、波の上神社の崖下に、浮浪癪者と一緒に、寝起をすることに定めた。

大きな空洞が岩石の中にあるのを発見して、そこに藁と席を敷いて、自分の住わとした。そして此の岩窟は直ちに、墓場を住わとしてゐる癪者たちの中心點となつた。

聖書の講義は、毎朝一時間ばかり、岩窟の附近でやることにした。

聖書の講義がすんでから、癪者たちは、おの／＼、或は乞食に、或はゴミ箱あさりに、或はボロ買ひにと、出かけるのであつた。

青木は荒砥牧師を手傳つて、垣花町方面の訪問傳道をしたり、體の不自由な者の世話をしたり、可なり忙しい其の日／＼を送つた。

回春病院の方からは、月々、二十五圓の金が、荒砥牧師氣附で送つて來た。青木は出來るだけ、それを節約して、困つた人間に、こつそりと恵んでやつた。

名護のことも気がかりでたまらなかつたが、警察署長が移動しない間は、矢つ張り遠慮する方がよからうと考へ、おざと行くことをしなかつた。そして名護、垣花、波の上神社下と、これらの地域にかたまつてゐる癩者のことから、此の沖繩全島へわたつて、如何に多數の病者があるかを、想像せずには居られなかつた。

癩者たちは、いろんな話を、青木に聞かせてくれた。

癩者は首里にも居る。島尻郡の方にも少くない。中頭郡一帯にも可なり多い。國頭は言ふまでもない。遠く宮古、八重山へかけては可なり多くの病者があるらしい。

『一體どれだけの病者が、沖繩にはゐるだらうか』

その分布状態の、餘りに廣範圍に亘つてゐるのを考へるにつけても、時々さうした質問を出しては、首を傾げるのであつた。

數學的な頭は、全然持ち合せてゐないやうに見える荒砥牧師さへも芋づる式に、青木と自分の前に、つぎつぎと現はれてくる患者を見ては、殆んど驚嘆するばかりであつた。

斯うした疑問に悩まされてゐる青木が、或日ふと沖繩新聞社の前を通りかゝつて、掲示板にはり出してある其の日の新聞を見たとき、灼きつくやうに彼の眼に映つたものあつた。それは、

『沖繩と癩病』

といふ、見出しで書いてある、短かい一つの記事だつた。僅か二十行足らずの短かい記事だつたが、しかし青木には、それが新聞全部におどり出してゐるかの如くに感じられた。

『昭和の今日、我が日本には、一萬を越ゆる癩病患者があると云ふは、まことに恥かしき事であるが、殊に我が沖繩には、他府縣に於て見る事の出来ない、多數の患者がある事は、此上もなき遺憾事である。最近内務省より出版せられた統計表を見るに、當縣下に於ける患者の数は、凡そ左の如くになつてゐる』

記事は之だけで、其のさきには、統計表が掲げてあつた。

	患者數	人口每千比率
那覇市	一四	〇・二三
首里市	一一	〇・四七
島尻郡	一六六	一・一一
中頭郡	二三〇	一・六五
國頭郡	二四二	二・二四
宮古郡	二〇〇	三・一七
八重山郡	五五	一・六〇
計	九一六	一・五八

青木は此の統計表を一瞥したとき、思はず、『何だ阿呆らしい！』と、腹の底から叫んだ。
 『那覇市が十四名とはどういつた計算だい。お役所の仕事つて、何ていゝかげんなもんだらう。現に今、俺の居る墓場だつて、十五、六人は居るじやないか。垣花町はどうだ。芋づる式に、どん／＼出てくるじやないか！』

實際と、役所の統計表との間に、大きな距たりのあるのを、つく／＼と感じた。

しかし彼は、懐から小さな手帳を取出すと、叮嚀に、此の表をうつし取るのであつた。

青木はとても憂鬱になつた。

何處でもよい、誰も人の居らないところ、——獨りぼつちの世界へ行き度くなつた。そしてあてもなく歩いてゐるうちに、何時の間にか、淋しい海岸の、松林の中に来てゐた。彼はぜに苔こけの生えてゐる細徑を傳つて、ぐん／＼林の中へ這入つて行つた。木の間がくれに見ゆる海は、青い壘を敷いたやうに、はてもなく廣がつてゐた。白い鷗の飛んでるのも見えた。

ぐつたりとした體を松の木に倚せると、黄色い花粉が、ほろ／＼と、こぼれた。目白めじろが囁り交しながら、敷木の上から上へと、渡りあるいてゐた。

青木は自然が好きだつた。自然によつて、いつでも慰められてゐた彼ではあつたが、併し、

今日は、とても寂しかつた。何かしら、重たいもので、心はおしつけられてゐた。

彼は、洋々たる黒潮に取巻かれてゐる沖繩の島々を、心の中に描き出してみた。

沖繩本島、西表島、さらにそれより遠く南の蒼穹の下に浮んでる宮古島、石垣島、それから久米島と、大小五十有餘の島々は、さながら虬龍の浮べるが如くに、視野の中にあらはれて來た。

『あゝ、これらの島々から、眞に詛はれた血が清められて、その體と魂とが、文字どほり純潔になるのは、何時であらうか？』

さう考へながら彼は、そこに、すばらしい旋風が捲起る光景を想像してみた。此の珊瑚礁さんごうの島々の上から、癩病と肺結核と貧乏とを、綺麗に吹き飛ばしてくれるすばらしい旋風を。

『旋風がほしい、神の旋風がほしい』

青木は聲を立て、思はず、森の木々たちにさう叫んだ。

青木は、此のすばらしい神の旋風が、必ず起ると信じた。

その昔、レブラの體に手を置いたキリストの業わざは、今もなほ絶えることはないと思つた。

『熊本には回春病院が出來た。』

草津にも病者のために、安息の場所が與へられてゐる。

瀬戸内海の島にも療養所が出来てゐるではないか。

然らば、此の沖繩にも、病者のための療養所が、おこされない筈はなからう。神は、生きてゐ給ふではないか！』

さう考へた青木は、容を正して、草の上に坐つた。そして靜かに、此の沖繩の地に、療養所が設立されるやうにと、祈るのであつた。

いいんとした林の木々たちは、陽をしぼるやうな、祈の聲に、そよとの音も立てずに聞き入るのであつた。

『さうだ、俺はいまから、療養所出現といふ、此の大いなる幻を、持ち續けて行くことにしよう』
斯う決心すると、彼は急に、新しい勇氣を體の中に感じた。

『さうだ、俺は、病者の一人として、此の大理想を、天下に叫ぶ義務がある！』

下唇をきゅつと噛みしめて、天を仰いだ彼の顔を、明るい太陽はちいつと覗き込んでゐた。彼は、自分の心が、明るくなつたことを感じた。

『それは、それとして』

と、また腕をこまぬいて、彼は考へるのであつた。

『今日私は、何をやつたら、よからうか。那覇には随分、乞食をしたり、浮浪の仲間入りをしたりして居る癩者があるやうだが』

青木はかねて、沖繩に癩が減じない理由として、彼らの生活程度の低いこと、即ちその貧乏なことと、衛生思想の貧弱なことを數へて居たので、救癩の事業を達成せしむる爲めには、どうしても爰に、説教を聞かせる外に、何か具體的な仕事をしなければならぬことを、ひそかに考へてゐたのであつた。

衛生思想の貧弱なことについては、何よりも先に、癩は遺傳ではない、傳染病であること、従つて隔離にまさることはないとの正しい認識を持たせ、病者自身が、此事を一般社會に知らせるまでに、至らせねばならぬこと、それと共に、巫女のおみくじに従つて、怪しげな療法にて事足りりとしてゐる迷信を一掃するやう、病者自身の考へ方から、根本的に換へて行かねばならないのである。

青木はさう信じてゐた。

『問題は、彼らを、貧乏から救ふことだ。少く共乞食だけはさせぬやうにし度いものだ』

これが、殊に此頃の悩みであり、重荷であつた。

『どうしたら、癩病人を、貧乏から救ふことが出来るか』

これは、實に大きな悩みであつた。これには、三つの方法しかない。一は彼らに職業を與へること、二は彼らに、生活費を恵んでやること、そして三は、彼らを收容する社會的設備をなすこと、すなはち是である。

此のうちで、一番よい方法は、第三の社會的設備をする事であるが、これは今のところ、到底望まれぬことである。職業を與へるといふ第一の方法も、結構なことではあるが、併し果して彼らに與へる職業が、世にあるかどうか疑問である。一番よいことは農業である、土に親しむ仕事であるが、彼らのために土地を求めることは實際上不可能なことである。簡単な手工業などもないではない。が、彼らは病者である。若しも此の恐るべき菌を、他に傳染させるやうなことでもしたら、それこそ赦されぬ大罪ではないか。商賣もいけない。勿論工場や炭坑などに入つて、筋肉労働をすることなどは、以ての外である。癩病人は、到底、職業を要求する權利の無い者である。

然らば、癩者を救ふ現在の方法としては、彼らに、生活費——最低の生活費を恵んでやつて、

乞食しなくても、食つて行けるやうにしてやる事だ。此外に方法はない。

青木は、乞食の生活については、可なりくはしく知つてゐた。

那覇では、一日に三錢もあれば、充分に食つて行けるとは、此間から屢々聞いている所である。

『一日に三錢——十日に三十錢——月に壹圓五十錢……一ヶ月壹圓五十錢あつたら、乞食一人に食はせることが出来るのだ。——そしたら、十五圓あつたら、十人の人間に、乞食させずに済むことになる』

斯う考へた時、青木の眼は、急にいき／＼と輝やいて來た。

『よし、あたつて碎けるだ、先づ十人——性質のよい、信仰に入り易い素直な人間を、十人だけ選ぼう。そしてこれに一ヶ月に壹圓五十錢づつ補給してやることにしよう。その代りに、その十人は、同じ場所に、共同の生活をするやうにしよう。そして、その後は、毎月三人乃至四人位を、その中に加へるやうにするならば、一年の間に、少なくとも、五十人あまりの者は救へる。一人一ヶ月壹圓五十錢とせば、五十人では、五十二圓五十錢あればよいのだ。——五十圓の金ぐらゐ、何とかかなりさうなものだ……』

青木の見るところでは、那覇市だけで癩者、フィラリヤ、不具者などをあはせて、乞食をし

てる者が、百人ぐらゐはあるやうであつた。

『癩者^シを主として、五十人の者を、此の一年の間に救済するやうにしよう』

彼は林の中を、ぐる／＼と、歩きまはつた。眼の前には新しい幻が次々と現はれて來た。そして最初に選ぶ顔觸れについて、いろ／＼と考へをめぐらした。

『嘉三と、あの子供は、第一に挙げねばなるまい。――扱て、あとの八人は、どんなのを選んだらよいかなア』

さまざまの顔と顔とが、次から次に、眼底に浮んで來た。第一に性質の善良な者、第二に信仰に入り易き者、斯うした二つの條件をつけて、其の立場から觀察してみると、人選は容易に出來さうにも思はれなかつた。

彼は金については、あまり心配しなかつた。自分の受けてゐる二十五圓の金から支出することゝして、あとは又後で、何とか方法がつくに相違ないとは、彼の信念であつた。

『さうだ、私は此の計畫を、何よりも先づ、回春病院の兄弟たちに知らせてやらねばならぬ』

さう氣がつくと、又草の上にとつかと坐つて、ポケットから手帳と鉛筆とを取出した。そして、手帳の紙を二三枚もぎ取ると、すぐに、手紙を書きはじめた。

『私は此の不幸な同族たちの、これ以上の不幸を見るに忍びません』とも書いた。『我々癩病人は、互ひに一つの團塊^{ぐんたい}となつて、祈と信仰と愛の實踐とに精進しなければなりません。これなくして、我々は幸福になることは、不可能ではないでせうか』とも書いた。『五十人の人間を乞食させ度くないのです。私は金が欲しいのです。どうぞ皆さんが、私の此の企てに御同情なさいまして、祈の都度々々にお憶え被下ますやうに』とも書いた。『徳田兄、沖繩は君を待つてる。私は君と共に働らき度いのだ』とも書いたが、暫らく考へた後に、これだけは鉛筆で消した。

徳田は沖繩の人間である上に、性質から云つても、信仰から云つても、是非同勞者として沖繩に渡つて貰ひたかつたが、しかし青木は、此頃徳田に戀愛問題が生じてゐるとの噂を耳にしてゐたことを、ひよつと、思ひ出したからであつた。

内ポケットから、状態を出すすと、それに手紙を入れて、表には、回春病院御一同様と書いた。長い放浪生活の經驗から、手帳と、鉛筆と、状態と、切手類などは、何時も、内側のポケットに入れて居る彼であつた。

手紙を書き終ると元氣よく起上つた。そして軽く口笛を鳴らしながら、松林を出て行つた。

太陽は明るく輝やいてゐた。もう其所には春が来てゐた。

愛の村

青木恵哉が、松林の中で祈つてから、かれこれ一ヶ月ばかりも経つた頃であつた。波の上神社の崖下、墓場に隣つた海岸の空地には、マッチ箱みたいな小さな家——家といふよりも、それは、小屋と言つた方がよいかも知れない——が、十一ほど、ずらりと立並んだ。それは何れも、死人を納める棺桶で作つた家であつた。やつと體を横へることの出来る程度の、狭くろしい家であつた。

墓場に隣接したところには、一本の丸太が立てられて、そこには、太々と、『愛の村』と書いた文字が讀まれた。

うしろには、芭蕉の茂つた土手があり、前には青海が置かれた、美しい風景の中に、棺桶の家は並べられてあつた。

それは、四月も半ばを過ぎた、麗らかな或る日であつた。

青草がいちめんち萌えてゐる空地には、青木を中にして、十人の病者たちが、お行儀よく輪をつくつて、坐つてゐた。

讚美歌が歌はれ、祈禱が済むと、青木はやおら口を開くのであつた。

『皆さん、

今日は私たちに取りては、新しい生涯へ、第一步を踏み出した日なのです。私たちが此の十日ばかりの間、一生懸命になつて、あちこちの墓場から棺桶をひろつて來たり、礎をあつめたり、釘を求めたりして、汗を流しながら作つた家は、こんなに立派に、上手に、出来あがりしました。そしていよく今日から私たちは、此の新しい家に這入るのです。

就きましては、皆さんによく心得てもらひたいことが、二つ三つあります。

第一のことは、これから再び乞食や、ゴミ箱あさりをしないことです。飯を食ふ代金は僅かですが、私から皆さんにあげることにします。日に三錢、月に壹圓五十錢づつあげます。これで好きなものを買つて食べなさい。もう乞食する必要はないのです。

第二に皆さんはこれから、よく修養をすることです。そして、たとへ體は病氣であらう共、人格の方面では、決して普通の健康者に、ひけを取らぬやうになることです。最後にもう一つ

言つて置くことがあります。みなさんが見られるやうに、ここにはまだ空地が大分あります。土はこれまた神が、人間にたまはつた、貴とい賜物でありますから、私たちはこの土を、よく可愛がつて、そこに花を咲かせたり、甘藷や野菜などをつくつたりしなければなりません。土を可愛がることは、やがてまた、私たちが互ひに親切をし合ふことでもあります』

青木の語る言葉を、人々は一語も聞きもすまいと、熱心に耳を傾けた。或者は、はれあがつた脚を草の上に投げ出し、或者は、デイゴの幹みたいに、すつかり指のなくなつた手を膝の上に置いて。

おどけ者の馬の脚の嘉三は、ほとんどまたゝきもしないで、青木の顔に見入つてゐた。手登根は、時々足もとの貝殻を拾つて、指先で玩具にしてみたり、眼をくりくりさせて、人々の顔を見廻したりしながら、それでも注意深く話を聞いてゐた。

一番老人は安慶名といふ、もう六十歳を越した老人であるが、眼を犯されてゐる彼は、なつかしさうに太陽の光を仰ぎながら、いち／＼うなづいて青木の言ふところを聞くのであつた。喜舎場といふのは、松葉杖にすがらなければ、歩行の出来ない者であるが、彼はさすがのやうな眼を青木に向けて、時々感激的に、口元をびり／＼させながら、聞入つてゐた。

宜野灣といふ二十歳位の若者は、しよつちゆう咳嗽をしてゐた。

顔中膏藥を貼りまはしてゐるのは兼筒段といふ青年であつた。世富慶といふ五十位の男は殆んど失明の状態であり、おまけに左手が萎えてゐた。彼は十二、三歳の少年を自分の子供のやうにして、それに手を取られて乞食をして歩いてゐた男である。少年は誰の子だか分らない、生れ乍らの乞食であつた。名は別になかつた。たゞツウ、ツウと人からよばれてゐた。ツウは半ば居眠しながら世富慶の傍に喰つてゐた。

楊は朝鮮人であり、銘刈は心臓が悪いらしく、長く坐つてゐるのが苦しさうであつた。

太陽は明るく、此の一群の人たちを照らしてゐた。

何處かで鶯が、びいよろよろ、びいよろよろと、啼いてゐるのが聞えてくる。波は小守唄をうたつて居た。

彼らは、みんな、幸福だつた。

彼らは、自分たちの、不遇な身の上を忘れてゐた。彼らの間にあつたものは愛だけだつた。

『大將、これからもう俺らは、乞食はしなくてもいゝんだね』

まつさきに斯う聞いたのは、兼筒段であつた。膏藥だらけの顔が、もの言ふやうに見えた。

『え、勿論さ』

と、嘉三が横から口を入れた。

『これからお前たちは、乞食するんじやねえぞと、さつき大將が、ちやあんと、言つたじやねえか』

『ほんたうに、大將、もう乞食はせんでもいゝかね』

兼筒段に取つては、どうも、これが心配らしい。

『しなくてもいゝよ君。これからは、此のところを自分のほんたうな村だと考へて、安心してゆつくりと、その日くを過しなさいよ』

青木が微笑みながら、斯う答へると、兼筒段は、如何にも安心したやうに、何度もくうなづくのであつた。

『おらあはほんたうに有難えよ』

と、頓狂もない大きな聲で、さう言ひ出したのは喜舎場であつた。

『乞食は俺に取つてはつらかつた。杖がなければ歩けねえし。おまけにさ、犬は吠える、子供は石をぶつつける、女中の奴らは、水をぶつかけるてなことで、ほんたうに俺は、自分ながら

つくづく愛想が盡きてゐたところだつたんだ。それに——』

爰まで言ふと、喜舎場の聲は、急に喉にひつ詰つてしまつた。

喜舎場が泣き出したのだ。

『それはお前だけじやねえ、俺だつておなじことだ』

かう言ひ出したのは、失明の上に、左の手がぶらりと垂れてゐる世富慶だつた。

『おらあは、眼も見えねえし、おまけに手は一方しかかなはねえのだ。あゝ俺は、此のツウが傍に居るばかりで、面白くもない生命を、今日までつづけて來たやうなものぢや』

『誰だつて、二度や三度、死にてえと思はない奴は、おいらの仲間には居はしねえぜ』

横から、嗚鳴るやうにさう言つたのは、一番老人の安慶名であつた。

『だが、人間て奴は、仲々さう簡単に死ぬるもんじやないよ。石にかじりついてゝも生きて行かなくちやならねえのが、それが人間に與へられてる運命ていふもんさ。喜舎場だつて、世富慶だつて、ツウだつて、俺だつて、みんな可哀相な人間さ。——、泣き度くもならア。だけ

ど、此の苦しみを噛みしめて行くところに、人間の味はひといふものもあるからう』
みんな黙つてしまつた。

重苦しい沈黙だった。

不幸とか、不遇とかを通り越した、どうにも出来ない運命といふものが、自分たちの魂と體に喰ひ込んでゐることを、彼等はしみじみと考へるのであつた。

嘉三が重い溜息をついた。

『俺は元來俳優だ。舞臺に立つて、人を泣かせたり、笑はせたりすることを、商賣にして來た人間なのだが、考へてみりや、何も俳優が、芝居をして見せる必要もありやしないさ。人間の生涯といふものが、まつたく一つの芝居だからな。俺らはみんな、かうして、芝居をしてるのさ』

『芝居としちや、實際俺たちは、あまりに貧乏くじを引きすぎたな』

しよつちゆう咳をしてゐる宜野灣がしんみりとさう言ふと、朝鮮人である楊は、横の方から、『わしなどは、はるく朝鮮から、沖繩まで、芝居をしに來てゐますよ』

青木はみんなの前に手を舉げた。

『そんな悲しい話は、もうよしたらどうかね。聖書には、「凡て勞する者、重荷を負ふ者よ、汝ら我に來れ、我れ汝らを休ません」と書いてあるではないか。心のどん底から、何も彼も、本

氣になつて、天にお任せ申上ぐることです。苦しみも悩みも、これを乗り切ることの出来る強い力が、そこに湧き出て來るのです。これから私たちは、此の有難い信仰の道を、毎日勉強して行くんです。——さア、それでは、これから、家入りをすることにしようじやないか』

一同の顔は、急にまた、晴れ晴れとして來た。嘉三には村の世話を頼むと言ふので、入口の家に入つて貰ふことにした。青木は眞ん中の家に入つた。そして青木の兩隣には老人の安慶名と、歩行の不自由な喜舎場が置かれ、ツウと世富慶は、隣り合つて住むこととし、あとは適宜に残つた小屋に入れることにした。

『自分の家だ！』

人々の心には、斯ういつた心安さが與へられた。

青木はにこ／＼しながら、嘉三と二人で、一つ一つの家を覗きながら、何かと注意を與へたり、世話をしやつたり、勵ましをあたへてやつたりした。そして今日は特に青木の取計らひで、みんな一緒に、渚のほとりに坐つて、夕飯を食ふことにした。それは甘藷と、野菜の汁の物であつたが人々に取りては、楽しい、にぎやかな晩餐であつた。

『愛の村』には、幸福な日が、毎日々々続いた。波の上神社の櫻の花を、彼らは崖下から見物することが出来た。高い、険しい崖と、墓場と、海とは、此の村に、彼らを輕蔑する健康者の來ることをさへぎつた。彼らは、そこで、自分の醜い體を恥ぢる必要はなかつた。みんな病者であるから。

一日の生活は單純なものであつた。

早天祈禱會と聖書講義に出る外は、何をしようと、全く自由であつた。たゞ乞食だけはすることが許されなかつた。

食べ物の代りとしては、一日三錢の割で、一週間分づつ、青木の方から、一人々々に給與してやつた。

どんな食物を、それで取らうと、それは彼らの好みの儘であつた。たゞ酒をのむことが許されないばかりであつた。甘藷を主食物とする彼らに取りては、一日三錢の食費は、決して不充分ではなかつた。

半島人の楊は歌ふことが好きであつた。彼は朝鮮の童謡をよく知つてゐた。船乗りの父に従つて、或は木浦、或は釜山、或は清津と、港を渡り歩いてゐた楊は、こゝに落つてから郷愁

に似たものがしきりに湧くのであつた。

とんとん とんがらし

赤とんぼ

あちらに行けば

命がけ

こちらにかへれば

助かるよ

幼ない日に、何處かで覺えた、かうした童謡を、彼は海をながめながら、よく歌ふのであつた。

『楊さんにも戀はあつたらうねえ』

嘉三がひやかし半分にこんなことを言ふと、楊はよく眞面目になつて、

『えゝありますとも嘉三さん。これでも病氣が出ない頃は、立派な青年でしたからな。――あゝ私はこの女を思ひ出しますよ、李といふあの女を！ いゝ娘でした、李は。釜山の波止場の附近、あの遊廓の裏手の細路で、二人はよく逢ひましたよ。けれどもねえ、私がだんく、傾

に吹出ものが出てくると、女は氣づいたと見えて、もう私に近づかなくなつたんです』

『今頃は、外の男とくつついて、子供が二人ぐらゐはあるだらうね』

嘉三のかうしたひやかしを聞くと、楊は暗い顔をして、水平線の涯に、ちいつと眼をやつたまゝ、いつまでも黙つてるのであつた。

楊は誰からでも可愛がられた。

誰が言ひ出すともなく、人々は自分たちの小屋の横やら、土手下の空地やらを畑にして、野菜の種子を蒔いたり、花の苗を何處からか、手に入れて来ては、花壇をつくつたりした。

『土は可愛がれば可愛がる程、人間の言ふことを聞くやうになるもんだよ。そして美しい花を咲かせたり、野菜をでかしたりして呉れるもんだ』

青木はさう言つては、みんなを、土に親しませるやうに努めた。

ツウは何處からか、仔犬を一匹つれて来た。黒い毛の中に、櫻の花弁が散つたやうに、白を交へた仔犬は、實際可愛い仔犬であつた。

ツウは『クロ、クロ』といつて可愛がつてやつた。ツウは自分の食べ物をわけて、クロにも食はせてやつた。

ツウはクロが出来てから、とても朗らかになつた。時々ツウは、クロといつしよに、折角みんなで丹精して作つた野菜畠や、花壇を踏み荒した。

『このトンチキ奴がッ』

と大人にしかられても、ツウは平氣だつた。

ツウは夜寝るときには、必ずクロを抱いて寝ることにした。クロはツウの懐の中にすつぽりと這入り込むと、よく、舌を出して、ペロ／＼と、ツウの顔を、下からなめまはすのであつたが、そんなとき、ツウは全く幸福だつた。

家入りの日からはじめたマタイ傳の講義は、二ヶ月餘りかゝつて一とほり済んだのであつたが、その頃から人々は、ぼつりぼつりとあちこちに出かけて行つて、自分たちと一緒に乞食をしたり、ゴミ箱あさりをした、以前の仲間を訪ねては、信仰の話をするのであつた。首里まで出かける者もあつた。

附近の村落に出かけて、世を避けてゐる病者たちを探す者もあつた。

回春病院の徳田から、七月の始めに、手紙が来た。

『浮浪者のためにお盡し下さることはまことに嬉しいことです。就ては爰に、沖繩から來てゐ

る者だけで、僅かではあるが、献金を送ることにしました。どうぞ何なりと自由に使つて下さ
 さい』

手紙には斯う書いてあつた。そして五圓の爲替が這入つて居た。

青木は涙の出る程うれしかつた。

『仕事はこれからだ』

青木は、五圓の爲替と、徳田の手紙を握りしめて、青い水平線の彼方に、管を走らせた。彼の前に横はる六十有餘の島々には、不遇の身をかこつ、多くの同病者が、救ひの手を待つてゐるのであつた。彼は遙かに九州の地より、祈の風が、海を渡つてくるのを感じた。

苦しむ者と共に苦しむ神

毎年五月の下旬から始まる梅雨が、今年はどうしたのか、文字どほりの空梅雨であつたが、それが一ヶ月もおくられて、六月の下旬から七月の下旬にかけて、一日も太陽の顔を見せないで、降り續けた。

そして、それがあがると、急に、激しい暑さが襲ふて来るのであつた。

そのために、すっかり體を弱らしたのは、棺桶の家に住んでる人たちであつた。殊に目立つて衰弱したのは、しよつちゆう咳をしてゐた宜野灣であつた。

宜野灣は顔中が、腐れかけた南瓜みたいに膨れあがつて來た。そして咳がますますひどくなつて來た。

宜野灣は八月一杯、殆ど寝て過した。食慾はすっかりなくなつてしまつた。それでも早天祈禱會だけは、一回も休まずに、杖をつきながら出てくるのであつたが、九月の或る朝だつた。

宜野灣はどうしたことか、祈禱會にも出ず、顔も洗はないで、小屋の中に、丸くなつて寝て居た。

『どうした、宜野灣。加減でも悪くはないかね』

青木が入口から顔をつつこんで、斯う尋ねると、宜野灣は、黙つて、入口の方に顔を向けたが、臉は眞赤になつてゐた。まつ毛には涙が光つてゐた。

『お前は泣いてるんじゃないか。何か悲しいことでもおきたのか』

憐憫のまなざしを、宜野灣の顔に寄せながら、やさしい調子でさう聞くと、宜野灣は、暫ら

く石のやうに黙つてゐたが、

『俺らには、どうしても分りかねることが、ひとつあるんだがね』

『どんなことがわからないのかい』

『少しこみいったことだが……』

『さうか、では、ゆつくり聞かせて貰はうかな』

と、小屋の中に體を入れて、せま苦しい床板の上に、膝を枉げて坐つた。そして、相手の顔に、自分の顔をくつつけるやうにして、

『さア、なんにも遠慮しないで、すつかり話すがよいぜ』

宜野灣は、やゝ長い間、兩眼を閉ぢてゐたが、やおら口を開いた。

『じつはどうしても、俺にはわからないことがひとつあるんだよ。それは、神様が、お慈け深いお方であると言ふことなんだが、俺にはどうしてもそれが呑み込まれねえんだ。俺はもう生きてることが苦しくつて、苦しくて……』

こゝまで言ふと、青年は、激しく咳入つた。喉をせえくく鳴らしながら、苦しさうに咳入るのであるが、額には、冷い汗さへ滲んだ。

青木は自分の掌で、額の汗を拭いてやりながら、

『どうか俺を信じて、ありのままを話しておくれよ、ねエ、ねエ……』

『俺には、なア、かなしいく身の上話があるんだよ、誰にも打明られない話が——』

それから宜野灣は、幾度か咳入りながら、ぼつりぼつりと、自分の身の上ばなしをするのであつた。

宜野灣は八重山島の生れだつた。年中貧乏神から見離されることのない、小作百姓を親父にもつて、兄弟は四人もあつた。貧乏ではあつたが、しかし幸福な生活を送つてゐた。『俺たちの財産はみんなが達者であることだ』と、父親がほこらしげに言ふほど、家族は、めつたに風邪さへひかなかつた。

ところが、此うした一家の幸福も、宜野灣が十二歳の時には、すつかり破れてしまつた。

病氣が出たのだ。學校へ行くのも止めて、じめじめした、暗い家の中に、人目を避ける身の上となつたのは、尋常五年にあがつたばかりの時であつた。

ところが其の年が終つて、翌年の春がめぐつて來ると、今度は姉の方が、また病氣を發した。姉は二十三歳の娘盛りであつた。それから三年ばかりの間に、父が發病し、弟が發病し、八つ

の妹までがとう／＼發病してしまつた。

六人の家族のうち、五人までが病氣を出して、たゞ母ひとりだけが後にのこつた。恐ろしい間は海嘯のように此の一家の上に押つかぶさつて來たのであつた。

一家は村中の者から、ほとんど交際を絶たれてしまつた。そして最後の致命傷となつたことは、地主から、小作の田畑を、すつかり引上げられてしまつたことであつた。

『食へなくなつたんです。俺らはもう飢死するより外に、方法がつかなくなつたんです。一體、どうしてやつて行つたらよいか……け、けんたうがつかなくなつてしまつたんです！』

興奮すると、すぐに咳が出るのを、宜野灣はからうじて抑へ抑へて、話をつづけて行つた。

『ところがどうでせう、不幸には不幸がつづくもので、俺らが十六の秋でした。親父が突然發狂してしまつたのです。あゝ俺らは、あの時のかなしかつたことを、いつまでも忘れることは出來ねエのです。雨のしよぼ／＼降る日だつたんです。納屋で何かごと／＼仕事をしておいた親父が、急に火のついたやうに狂ひ出して、俺ら兄弟で甘藷食つてるところに飛び込んで來たのです。そして——あゝ私は話するのもつらい、親父は手に持つてゐた藁切り鉋丁をふりあげるかと思ふ間に、姉の頸筋めがけて、力まかせに振りおろしたのです。……』

宜野灣は話をつづけた。——

『ひひひつと、一聲立てると、姉は、がくりと前のめりに打つ倒れてしまひました。血を見て、ます／＼狂ひ出した親父は、今度は又、一撃のもとに、弟をやつつけたのです。——可愛相に、弟は私より二つ年下の、まだ十四の子供でしたが、……それから後は、どんなになつたか、俺らはさつぱり分らなかつたんです。

やつと正氣になつてみると、自分と妹の二人は、阿母おぼくろの両手に抱きすくめられた儘、床の下にぶる／＼ふるへてゐたのです。

そこで俺らは、だいぶん時間が経つてから、そおつと床下から出てみましたが、眞赤な血はまるで池みたいに、部屋の中に流れてゐました。そして、そこには、姉の體と、弟の體と、それから親父の體とが、打つたほれてゐたのです。

親父は、自分の喉笛を、無茶苦茶に掻き切つてゐました。……』

『うう』

と、青木は思はず呻つた。

『そして、君たちは、どうした？』

『それから先が、また涙の話です』

宜野灣は、深い溜息をつきながら、また言葉をつづけるのであつた。

『やつとこさで、三人のお葬式だけは、すまずことはすましましたが、もう私たちは、につちもさつちも、やつて行けなくなつたのです。何といつても親父が居る間は、食べ物だつて、どろとか工夫をつけてくれたのですが、いよ／＼親父もいなくなつた後は、一寸先も見えぬやうになつてしまつたのです。』

冬がくると、もういよ／＼、野菜一本、甘藷一個さへ、家の中にはないやうになりました。

ところが或る晩のことでした。

俺らと、妹とが、空腹かゝへて、ぼかんと向ひ合つて坐つてゐるところへ、「さア、二人とも腹が減つたらうね、これなりと食べて、ゆつくりと寝るがよいよ」と、斯う云つて、そこから歸つて來た阿母は、俺らの前に、大きな風呂敷包を、づしりと投げ出したのです。大急ぎで明けてみると、まアどうでせう。バナナと、それから甘藷が、どつさりとおあるじやありませんか。嬉しかつたですな。妹と私は、もう夢中になつて食つたもんです。全く夢中でしたよ。どうしてこんなに澤山、バナナやら甘藷やらが手に入つたかなど、そんな面倒臭いことは、てんで考

へなしで、腹一杯食つたもんです。

阿母は、にこ／＼しながら、俺らが餓鬼のやうに、がつ／＼やつて食ふのを、はたから見てましたよ。

ところがどうでせう！

此のバナナや甘藷やは、實は母が他所から、こつそりと盗んで來たものだつたんです。

食ふ物がなくなつてしまつた、そして、二人の病兒が空腹かゝへてぐずつてる晩——あゝ阿母は、心を鬼にして、私たちの爲に、泥棒をやつたのです』

こゝまで話すと、あわてゝ兩手で顔を掩ふた。涙が止度もなく込み上げてくるのであつた。暫らくしてから、うちしめつた聲で、また話はつづけられた。

『阿母の罪は、その翌日、もうちやんとわかつてしまつたのです。そして、阿母は、駐在署につれて行かれました。そしてその晩はとう／＼かへつて來なかつたのです。——妹と私とは、抱き合つて寝たのですが、なんで眠ることが出來ませう！ その晩の淋しかつたことが、私にはいまでも、忘れられません。妹はその時八つでした。』

母は翌日、歸つて來るには來たが……』

——ぼきりと、そこで言葉が折れた。どうすることもできない心の衝動を、辛うじて抑へてるやうであつた。次の言葉が出るまでの、重々しい沈黙は、青木にも堪へがたい程であつた。やつとのことで、唇を動かしたが、聲にはちよつともつやがなかつた。

駐在署から歸された其の翌日の夕方、彼ら幼ない者が、家の裏の相思樹の枝に発見したものは、荒縄で首をくくつて、ぶらりとさがつてゐる、母親の死體であつた。それ以來ふたりの兄妹は、完全に、孤兒となつてしまつた。

宜野灣は實際母のあとを追ひたかつたが、頑はないたつた一人の妹を、殺すには忍びなかつたのである。

『何とかして生きて行かう！』

さう決心すると、十六の兄は八つの妹の手を取つて、こつそりと村を後にした。それは母の體を、親類の者どもが葬つてくれた三日目であつた。師走の風は、冷く、黄昏の路上に吹いてゐた。

その時から、彼らには乞食の生活がはじまつたが、妹は遂に、風邪から肺炎のやうな病氣となつて、名も知らない寂しい漁村の、薄ぐらい木賃宿の一室で、死んでしまつた。宜野灣は妹

の體を火に焼いて、その骨を小さな木の箱に納め、爾來三年間、八重山より沖縄本土へと流離の旅をつづけて來た。

『斯うして私の家庭は、言ふに言はれぬ災禍から災禍を重ねたが、おまけに私は、とう／＼、肺病にやられてしまつたのです。——私にわからないのはこゝです。若しあなたの説教なざるやうな神さまがゐらつしやるなら、そしてその神さまが、愛の深い神さまであるなら、どうして——どうして、かうした不幸を、俺らの上に、平氣で與へてくれるでせうか。』

ねえ大將、わけの分らないといふのは、こゝです。俺は癩病だ。俺の親父は發狂した。そして、おふくろは死んだ！ 泥棒したのはわるからう。けれ共、おいらは、その時飢えかゝつてゐたじやねえか。ああそのうへに、愛の神が、なんで、俺の可愛い／＼あの妹の生命まで取つたんです。——ヤソの神様は實際有難い神様かも知れない、だが、どうしてもわけのわからぬのは、こゝです。——教へて下さいよ、大將。一體これでも、神は愛ですかね』

まつさをな顔をして、飛びかゝるやうに詰問して來る宜野灣の前に、青木は、びたと兩眼を閉ぢ、黙々として腕をこまぬいた儘、身動きもせず、坐つてゐた。

『ねえ青木さん、これでも、ヤソの神さまは、矢つ張り愛の神様ですかい』

宜野灣の、泣くやうな、訴ふるやうな、嘯みつくやうな聲が、物凄しい勢で飛びついて来たが、相變らず兩眼は、びたと閉ぢられたまゝであつた。

「大將、黙つてゐねエで、何とか話しをしておくれよ、俺は寂しくてくたまらねエんだよ。」

——此の棚の上に置いてある風呂敷包みを見ておくれ。これは、死んだ妹の骨ですよ、骨ですよ。……ねエ、此の妹にも何とか言つておくれよ。それに俺らだつて、いつまで生きて居らうに。俺らは、もう、すつかり、肺をやられてゐますよ。眼の前に、死は來てをりますよ。ねエ、俺らに教へて下さいよ。これでも、神様は矢つ張り愛だといふんですかい？」

宜野灣は、さう言ひながら、すつかり泣いてゐた。

青木も、いつの間にか、宜野灣といつしよに泣いてゐた。

やがて涙を手の甲で拭くと、

「宜野灣や、よく話してくれた。つらかつたらうな、ほんたうに。それでも、よくまあ堪へて來てくれたねエ。」

だがな、正直なところ、わしには答が出來ないのだ。理窟なら、わしにも少々は言へるかも知れぬ。だが、君に理窟言つたつて、何にもなるまい！ 正直なところ、わしは君の質問には

答が出來ないのじや。

だがな、宜野灣。——

たゞこれだけのことなら、わしにも言へるよ。それは、此の廣い世界の何處かで、君の苦しみを自分の苦しみとして、惱んでゐらつしやる貴といお方が、ゐらつしやると云ふことなんだ。こんな話があるよ。

昔維摩詰といふ釋尊のお弟子が、大變な病氣をしたことがあつた。ところが維摩詰は仲々らしい人であるので、くだらぬ人物が見舞に行つても、却つて維摩詰の氣を悪くする許りだと思へて、見舞に行かうとする人もないのじや。その結果、釋尊門下でいちばん賢い文珠といふ人が、代表して維摩詰の病床を訪れる事となつたわけだ。

文珠は維摩詰を訪れると先づ斯う口を利いた、「お前は何んで病氣をしてるのだ」と。すると維摩詰が答へることは、「わしは自分自身の爲めに病んでるのではない」と斯う言ふのだ。「では、誰のために、病氣してるか」と聞くと、「世界の苦しみのある間、儂はその苦痛を自分で背負ふて苦しむのだ」と言つたといふ話である。

ねエ宜野灣、苦しんでるのは決してお前一人じやないんだよ、維摩詰みたいなゑらい方が、

何處かで、お前の苦しみを苦しんでゐらつしやるのじや。——俺たちが、神さまといふのは、斯うした神さまなんだよ。

どうか、此の道理を、よく考へてお呉れよ。そして、一切の苦しいことを、その神さまにお任せしてくれよ。どうだ、わかつてくれたかい』

話してゐるうちに、もうたまらなくなつた青木は、思はずぐつと手をつき出して、力の限りに、宜野灣の手を握りしめた。

『青木さん』

と、やがて宜野灣が、沈痛な聲で叫んだ。

『よく言つて下すつた。有難え、ほんとうに有難え。苦しむ者と共に苦しんで下さるのが、天の神様なら、私はもう何も言ふことはねエのです。それで満足です。——満足です！ あゝわたしは一日も早く、母や妹に會ひた……』

と、そこまで言つた時だつた。急に宜野灣の口もとがびりくとけいれんをおこして來た。瞳がぢいつと坐つたかと思つた間に、眞赤なものが、ぬら／＼と、口をいつばい塞いだ。——『來る筈のものが、遂に來たのだ』

もう冷靜な心になつてゐた彼はあはてないで、腰にさげてゐた自分の手拭を取つて、口もとの血をきれいに拭いてやつた。

『ちよつとも、心配はいらないよ。こんな時には絶対安靜にしてをれば、それでよいのだ。話もしない方がよろしい。ぢいつとして寝てをることだぜ』

さう言ふと、宜野灣の冷たい額に手を置いて、靜かに祈をさしげるのであつた。宜野灣は眼をつむつて、唇を結んで、胸に手を組みながら、祈の言葉に、自分の心をあはせてゐるやうであつた。

宜野灣には、絶対安靜をさせて、嘉三と手登根の二人が、交代で看護をすることになつたが、そのときほど看護婦がほしいと思つたことはなかつた。

『何と言つても、女は男よりもいゝ。病氣の時だけは實際女がほしい。徳の高い看護婦で、癩病人のために、一身をさしげてくれる人はゐないだらうか』等と、空想に近いやうなことを、眞剣に考へてみたりした。

やつと宜野灣がおちついて、青木が自分の家に歸つた時、轉がるやうにして、そこへ飛び込

んで来たのは、垣花町に住んでゐる病者の一人であつた。

『大變ですよ大將、早く来て下さい、早く——』

彼は、いきなり、さう叫ぶと、青木の手をつかんで、力まかせに引立てやうとするのであつた。

『どうしたんだい、一體！』

『先生が——あの、先生が！』

『なに？ 先生が？ 荒砥先生が、どうかなさつたのか？』

こんどは青木が、かみつくやうに、どなつた。

『いつものやうに、集會をしてゐたのです。——先生は一生懸命になつて、聖書の講義をしてゐたのです。……ところが、急に、胸が痛いと言つて、机の上に向つ伏したんですが、見る／＼うちに、顔はまつさをになり、とてもひどい苦しみが始まつたのです。——そしてその苦しみの中から、「青木、青木」つて、あなたの名が口に出ますので、わたしが、飛び出して来たわけですが……』

やゝ落つきを取戻した病者が言ふところはこれであつた。

『しまつた！』

と、叫ぶや否や、ゴム靴を足にくつつけると、使ひの男はそこにほつといて、あたふたと青木は飛び出した。そして力まかせに走つた。辻遊廓の裏通から近路をして、見世の前に出て、長い御成橋を、息もつかずに走りぬけると、汚ない家のごちや／＼と立並んでゐる裏路地へと息もつかずに飛び込んだ。

荒砥牧師は、六七名の病者たちに取かこまれて、ぐつたりと、仰向けに臥てゐた。

顔は土色になつてゐた。唇の色もすっかり變つてゐた。胸部はいつばいはだけて、心臓の上には濡れ手拭が載せてあつた。

青木が這入つてくると、病者たちは一齊にふり向いたが、病者達の瞳は、すっかり恐怖におびえて、ものを言ふ者もなかつた。

老牧師の枕もとにびたりと坐つて、すぐに脈を取つてみたが、絲のやうに弱い脈搏が、ビチ、ビチ……ビチ……ビチと、結帯しがちに、それでも微かに續いては居るのが感じられた。

『狭心症だ』

さう氣づくとも、

『先生——荒砥先生！』

と、耳もとに口をくつつけて、老牧師の名をつづけさまに呼んだ。生きてゐるのか、死んで居るのか、老牧師の臉はひたと閉ざされ、顔面の筋肉は微動だにしなかつた。

『先生ッ』

今度は、前よりも、やゝ高い聲で呼んでみた。

すると——臉のあたりが、かすかに、動いた。……そして、少しばかり、眼があいた。

『お、先生、氣がつかまりましたか。青木です。私です。どうぞ、どうぞ、氣を強く持つて下さい』
老牧師の頬に、すれ／＼ににちり寄つて、さう言ひながら、わづかに開いた瞳の奥を、またくきもしないで覗き込んだ。

……微笑のやうなものが、一瞬間、土色になつた顔の上に、あらはれて來るやうに思はれた。

『先生』

情愛をこめて、彼はもう一度、なつかしい師の名をよんだ。

唇のあたりが、動いたやうに見えた。そして、ささやきに似たものが、かすかに浮んだ。

枕もとに坐つてる人々は全身の注意を、自分たちの鼓膜に集中した。

『沖繩！』

ささやきに似たものは、人々の耳に、さう聞えた。

青木は、呼吸をびたりととめて、老牧師の唇の上に、自分の耳を持つて行つた。

『沖繩！』

ささやきに似たものは、また、さう聞えた。そして——それつきり、老牧師の唇はもう動かなくなつた。——呼吸は、すつかり絶えて居た。

病者たちのすゝり泣が、一時に爆發した。

青木は、濡れたタオルで、額をそつと拭いてやつた。

『先生、くるしかつたでせう！ 苦しかつたでせう！ でも……もう、安らかになりましたねエ。——ゆつくりと、ゆつくりと、休んで下さい、……先生、先生……』

青木は、老先生の手を固く握りしめて、幾度もく／＼さう言ふのであつた。

『でも——先生は御満足して下さるでせうね。こんなに病友たちに、取巻かれて、お眠り下さつたんですもの。……ねエ先生、先生——ゆるして下さいね、先生、——御志は、きつと、きつ

と、私たちがつぎますから……』

さう言つてゐるうちに、急に、あつい涙が、ぼろ／＼と、頬を傳ひ出した。

青木は、老牧師の曲折の多かつた生涯を、思ふまいとしても思はずには居られなかつた。

教育家から宗教界へと入つて來たのが老牧師だつた。四十年になんなんとする傳道生涯は、或は佐渡ヶ島に、或は臺灣に、或は北海道の寂しい農村にと過されたのであつたが、其の晩年は、熊本回春病院で、癩病患者への奉仕にさゝげられ、そして七十歳を超えた後は、此の沖繩の地で、世に捨てられた不幸な病者たちのために、まつたくさゝげられたのであつた。

青木は、しかし、信仰のあつい此の先生の胸の中に、誰も知らない、或る寂しさがひそんでゐたことをも知つて居た。

それは、老牧師の家庭のことであつた。

老牧師にはたつた一人の男子があつたが、父の志を嗣いで神學校に學んでゐるうちに、當時滔々として社會を吹荒してゐた社會科學の旋風にふきまくられて、いつとはなしに信仰上の懷疑に陥つてしまつたのであつた。そしてとう／＼、神學校は無斷で、退學してしまつた。早く妻をうしなつて、たつた一人の息子を、唯一の希望としてゐた老牧師に取つて、息子の此の離

反は、堪へ難い傷手であつた。

だが、若い時から、ビューリタンの精神を餘りに深く植ゑつけられてゐた牧師には、社會科學の書物に讀み耽つて、信仰の路から逸れて行く若い者の心を、深く理解してやるだけの、餘裕がなかつたのである。

信仰の路から逸れて行つた青年は、その後どんな道を歩いて居るか、老牧師は知らうともしなれば、又知らせてもくれなかつた。

たゞ東京にゐることと、何とかいふ文化協會の仕事をしてゐることと、いつとはなしに妻を持つたといふことと、此の三つの事だけは、老牧師にも知れてゐた。そして極く最近に傳へられた知らせは、子供が生れたといふことであつた。

『何といつても、お係さんが出來たことは、しあはせですよ。先生もいよく、ほんたうなお爺さんになつたわけですね』

さういふ言葉に對して、流石に老牧師も嬉しいと見えて、

『ひとつ、そのうちに上京して、孫の顔でも見てくるかなア』

と、にこやかに笑つたのは、ほんの二三日前であつた。

『さびしい先生だつたなア!』
 青木は、つくづくと老牧師の死顔を眺めながら、しんみりと、誰に言ふともなく、獨ごつのであつた。

皇恩に咽ぶ

秋が更けて行くにつれて、青木には、名護の病友たちを懐ふ心が深くなつて行つた。

『元次郎はどうしてるか知ら? それから元作は? ——龜十の娘はどうして暮してるだらうか?……』

名護の人たちのことを考へると、もう、ぢつとしては居られなかつた。

『どんなに警察から矢筈敷く言はれたからと言つて、小羊をほつとくと言ふことは出来ない筈だ。私は名護の人たちにも、愛の負債を負ふて居るではないか』

さう考へると、名護を訪問し度いと心に、せきたてられて來た。

嘉三に話すと、嘉三は、すぐに賛成した。

『それは結構な考です。行つてゐらつしやいよ。村の方は私が居れば大丈夫ですから……』
 斯う言つてくれる嘉三に、一切のことを托して、こつそりと那覇を後にしたのは、十一月も終に近い或る日であつた。

一年前に歩いた路を、彼は又歩いて行つた。

『沖繩! —— 沖繩!』

老牧師が世を去る直前に、押し迫る呼吸の下から、かすかに呼んだ此の言葉が、びつこの足を先へくとぐんとぐんと運ばせてくれた。

名護の町が近づくにつれて、ユウナの花は、黄色い姿を、叢のなかに覗かせてゐた。ユウナの花は、なつかしい花であつた。わざと黄昏を待つて、元次郎の家をアダン林の中に訪れた青木は、なつかしい此の家に入つた瞬間に、我とわが眼をあやしまなければならなかつた。彼が破れた墓座の上に発見したのは、瘦せ衰へて、ぐつたりと體をなげ出してゐる元次郎の姿であつた。

『お、青木さん!』

元次郎はこれだけ言ふと、あとは言葉もなく、泣き伏すのであつた。

『逢ひたかつたよ』

胸が一杯になつて、やつとこさでこれだけと言ふと、青木は元次郎の傍に、ぐつたりと坐つた。僅か十數ヶ月しか離れてゐなかつたのに此の弱り方はどうしたことだらうかと、しばらくはものも言へないで、つくづくと眺めるばかりであつた。

齒はすつかりなくなつてゐた。

眉毛は一本もついてゐなかつた。

『元作はどうした』

そこに、元作が見えないのが急に気がかりになつた。

『元作は、あの元作は——あれは、とう／＼物貰ひになつてしまひましたよ』

『え、ッ、物貰ひに？』

『さうです、だつて、わたしは體が不自由にはなるし、どうしても……どうしても、食つて行けなくなつたのですもの……』

青木は大きな棒で、頭をひとつぐわんと叩かれたやうな、氣持になつた。そこへ元作が歸つて來た。元作はよこれかぶつた頭をして、ぼろ／＼の着物を一枚體にくつつけてゐた。手には

袋を持つてゐた。袋の中には穀物が少しばかり入つてゐた。

元作は暫らくの間は、ぼかんとしてそこに突立つてゐたが、やがてそれが、青木だといふことがはつきりすると、裸足のままで飛び上つて來た。そして、ものも言はないで、両手をあげて、頸に抱きついた。

青木は力の限りに少年を抱きすくめた。二人とも何ごとも言へなかつた。しかし彼らは互ひに、體と體をとほして、言葉以上の深い感情を知り合ふことが出來た。

『元作、もう明日から、乞食はしなくてもいゝんだよ』

少年の耳元に、さゝやくやうに斯う云ふと、元作は何も言はないで、たゞ嬌然として、顔をあげるのであつた。あまりのいぢらしさに青木は眼の先が、急に闇くなつた。込みあげてくる涙をどうすることも出來なかつた。

その晩、三人はおそくまで、語り合つた。青木は龜十の娘のカマドが、まだ元氣でゐることを知つた。海岸の掘立小屋に住んでゐる上與那原も、まだ死なないでゐることがわかつた。

なつかしい人々の噂に、南國の夜は、靜かに更けて行つた。

アダン林の夜はなごやかであつた。

三人は、互ひの不運を忘れてゐた。不自由な體のことも、乞食に歩く悲しいその日其の日の生活も、恩師を失つた心の寂しさも。

青木は夜の明くるのを待ちかねて、山陰の墓場に、龜十の娘を訪ねた。

『かまど！ 元氣でゐるか』

不意に呼ばれたとき、かまどは、それが餘りに突然だつたので、まつたくびつくりしてしまつた。併し、それが一寸も忘れたことのない懐かしい人であることがわかると、我を忘れたかの如くに、

『お父さん！』

と叫んで、力の限りに、その手にしがみついた。

かまどはひどく衰へてゐた。父を失つた後の寂しさと、日に／＼重り行く病患とは、彼女を見ちがへるやうに衰弱させて居た。

青木は、かまどが、自分を『お父さん』と呼んでくれた其の心根が、たまたまなく、いちぢらく感ぜられた。

『ああ矢つ張しかまどは、なくなつた父親を忘れることが出来ないで居るのだなア』

今更のやうに考へさせられたことは、父と娘との間に流れてゐる、神祕な血の交はりであつた。

『寂しかったかい』

かまどの頭を抱くやうにして優しくたづねると、

『えゝ寂しかったのよ。お父さんは死んでしまつた上に、あなたも那覇に行つてしまつたんだもの、ずゑぶん寂しかったのよ』

かまどは、青木の胸に、上半身をもたせながら、甘へるやうな聲でさう言ふのであつた。

『お祈はしてゐるだらうな』

『……………』

かまどは黙つてうなづいてみせた。

小屋の中はもとの儘だつた。壁の古釘には、父の龜十が著てゐたぼろぼろの著物がかけてあつた。薄闇い小屋の中は、悪臭で一杯だつた。

青木は、大きな福木の下に立つた。そして龜十の墓標の前に、敬虔な態度で、しづかに合掌した。

『綺麗な體になりたい』

斯う言つて死んだ不幸な老人を思ひ出して、心は俄かにうちしめつて來た。何よりも心配なことは、かまどが、どうして飯を食つて居るかといふことであつたが、併しかまどは、父と別れた後は、親切な病者たちによつて、日毎々々の糧が與へられてゐた。さうした愛の交はりがかうした氣の毒な人々の間に既に始まつてゐることがわかつた時、青木は涙が出る程嬉しかつた。

青木は、熊本の回春病院に居る徳田から、一通の手紙を受取つた。至急直披と書いてあつた。封を切ると、中から出て來たのは小さな新聞の切抜と、それに添へた簡単な手紙だつた。

『青木兄、闇にゐる我らにも、明るい太陽が照り出して來ました。どうぞ、同封の新聞の切抜を讀んで下さい。私は今更のごとくに、私共が、日本人として生れたことを、感謝し度いと思ひます。——』

新聞には大活字で、『天恩癩病者に及ぶ』と題して、極めて感激的な記事が出てゐた。——

『菊花香る去る十一月十日、長くも 皇太后陛下には、救癩事業のために、多額の御内帑金をたまはつた。而して此は大正十年 皇后陛下におはせし頃より、約十年の長きに亙りて、供御

御衣の御品々御日常の御調度品等を御自から御節約遊ばしましたるものと漏れ承る。まことに忝き極みである。天恩病者に及ぶ昭和五年十一月十日の此日を、我ら國民は永久に感謝すると共に、天恩にむくい奉つるべく、救癩の事業が益々擴大せんことを祈るものである。云々——これが記事の大體であつた。食るが如くに、幾度もく繰り返して讀んでゐるうちに、いつしか「眼には涙がいつばい浮んでゐた。

『天恩にむくい奉らねばならぬ！』

さう決心すると、たゞちに、附近の病者たちを、アダン林の小屋によび集めて、新聞記事を読み聞かせて、よくわかるやうに、叮嚀に説明をしてやつた。

『なんといふかたじけないことだ。穢れ果てたる我ら病者のために、かしこくも雲の上より、斯うした御仁慈をたまはるとは、考ふれば考ふるほど、有難さで一杯となるではないか。此の御聖恩におこたへ申上ぐるためには、自分たちが心を合せて、互ひに助け合ひ、修養につとめなければならぬ』

さう語りながら、時々聲がうちしめるのを、どうすることも出来なかつた。

『有難い』と思ふ心は、みんなの魂を聖さと敬虔なる念ひに満した。そして、誰が歌ひ出すと

もなく、そこに起つたのは、『君が代』の奉唱であつた。

きみがよは

ちよにやちよに

さゞれいしの

いはほとなりて

こけのむすまで

病者たちの心は、形容の出来ない歡喜で、いつばいだつた。そして何もかも忘れて、聲を限り、一生懸命になつて、『君が代』を歌つた。

異様な感激のうちに、歌ひ終つた時だつた、彼らは小屋の中に、『御めんなさい』と言つて、這入つてくる見知らぬ人を發見した。

頭の毛を綺麗に分けた、折目のきちんとしたズボンをはいた、そして眼鏡をかけた、三十四五歳位の立派な紳士であつた。

「一寸伺ひますが」

と、紳士は、丁寧な言葉で口を切つた。

「此のおうちに、青木恵哉さんといふお方が、ゐらつしやるんじゃないでせうか」

「青木ですか？ 青木なら、私なんですが」

青木はさう言つて、あがりがまちの方へ、にぢり出て來た。

「あ、あなたが青木さんですか。初めて御目にかゝります。私はかうした人間ですが……」

紳士は又丁寧な言葉をかけて、名刺を出した。

名刺には、牧師服山勝一と、書いてあつた。

「實は——」

と、紳士は、語り出した。

「私はつい、一ヶ月程前に、名護の教會へやつて來た牧師なんです、こちらに参りましたから、誰から聞くともしに耳にしたのは、あなたのことでした。

あなたが、いろ／＼な困難に打克つて、病者方のために御盡しになつてゐることを聞きまして、ひそかに、敬服して居つたのです。

實は私も、何とかして、お氣の毒な方々のために、御奉仕させて頂けたらと考へてゐた折とて、あなたのお話は、大變私の心を動かしました。それで、是非一度お目にかゝり度いと思ひ

まして、今日出かけて来たところなんです』

『さうですか』

と、青木は、頭を掻いた。

『こんなむさくるしい所に、わざわざお出で下さつて、まことに恐縮に存じます。先生のやうなお方が、名護にお出で下さつたことは、實に有難いことです。どうか之からよろしく御たのみ致します』

『名護は、教會といつてもほんの十四五人足らずの小さな會衆です。今まで家庭でやつてゐたのですが、こんど開拓傳道をしようといふことになつて、私が派遣されて来たやうな次第です。

——福岡からやつて来たんです。これから、あなた方の集まりにも、出席させて貰ひませう』

服山牧師はさう言ふと、そこに居る人たちにも、笑顔で會釋きしやくした。病者たちは、あわて、びよこん／＼とおじぎをした。

服山牧師と相知つてから、青木は、急に元氣づいて来た。

服山牧師は、名護の裏通りに、小さな家を借りて、傳道所の看板をかけてゐた。若い妻と、

五歳ぐらゐの小さな女の兒と、三人ぐらしの家庭だつた。

名護に来てから、まだ一ヶ月ばかりしか経たないのではあるが、日曜學校には、子供たちが押寄せて來、禮拜や祈禱會なども、盛んになつて行くばかりであつた。

服山牧師は、アダン林の小屋に、しよつちゆう訪ねて來た。青木はあちこちから、病者たちをよんで來ては、服山牧師に話してもらつた。

墓場に住んでるかまどにも、服山牧師を紹介した。

荒砥牧師のしづかなやり方に對して、服山牧師は、萬事が積極的だつた。

『大きな幻を持つことですよ。すでに皇室の御仁慈もあることだし、だんだんと社會の輿論もあがつて來たし、これからいよ／＼救癩運動も本格的になつて行くのですよ。必度、今に、此の沖繩にも、國立療養所が出来るに違ひないんです』

確信に満ちた服山牧師の話を知ると、青木たちは、わけもなく、血が躍るのであつた。

年末から新年にかけては服山牧師の好意で、菓子やら蜜柑やらが寄贈された。子供たちには繪本やら、獨樂やら、人形やらが、どつさりとおもてなされた。

警察の方は、特高の主任も、署長も代つてゐたので、別に干渉がましいことは、ないやうに

なつた。

年が明けてから、また喜ばしい報知が、アダン林の小屋にもたらされた。それは或る冷い朝であつた。

服山牧師が、顔いつばいに、元氣さうな笑を湛へて、飛び込んで来た。

「いよ／＼沖繩にも、明るい太陽が昇つて来ましたぜ」

かう言つて、そこに投げ出したのは、一枚の沖繩新聞だつた。

「どうしたんです」

「まア読んでごらん下さい。沖繩に療養所が設置されるといふんです」

「え、沖繩に療養所が！」

おうむ返しに、さう言ひながら、大急ぎで取上げる新聞の、

『沖繩縣會、癩療養所の設立を決議す』と、刷り出した大きな初號活字の見出しが、先づ青木の眼を刺すのであつた。

——明治四十二年に、伊豆七島、小笠原島に、国立療養所が設置せらるゝことゝなつた時、

當時の沖繩には、七百九名といふ多數の癩患者が居た。そしてそのうち、全く扶養の途なき

者が、少からずあつたので、これらを收容するために、国立療養所設立の議が起つたが、同年十二月二十六日、沖繩縣會は之には賛同しないで、寧ろ九州療養所に合併の件を決議したのであつた。

——そして其の結果、翌四十三年度から、其の費用を負担すると共に、初めて七名の患者を熊本の郊外黒石原にある九州療養所に送致したのであつた。ところが、年々五六千圓の負担をせねばならぬにも拘はらず、土地が遠いため、沖繩縣の患者は、僅か六七名を收容せるの狀態であつた。

——茲に於て沖繩縣會は、九州療養所から分離し、五ヶ年繼續の事業として、縣内に七ヶ所の保養院を設置して、縣下の患者を收容する計畫を立てた。これが昭和三年のことであつた。

——然るに此の計畫は、たゞ机上の計畫として、今日まで何ら具體的の運びに至らなかつたのであつたが、先に 皇室に於かせられて御仁慈をあらはさせ給へることより、大いに沖繩縣當局の心を動かし、いよいよ昭和六年の此の年、先づ宮古と名護の二ヶ所に保養院を實現せしむることゝした。そしておそくとも本年三月までには、宮古島平良町宇島尻に保養院を設置し、その實現を見た上で、こんどは名護に、同様の設置を見る筈である。

『これは有難い！』

青木は読み終へると思はず、感嘆の聲をあげた。

『皇恩限りなしとは、此事ですな』

服山牧師も、感慨深さうに、眼をしぼだいた。

『とこ、で』

と、服山牧師は、

『すでに爰まで縣會の意向が定まつた上は、あとは大いに一般社會に、輿論をおこすことです。殊に宮古と共に、名護が、保養院設置の候補地に擧げられてゐる上は、大いに名護の地に、聲を擧げることです。然るべき講師に来て貰つて、盛んに名護や那覇あたりで、講演會でもやり度いものですな』

青木には、服山牧師の、かうした積極的なやり方が、とても嬉しかつた。

『では私はみんなを集めて、祈禱會を開きませう』

青木はせき込んでさう言ふのであつた。

四つの瞳は感激的に光つた。

永遠への階子

或時青木は、病者の行商人より、大宜味を中心として、澤山の病者があることゝ、彼らが信仰の道を求めてゐることゝを聞いた。

『あなたのことは、大宜味では、えらい評判となつてをりますが、どうです、ひとつ出かけてゐらつしやいませんか』

行商人はさう云つて、しきりに、大宜味行をすゝめるのであつた。

服山牧師に相談すると、一も二もなく、賛成してくれた。

『名護の仕事は、わたしが居るから大丈夫です。それから、那覇にも、月に一度ぐらゐは必ず私が出かけて、村の人たちを指導することにしませう。あなたは開拓者だ。どしどしと、新しい地を切り開いて行く人だ。大宜味に道が開けたのは、何よりも幸ひだ。雲の柱が、あそこに立つてると信じなさい。すぐに出かけるがよいでせう』

服山牧師からもさう言はれると、もうちつとして居ることが出来なくなつた。

そして二月十一日紀元節の日に、名護を後にした。

行商人は、知念源十といふ者に、手紙を書いて呉れた。

『百姓をしますよ、知念さんは。親切な、正直な、とてもいゝ人です。あなたは先づ、此の人のうちにゆつくりとどまるやうにしないで』

行商人はくはしく、知念の住むを教へてくれた。

名護から北東へと、坦々たる縣道を、七八里も行つたところ、美しい海に臨んだ小さな町が大宜味であつた。

知念の住むはすぐに見つかつた。

町はづれの、海岸に沿うた、福木の茂り合つた中に、藁屋根づくりの小さな家があつた。それが知念の住むだつた。知念は豚も二つ三つ飼つてゐた。

『まア、よく来て下さいました。もう此の邊ではあなたの噂は大したものです。一寸も御遠慮はいりませんから、どうぞゆつくりと、おちついて下さい』

知念は心から青木を歓迎してくれた。

知念は四十歳位の年配の男であつた。發病したのは十五六歳の頃で、それ以來日蔭者の生涯

に入つたのであつた。両親が引つづいて世を逝つた後は、僅かばかりの田畑まで、何かと因縁をつけられては親類の者に取られてしまつた。そして、まったく無一物になつて、此の海岸の福木の蔭に身をかくしてから、既に十五六年になるといふ。今では、奪はれた自分の畑を、小作させてもらつて、細々ながらも、乞食しない程度のくらしを立てゝゐるのであるが、こんなに虐げられた生涯を経て來たのにも拘はらず、知念の性格が、少しもゆがんでゐないのを、青木は不思議に思つた。

知念は、二三度、聖書の話の話を聞いただけですぐに、信仰心をおこした。

『私にも洗禮を受けさせてもらへませんか』

知念の心の中に、斯うした淨い願ひが生れて來たことを、青木はうれしく思つた。

『知念さん、あんたは、キリストを信じますか』

『え、信じますとも』

『併しな、知念さん、キリストを信ずることは決して容易いことではありませんよ。若しキリストを信仰するなら、あんたも他人のために、苦勞することを、喜ぶ人間とならなければなりませんよ。それがあんたに出來ますか？』

『えい、えい、同病者たちの爲なら、どんな苦勞でも、よろこんでやりますよ』
それから数日の後だつた。

ぼかぼかと、あたたかな太陽の照つてゐる日に、大宜味灣の、しづかな入江で、知念は洗禮を受けた。

青木が肌身離さずに持つてゐる受洗者名簿には、知念源十の名が、新しく加へられた。知念の名はちやうど三十八人目になつてゐた。

大宜味でも、病者たちは、貧しい暮らしをしてゐた。掘立小屋みたいな家に住んで、辛じてその日その日の生活を立てゝゐる者が、多数だつた。併し相當な家に住んで、ひとなみの生活をしてゐる者も、少しはあつた。

ここでは知念の家を中心として、新らしい一つの信仰團體が、日に日にかたちづくられて行くのであつた。

服山牧師からは、絶えず手紙が來た。

かねて計畫中であつた宮古島の保養院は、三月の上旬には、いよく開院といふことになつた。そして宮古島に住んでゐる病者のうち、四十人餘りの者が、收容された。

『いよく宮古島には保養院が出來たか、うれしいことだ、今度は名護に出來ねばならぬ』

かう思ふと、青木も、知念も、ぐづぐづしては居られなかつた。

かくて春が來、かくて夏が來た。

その年の夏は、格別に暑さがひどかつた。病者たちは、ひどく弱つた。或る日のことであつた。

ひよつこりと、其所に訪ねて來たのは、那覇に残して來た、馬の脚の嘉三だつた。

『どうもはや、申わけのないことが出來ましてなア……』

嘉三は、青木の顔を見るや否や、さう言ふと、涙をぼろ／＼と流すのであつた。

『何か變つたことでも出來たのか』

言葉せはしく尋ねると、暫らくの間、すゝり泣をしてゐた嘉三は、やがて、青木の前に、黒い風呂敷包を差出した。

『大將、この風呂敷包のものを、届けやうと思つて、わしはこゝまでやつて來たんだが。——どうぞ、大將自身で、此の風呂敷包みを解いて下さいな』

暫くの間嘉三の顔色を、黙つて凝視してゐた青木は、やおら黒い布風呂敷包を、膝の上に取上

げ黙々として、小さな結び目をほぐしていった。布呂敷包の中には、小さな二つの瀬戸物の壺が這入つてゐた。そして壺には、貼紙をして、一つの壺には『宜野灣スミ』と書き、もう一つの壺には、『宜野灣太平次』と書いてあつた。

二つの壺は、骨壺だつた。すべてのことが青木恵哉にはわかつた。『あゝとう／＼あの不幸な若者は、こんな骨壺となつてしまつたのか！』——さう思ふと、強い悲しみが、心臓の間から込み上げてくるのであつた。今にも泣けさうになつてくる心を、ちいつと抑へた彼は黙々として、二つの骨壺を、小さな机の上に置くと、きちんと坐りなほして、度ましやかに合掌するのであつた。嚴やかな沈黙が部屋の中を満した。やがて、『嘉三』と、沈黙を破つて、青木が言つた。

『宜野灣の最後は、おだやかだつたらうな！』

『あゝそりやもう……』

と、嘉三は、又してもはふり落つる涙を抑へた。

『實はその事を話し度いばかりに、わしはこゝまでやつて來たんでさあ』

青木は太い溜息をついた。

『くはしい話をして呉れ給へ、嘉三君』

嘉三は、ちいつと眼をつむつた。彼は自分の心を整理してゐるやうだつた。

窓の外では、芭蕉の葉が、さら／＼と音を立てゝゐた。

知念は、こつそりと外に出て行くと、やがてまつかかな鐵砲百合の花を切つて來た。そして古い竹筒に挿すと、黙つて、二つの骨壺の前に供へるのであつた。

嘉三はしづかに語り出した。

『可愛想なのは、宜野灣でしたよ。あなたが那覇を立たれてからといふものは、ちつとも元氣が出なかつたのです。そして、今年の夏に入つてから、いよいよ、いけなくなりました。

食事はすゝまないし、眠は充分にとれないし、高い熱は續くし、——とう／＼、寢込んでしまつたのが、七月の初め頃でした。

寢込んでからといふものは、どうしたのか、宜野灣は、全く口を利かなくなつてしまつたんです。

たゞ朝から晩まで、大きな瞳を見開いて、ちいつと天井を見つめてるばかりでした。

「宜野灣、しつかりするんだよ——かう私が、元氣づけてやつても、ろくに返事もしないで、

何かしら、考へ込んでるのがあいつでした。

ところが、七月二十日の朝でした。

「どうだい兄弟、気分はよいかね」

私が斯う言つて、あいつの小屋に顔を入れますとネ、めづらしくも、

「嘉三さん、お早う」

と言ふちやありませんか。そして、私の顔を見て、にっこりと、笑ふちやありませんか。私もついこまれて、

「今日は氣持がよささうだな」

と、微笑みながら近寄ると、斯う言ふんです。

「長い間いろ／＼と、お世話になりましたが、どうやら近いうちに、お別れしなくちやなるめえと思ひますよ」つてネ。

「バカな、何をほざく、そんな氣の弱いことを言ふもんぢやねエ。もつと勇氣を出すことだ。早く起上つて、青木さんの行つてゐなざる名護にでも、大宜味にでも、押かけて行かうぢやねエか」

私は斯う、叱るやうにして、あいつを勵ましてやりました。

すると暫らくの間、石のやうに黙つてゐましたが、やがて、ふうと太い息をついて、

「實は嘉三さん、私は昨晚、夢とも幻ともつかぬ、不思議なものをみたんです。雪のやうな純白な衣を着て、その顔は、まるで太陽のやうに、びかびかと輝やいてゐる人があらはれて、私をつれて、高い／＼大空さして、すうと昇つて行くんです。わたしの體は、まるでゴムまりみたいに、大空をわたつて行つたんです」と、斯う言ふちやありませんか。私はこれを聞いたとき、何か斯う冷いものが、すうと、顔を撫でたやうに感じましたよ。だつて、宜野灣は、とても眞剣ですもの。……」

嘉三は、こゝまで語ると、瞳を凝して、ちいつと空間をみつめてゐたが、やがてまた、ぼつり／＼と語り出した。

「あいつの容態が急に悪くなつたのは、その晩でした。

呼吸が苦しさうになつたので、白湯をやらうとしますと、咽喉の奥からしやがれた聲が、かすかに洩れて来るんです。私は自分の耳をあいつ唇元に持つて行きました。すると力ない聲が、さゝやくやうに、聞えたのです。

「嘉三さん、おたのみがあるよ、どうか俺が死んだら、火葬にして骨は妹の分と一緒にして、青木さんの手もとまで届けてくれ、俺はあの人の手で将来療養所ができた時、その納骨所に、まつさきに納めて貰ひたいのだよ」——かうきれぐに言ふと、宜野灣は、眼をつむつてしまつたんです。……」

嘉三は、聲を呑んだ。

そして數分間黙つてゐてから、又、しづかに口を開いた。

「……それつきりあいつはもう口を利かなくなつたんです。けれども、あゝ、けれども——私は見ましたよ、あいつの顔が、見てゐるうちに、何とも言へない穏やかな、平和な、そして神々しいものに變つて行くのをね。」

枕もとには、兼筒段も居りました。喜舎場も居りました。老人の安慶名も居りました。それから楊も居りました。そして誰も彼も、いはぶき一つしないで、たゞもう石のやうに黙つて、死顔に見とれてしまつたんです。

あゝ、あんな美しい死顔しづなつてありませうか。あのみつともない、結節だらけの顔が、まるで斯う、繪に描いた天使みたいに見えましたよ——」

嘉三の顔は、いき／＼と輝いて來た。青木も、知念も、いつしか神聖な、『或者』の前に坐つてるやうな、おごそかな心になつて行くのであつた。

青木は、今自分たちが坐つてるところから、高い／＼虚空へかけて、階子はしごがかけられてるやうな氣がされた。

それは、永遠への階子だつた——。

挺身隊

宮古島に保養院が出來たとき、青木は服山牧師と相談して、那覇、名護、大宜味の三地より若干の病者を送らうとしたのであつたが、残念ながら、その願は容れられなかつた。

「宮古保養院は、宮古島に居住してゐる病者のみに限る。他郡から收容することは當分の間おことわりする」

と言ふのが、保養院當局よりの返事であつた。

青木も失望した。服山牧師も失望した。此のことを傳へ聞いた病者たちは、いづれも落膽し

た。

『あんなにながい間、待つてゐた療養所だつたのに！』

病者たちは、空しく、はるか南方の海をながめながら、淋しい溜息をつくのみであつた。しかし、青木の失望したのには、もつと外の理由もあつた。

と言ふのは、かねがね宮古保養院に、信仰のあつた同志達を入院させて、その人達によつて、慰めの福音を宮古の病者たちに傳へたいとの計畫を持つてゐたからである。で、いま他郡からは入れないと聞いた時、心から失望したのであつた。

併し色々熟考した結果、青木には、ひとつの冒険がむくむくと腹の中から湧いて來た。

『これは、いゝことを考へついた』

青木は、さう獨ごつと、思はず手を打つた。

『眞正面から、入れて欲しいと言つても、到底出來ない相談なら、誰か信仰のあつた仲間仲間の者を二人か三人ばかり、福音の決死隊として、無断で入りこませてみたらどうだらう。わざわざ出かけて行つた人間を、まさか暴力で、ほふり出すやうなこともあるまい。問題がおきたらおきたで、そこは、なんとか鬼がついて行くに相違ない』

窮餘の結果考へついた、冒險的な計畫といふのはこれであつた。

さう考へると、もう寸時も、ちいつとして居ることは出來なかつた。此の計畫は直ちに祈禱會の席上で一同の者にうち明けられた。

『自分が、安樂な場所へ行つて、幸しあはせにならうなど考へたら、駄目だ。これは生命がけの仕事である。併し、自分たちのなかで、誰かが飛び込んで行かない限り、福音を傳ふる門は、決して開けるもんぢやない。だから、私は、宮古島行き宮古島の、決死隊をつのるわけなのだ』

斯う言つて、あつまつた人たちに、訴へると、そこに集つてゐた三十五六人の者は、何れもびつくりしたやうな顔つきで、青木をながめてゐたが、しかし、それは、暫らくの間に過ぎなかつた。

『わしが行きませう』

先づ、斯う叫び出したのは、二十歳ばかりの、青年だつた。

『私もひとつお願ひします』

次に五十歳ぐらゐの男が、これに續いた。

たちまち、十人ばかりの者が、決死隊の訴へに應じた。

「こんなに、大勢の者が行くことは、むつかしい。第一、船に乗り込むことが厄介だ。併し、皆さんの希望をしりぞけるわけにはいかない。では斯うしよう。暫らくの間、みんな黙禱して、そのあとで、ぐじを引いて、先づ、この中から挺身隊として、三人だけ行つて貰ふことにしたらどうだらう」

やがて人々は、深くしづまつて、熱心に黙禱をこらすのであつた。

そしてその後で、嚴やかな抽籤が行はれたが、その結果は、大城嘉元といふ男と、その妻のかじゆと、それから楠本十兵衛といふ男と、その三人がぐじにあつた。

大城嘉元とかじゆとは、四十歳代の、ふたりとも性質の柔和な、そして、信仰のあつた夫婦であつた。病氣も重い方ではなかつた。

十兵衛といふのは、最近まで、那覇の或る商店に奉公してゐたのだが、病氣がわかつた爲め此頃大宜味の親もとに歸された、實直な、素人が見ては、殆んど病氣もわからない位の、三十になるやならずの若者だつた。

「これは、まことに、格好な人が選ばれた。此の三人なら、たしかに、うまくやつてくれるに相違なからう」

青木は、心の底から、嬉しく思つた。

「島と島とをむすぶ索ができたのだ」

かう思つたとき、何もかもが俄かに明るくなつた。

恰度その時だつた。彼らは突然、家のまはりに、『わあッ』『わあッ』と、ものすごい関の聲のあがるのを聞いた。

青木は、ばねで弾かれたやうに、つと起上つた。そして、窓の中から、外を眺めた瞬間、思はず、『大變だッ』と叫んだ。

知念の家は、大ぜいの人々によつて、包圍されてゐた。

消防のいでたちをした者、ゲートルをつけた者、尻を端折つた者、——そして、それがてんでに、関の聲を擧げてゐるのである。

『大變だッ』

青木は、もう一度、叫んだ。

併し、自分の、おちつきを失つた態度に氣がつくと、

『これではいけなッ』

と、考へて、ぐつと、心を抑へつけた。

『青木、出てこいッ！』

かう、どなる聲が外でした。

石のやうに黙つた病者たちは、彼らの恐怖におびえた眼を、一齊に青木の顔に集中した。

『出てこいッ、出てこいッ、青木恵哉は居らぬかッ』

外では、又、かみつくやうな聲が、つづいておきた。

石が、ひゅつと、板戸になげつけられた。そして、また、『わあッ』と、関の聲があげられた。

青木は、瞑目した、そして、そつと、胸のあたりで、十字を切ると、畳の上に開いたまゝになつてゐた聖書を取上げた。

もう落ついてゐた。

彼は、少しびつこを引く足に、すつくの靴を履くと、がたりと板戸をあけて、外の空地へと出て行つた。

青木の姿を見ると、群衆は、びたりと沈黙した。

青木は、黙つて、そこにかたまつてゐる人々を、一とほりずらりと見廻した。

『五十人はあるなァ』

と、すぐに、さう思つた。

『青木恵哉ツて言ふのは、私でありますか……』

低い聲ではあるが、はつきりとさう言ふと、もう一度、人々の顔をじろりと見わたすのであつた。

『一體、どんな、御用でせうか？』

やがて、群衆の中から、四十歳ぐらゐの、がっちりとした體を持つた、顔一杯髯だらけの男が、歩前に踏み出して來た。

『實は自分たちは、此の部落の者だが、部落民一同の決議によつて、君に言ひ度いことがあつて來たんだ』

『——と、言ひますと？』

『外でもないが、此の部落民一同の決議では、君は言ふに及ばず、此の家にあつまる癩病人どもはみんな、今日限り、此の地を立退いて貰ふことにしたのぢや。——で、我々は、この決議』

を君たちに告げるために来たのぢや』

『何ですつて？』

と、青木の言葉は、鋭かった。

『私たち病者一同に、此地を立退けと仰しやるんですか？』

『さうだ』

青木は、自分の血管が、烈しい熱を帯びて、ふくらんで来たことを知った。

『断じて、御要求に應ずることは、出来ません』

青木は、きつぱりと、はねつけた。

群衆が、がやがやと、騒ぎ出した。

『生意氣だ』

といふ聲がおきた。

『罰あたり奴がッ』

といふ聲も聞えた。

『ぐずぐず言ふと、ぶち殺すぞ』

と、どなる聲も、どこかでおきた。

『なんですッ』

青木の聲は、また、興奮した。

『ぶち殺すですつて！一體あなた方は、何といふ亂暴なことを言ふのです。我ら日本人には、住所の自由もあれば、生存の自由もあります。それに、あなた方は我々を打ち殺すといふのですか』

『黙れ』

もの凄い怒號が、群衆の中から、飛んで来た。

聲のする方に、頭を擡げて見ると、そこには消防夫のいでたちをした、毬栗頭の男が見えた。

『貴様は、癩病人ではないか。癩病人は癩病人のやうに、ふざけた口を利かないで、俺たちの言ひなりになるもんだ』

『では、どういふわけで、我々癩病人が、此の地を立のかねばならぬか、その理由を聞かせて下さい』

出来るだけおだやかな言葉で言つたつもりだが、どこかに鋭いものがあつた。

いつのまにか、家の中から出て来た病者たちは、一かたまりとなつて、青木の背後に、壁のやうに、突立つた。

『理由は簡単だ』

と、最初口を利いた、髯面の男が、また口を開いた。

『おまへ達癩病人が居つては、衛生上から云つても、それからまた風紀上から云つても、甚だ宜しくないのだ。だから立退けといふのだ。理由はこれだけさ』

『いや、分りました。あなた方が我ら癩病患者を、いやがられる氣持もよくわかります。併し癩病は、隔離さへしとけば、決して、さうむやみに、人にうつるものではないのです。若しあなた方が、ほんたうに衛生上から考へて下さるなら、何故、私共のために、療養所をこさへて呉れぬのです。實際立のけと云つたところで、おいそれと家があるのではあるまいし、それに私たちは、みな貧乏人です。今が今、ここを立のくわけにも行きません。また、私たちは、日本といふ有難い法治國に住んでる人間です。それを理不盡にも——』

と、ここまで語つた時だつた。彼は、『わあッ』といふ新しい関の聲に思はず口をつぐんだ。

『わあッ』

関の聲は、眼と鼻の間に迫つて来たことがわかつた。

それは家の附近の、藪と茂り合つてゐる福木の向ふ側からであつた。

そして、次の瞬間には、一同の者は思はず、低い聲で、『おう！』とうなつたまゝ、茫然として立すくんだ。

福木の蔭から、家の周りの空地へ、どやどやと駈け込んで来たのは、子供の一團であつた。

『おゝ、来た、来た！』

髯面は、さう叫ぶと、両手を高く差上げた。

子供たちの一隊は、また『わあッ』と絶叫すると、蟻の飛ぶやうに群衆の中に割り込んだ。

髯面は、青木たちの方をにらみつけてゐたが、あごでしゃくりながら、憎々しげにどなつた。

『言ふて聞かせてもわからない奴らは、やつつけるばかりだ』

髯面は、さう言ふと、子供たちの方を振り向いて、

『打てッ！』

と、どなつた。

言下にばらばらと、つぶてが、飛んだ。

『打て、——打てッ!』

髯面は、また、叫んだ。

『わあッ——わあッ——わあッ……』

群衆と、子供たちは、無茶苦茶に叫び合ひながら、手あたり次第に、石ころや、棒切れや、土くれ等を投げつけた。

病者たちは、ひとかたまりになつた。

聲も立てなかつた。

みんなは子供を中にして互ひに抱き合つて、ぶるぶると慄へてゐるのであつた。

つぶてや、棒切れは、あたりかまはずにぶつつけられた。

いつか、そこには、駐在巡査が來てゐたが、併し、巡査は、たゞ黙々として、群衆の騒ぐのを、眺めてゐるばかりであつた。

青木は、まつたく、あつけに取られて、群衆の騒ぐのを見てゐたが、自分のすぐ傍に居た六つばかりの子供が、たら／＼と鼻血を出したのを見ると、燃えつくやうな憤怒に驅られて、群

衆の前に、大手をひろげて立ちほだかつた。

『やめッ』

——青木は力いつばいに叫んだ。

『やめッ、やめろッ——こらッ……』

——彼は再び叫んだ。

『話があるんだッ!』

——みたび叫んだ。

群衆が、少しおちついたのを見ると、青木は、咽喉も破れるやうな聲で、演説を始めた。

『諸君が狂人でないなら、我輩の言ふことを聞け! 何故、諸君は、我々を石にて打つのだ? 諸君も、我らも、同じくこれ日本人ではないか! 我らは不幸にして此の業病を持つてゐる。併し、我々は、諸君に對して、何の悪をなしたか。我らは善良な人間ではないか! 我らは温順である。我等の手は、諸君に、危害を加へたことはない。然るに何故、諸君は我らを石にて打つのか?』

火焰のやうな辯舌は口を衝いて出た。

しかし、群衆はなかなか、鎮まらなかった。

『やつつけろ』『たゝんでしまへ』『打て』——斯うした嘯號と罵聲が、あちこちにあげられると、つぶては又もや、はげしく飛んで来た。

『もう駄目だッ!』

青木は、さう叫ぶと、礫の下に五ひに抱き合つてひとかたまりとなつてゐる病者達を、自分の體でかばひながら、兩手を高く、天にさしあげた。

嚴やかな聲で祈をはじめたのだ。

——と、群衆が、急に、騒ぎをやめた。群衆には、何を祈つて居るかは、ようわからなかつたが、併し、その嚴肅な、そして敬虔な態度が、全く人々の心を捉まへたのであつた。

『みなさん』

そのとき不圖、群衆の中に聲が揚がつた。それは巡査の聲であつた。

『相手は癲病人であるから、今日は、これ以上のことをしないで、引取つたらどうです。そしてあとは、自分にまかせて貰ひたいのだが……』

と、巡査が、まだ何か言はうとして、次の言葉を一寸考へてるときだつた。福木の茂りに、

ざわざわと風が立つたかと思つる間に、瀧のやうな音を立て、襲來したのは、驟雨であつた。——沖繩名物の驟雨が物凄い勢でやつて來たのだ。

電光が閃めいた。

雷鳴がすさまじくおこつた。

青木は、篠つく雨の中に突立つたまゝ、まだ祈つてゐた。——兩手は高く、天にさしのべられたまゝで。

忽にして襲來した驟雨は、忽にして去つたのであつたが、しかしもう其時には、群衆はそこには一人もゐなかつた。雨と共に蜘蛛の仔を散らすやうに、一時に散つてしまつたのであつた。

『誰もゐない』と、青木は叫んだ。

『嘉元さん方は、直ちに支度して下さい。そして、これからすぐに那覇へ行つて、船に乗り込むやうに工夫して下さい』

これだけを早口に言ふて、ポケットからもみくちやになつた拾圓札を三枚ぬきとつて、手早く嘉元の手握らせた。これでもう、すつかからかんになつてしまつたのだ。

『それから——これは私の杞憂かも知れぬが、さつき押寄せて來た部落の連中は、再びこゝに

押寄せて来るにちがひない。……同時に、あちこちの病友たちの家も襲はれると思ふ。——それで、今夜は、みんな一かたまりとなつて、部落の連中の氣づかないところに、避難するやうにしたいが……」

嘉元達が支度をしてる間に、みんなの者に計つてみると誰一人として、避難することに反対する者はなかつた。場所も、すぐに、きまつた。

大宜味灣に臨んだ、淋しい岩窟を、彼らは知つてゐた。昔、海賊が住んでゐたといふ傳説のある岩窟で、入口は狭いけれども、中は四五十人位の人間を、ゆつくりと入れることの出来るのが、その岩窟である。

避難の手筈も即座にきまつた。

今夜のうちに、こゝに集まつてゐる者、それから、部落民の眼につきさうな所に住んでゐる者——彼らは全部、岩窟の中に移ることにした。

もう、日は、殆んど暮れてゐた。

群衆に踏み荒された垣根のあたりには、ユウナの花が、二つ三つ咲いてゐた。

『兎に角、飯を食はう』

病者たちは、雨に濡れた寒さでもないで、夕飯の支度にと取りかゝつた。そして今夜はそこで一緒に會食をすることにした。

雨あとの空は、綺麗に霽れあがつて、星が二つ三つ、きらめき初めた。

夕飯をすますと、病者たちは、あわただしく動き出した。

布圍や着物などを始めとしていろ／＼な所有物が、こつそりと、岩窟の中へ運はれた。

彼らの中には、歩行の自由に出来ない者もあつたが、それらの者は、元氣のよい病者たちが互ひに背負つたり、肩車に乗せたりして、連れて行つた。

食物も、ありつたけの物が、運ばれた。

みんなが、おちついたのは、もう一時を過ぎてゐた。

誰も彼も、すつかり、疲れ切つて、よう口を利く者もなかつた。

坐ると、すぐに、眠氣がさして來た。

『ことによつたら、これは、大きな騒ぎになるかも知れないな』

青木は、さう考へると、言ひ知れぬ不安が、心の底から湧いて來た。誰も彼も、おびえたや

うな、不安な表情で、いつばいだつた。

兎に角、一同は、寝ることにした。

岩窟の夜は、さすがに寒かつた。けれども、病者たちの心は、あついもので、一つになつてゐた。

病者たちは、互ひに體をくつつけ合つて、冷い床の上に、うたゝ寝の夢を結ぶのであつた。小さな蠟燭の灯が、言ひ知れぬ神祕を包んで、彼らの眞中にともつてゐた。

周囲の岩壁は、黙々として、病者達を守護するかのやうに、突つ立つてゐた。

青木は、容易に、ねむられなかつた。

彼は幾度も、幾度も、起上つては、膚を出してゐる者に、著物をかけてやつたり、まだ眼をつむらないでゐる者に、そつと慰めの言葉を、さゝやいてやつたりした。

岩窟の中は、しいんとして、空気で、動かないでゐた。

幼ない子供たちは、互ひに抱き合つて、すやすやと、眠つてゐた。

『いちらしい子供たちだ！』

青木は、子供達の、安らかな寝顔を覗き込むと、わけもなく、ほろりとするのであつた。

『こんなに幼いうちから病氣が出て、これからの長い生涯を、日蔭者となつて過さなければならぬとは、何といふ不幸な運命だらう』

さう思ふと、胸がつぶれさうになるのであつた。

子供たちは、みんなで、五六人あまりゐた。

青木は、そつと、八歳ばかりの男の子の、紅い頬に指を觸れてみた。頬はあたたかかつた。

その兒は、顔や額に、赤みを帯びた斑紋が生じてゐた。

青木は、體ちゆうが、づきづきと、疼んで來た。石で打たれた爲めらしかつた。

一本の蠟燭が、ちり／＼と燃え盡して仕舞ふと、岩窟の中は、眞の闇黒となつた。ただ入口のあたりが、星明りで、ぼうと白んでるだけだつた。

眠られないまゝに、青木の頭の中には、いろんな雑念が、あらはれたり、消えたりした。

羅馬の迫害時代に、カタコムの中で祈つた、勇ましい信仰家たちのことも考へられた。

『奇蹟はおきないのか』とも考へた。『互ひに愛し合つて行くより外に、奇蹟はないのだ』とも考へた。

やがて青木の魂は、海のやうに、岩窟内の闇黒の中に、ひろがり行くのであつた。すると、

病者たちの魂が、まるで星のやうに、びかびかとそこに輝やき出すのであつた。岩窟内の空気は、甘い、暖かなものに、變つて行くのが、感じられた。——青木は夢を追つてゐたのだ。……そして、いつのまにかやすやすと、軽い寢息を立て、眠の中へと、落ちて行くのであつた。岩窟の中が、甘い熟睡におちて行く頃、那覇への縣道を、息をもつかずに歩いて行く三人があつた。嘉元たち、愛の挺身隊であつた。

雲の柱のみちびく儘に

岩窟の一夜は明けた。

太陽は朗らかに輝やき出した。病者たちの不安な心にも、何かしら、明るいものが、現れて来た。

歩行の不自由な者は、みんなで外に運び出して、草の上に坐らせてやつた。子供等は、何も彼も忘れてしまつて、嬉々として、遊び戯れてゐる。

昨日の投石によつて、怪我をしたものも、幾人かあつた。青木は、かねて用意してあつた、

膏藥を貼つてやつたり繙帯をしてやつたりした。

昨日、驟雨にあつて、ぐぶ濡れになつた上、岩窟の中の寒さに祟られた爲めか、咳をはじめた者も、二三人はあつた。

『何は措いても、祈ることと、讚美することだ』

青木は、どんな場合でも、かねての主義を中止するやうな事はなかつた。

病者たちは、草の上に丸く輪をつくつて、坐つた。そして聲をそろへて、みんなで、讚美歌をうたひ出した。

みんなの心の中には、また、新しい勇氣が、加はるのであつた。

かうしたところへ、ぼつ／＼とやつて来た二三人の者は、收容洩れの、物貰ひをしてる病者たちであつたが、はからずも彼らの話に由つて、はじめて、昨日の騒ぎの真相を、はつきりと知ることが出来た。

物貰ひの男たちが、あちこちで、耳にしたり、目に映つたりしたことを総合すると、大體斯うしたことになるやうであつた。

事のはじまりは、新聞記事からであつたやうである。

癩者に對する 皇室の御仁慈、更に宮古島に於ける保養院の設立などより、一般社會は癩に對する關心を持ち始めたのであるが、その反映は直ちにジャーナリズムにあらはれ、最近沖繩で發行されてゐる新聞は、青木惠哉を中心とする癩者の動きについて、可なり大げさな記事を掲げたのであつたが、それによると、

『青木惠哉の仕事は、名護より那覇へと移つたが、最近は大宜味方面に擴張し、今や一癩者の家を根城として、盛んなる活動が展開せられ、彼を中心とする癩者の群は、固く團結し、いまや大宜味方面には一大癩病人部落が出現しようとしてゐる、云々』

部落民を刺戟したのは、かうした、新聞の記事であつた。

『これは大變なことになつた』

部落民は、たれも彼れも、心からびつくりした。彼らに取つて、癩は詛はれた病氣であつた。一度その家に、癩者の發生を見んか、その家はもはや、『日蔭者の家』として、社會の交はりから斷絶させられるのである。

『これはすておけない。青木とやらが入り込んで来て、大宜味に、癩病人の村をつくるとは、

何事だ。そんなことをされたら、俺たちは、いつたいどうなるのだ。村は全滅だ！』

これが、部落民の中から揚げられた聲だつた。

そして、その聲は、遂に、大宜味小學校に村民大會を開かせたのであつたが、その結果は、『我ら村民一同は、衛生上並びに風紀上よりして、青木某、ならびに癩病人全部に對して、大宜味村管轄より、即時立退を要求す』

と言ふ、決議となつたのである。

『これは、う、く、わ、つ、だ、つ、た、な、ア』

青木は、思はず、天を仰いで、嘆息した。

『これ程の、大きな問題となるまで、自分たちが氣がつかかなかつたとは、何と云つても手ぬかりだつた』

昨日の騒ぎの理由も、それに、小學校の生徒まで加はつたことも、すつかりこれで、わけがわかつたのだつた。

『これは、まごまごしては居られない、自分だけならどうにでもなるが、病者を全部追放するとなると、實に大變なことだ』

青木は、腕をこまぬいて、思ひに耽つた。

『ねえ青木さん。何も心配することはないでせう。我らの行先はいつでも天國ですよ。さあ何處へでも行かうじやありませんか』

傍から斯う云ふて勵ますのは知念であつた。知念の顔には無邪氣な微笑さへ浮んで居た。

『知念さん、よう言ふてくれた。青木恵哉ともあらう人間が、この位のことにしよげては、どうにもならないね。さうだ、元氣を出すことだ、頑張れ、頑張れ！』

青木もさう言ふと、元氣な聲で、朗らかに笑つた。

物貰ひの男たちも笑つた。

それから二日の後だつた。

青木たちは、岩窟の前に、村役場の書記と、衛生組長と、それから駐在巡査の三人を迎へた。

『まことに君たちには氣の毒であるが』

と、村役場の書記は、如何にも言ひにくさうに口を開いた。

『どうも、村の空氣が、甚だ悪いのでな、——勿論我々役場の者は、そんな理不盡なことは許

されないと言つて、随分頑張つても見たが——どうも、うまくいかないのでな、——つまり、此際君たちには、どうも氣の毒ではあるが、ここんところをがまんして、なんとかひとつ、よその部落へひとつとして貰ひ度いと、かうまア、考へちよるのだがな』

『つまり立退けと言はるゝのですな』

青木は、眞正面から、書記の顔を見つめながら、言つた。

『まア、こつちから、さうしたことは言へんのだが、そこはひとつ、君の胸で、なんとかその、考へてもらひ度いのぢやがな——何しろ、どうも、村の空氣がわるいのでな……』

と書記は、どもり勝ちにさう言ふと、袖口で、顔の汗をしきりに拭いた。

『衛生上から言つても、あまり病人が、一つ所に集まつては、よろしくないからな』

今度は、衛生組長が、横から、口を入れた。

『なア、青木君とやら、ここはその、萬事のところ、君の胸で、ひとつ、何とか上手にやつてもらひ度いのぢやが』

書記はまた、どもり勝ちに、下手から出るのであつた。

『一應、君の身分について、聞き度いのぢやが』

いままで、黙つてゐた巡査が、かう言ひながら、ポケットから、黒い表紙の手帳を取り出した。

『姓名は？』

『青木惠哉と申します』

『原籍はどこか？』

『大分縣直入郡〇〇村二七五番地』

『學校はどこまでいつたか——尋常の何年までいつたかネ』

『學校ですか。學校は、教員養成所を卒業した者です』

『教員養成所？』

巡査はさう言ふと、上眼づかひに、ちろりと青木の額を見た。

『こちらには名護から來たのだネ。……かうつと、大宜味に來て、もうどのくらゐになるのか？』

『さうですネ、もうかれこれ一年ばかりになると思ひますが……』

『君の宗教は？』

『キリスト教です』

かうした問答の中に、巡査は青木の答へを手帳に一々書きとめてゐた。

青木の正義を思ふ心は、先日村民の暴行といひ、また今日のこの無慈悲な立退きの要求といひ、到底承服出來ないものであつた。然し、遂には熱い塊のやうなものを胸にくつところへ乍ら、青木は唇を咬んだまゝ黙つてしまふより他になかつた。

『では、立退くことを、承知して貰つたのじやな』

最後に書記が一本釘を打つと、三人は、さつさとそこを去つてしまつた。

其の日、知念の家は、部落の人たちによつて、散々に叩きつぶされた上に、火をかけられて、すつかり焼き拂はれてしまつた。

枯木が燃えるやうに、知念の小さな家は、めらくと赤い舌を出しながら、ものの三十分と経たぬ間に、灰となつてしまつた。

『これで、すつかり清々した。これから、此の村も潔められるのだ』

部落の者共は、わい／＼、わめきながら、焼あとには、水をぶつかけて、歸つてしまつた。

「僕は、いまから、探偵をして来ますぜ」

此頃屋我地の方から来たばかりで、此の界限にまだ顔を知られてゐないのを、もつけの幸ひにして、斯う言つて朝から外に出てゐた男が、夕方、歸つてからの報告は、これだつた。

『さうか、とう／＼、俺の家を焼いてしまつたのか』

さすがに、この話を聞いた時、知念は唇をかみしめた。

『なに？ 知念さんの家が焼かれたつて？』

病者たちは、殆んど、總立になつた。

『あんまりだ、あんまりだ——これでも、人間のすることか！ 畜生！』

病者たちは、蜂の巣が叩きこはされた時のやうに、騒ぎ立つた。

『おちつきなさい』

青木は、興奮してゐる一同を、やつと鎮めた。

『それは知念さんの家が焼かれたのは残念此上なしです。けれども、今、私たちがこゝで騒いでも何にもならないではありませんか。私たちは此度のことは大きな試練であると思つて我慢しなければならぬと思ひます。平素の修養と信仰の活かし處はこゝです。』

——さあ、それよりも、これからみんなで焼跡の始末に行つたらどうだらう？』

『いゝこと言つて下さつた。ではこれから、後しまつに行くことにしませう』

斯う言ふ知念の眼には、涙が、光つてゐた。

たつしやな男たち十人ばかりの者が、焼あとにあらはれたのは、それから間もなくであつた。

『立つ鳥はあとを濁さずと、言ふことがあるぜ。あとは野となれ、山となれとは、下の下の人間のする事さ。我々是我々らしく、あとを立派に片づけて立ち退くことだ』

人々は互ひに、さう言ひながら、灰を掻き寄せたり、燃え残りの木片を叮嚀に集めたり、竹箒で綺麗に掃いたりした。

空には、夕月が、出てゐた。人々は誰が歌ひ出すともなしに、讚美歌を歌ひ出した。

知念の、濁を帯びた太い聲が、みんなを引つ張つた。歌つてゐる間、彼らは、幸福だつた。此の地を去らねばならぬことも、なつかしい集會所がなくなつたことも、部落民の憎惡の眼が、周圍に光つてゐることも、何も彼も忘れてひたすらに歌ふのであつた。

月光が、明るく、輝やき出した。

歌は繰返された。

二度——三度——四度……

歌つてゐるうちに、不圖、青木は、どこからともなく響いてくる、聲ともつかぬ、風ともつかぬ囁きに似たものを、心の底に感じた。

『沖繩！ 沖繩！』

それは老人の聲だつた。またそれは美しい女の聲でもあつた。

青木は荒砥老先生を思ひ出した。

正子をおもひ出した。

そして此の二つの靈が——戦ひ抜いた一つの靈と、美しい純潔な一つの靈と——自分を、みちびいてゐるやうな気がした。

知念の家を焼かれてから数日の後、青木たちは、大宜味の海岸を五湮ばかり隔てた海上に、ぼつんと木の葉のやうに浮んでゐる、無人島へのがれて行くことになつた。

それは、全部珊瑚礁から成る、無人島であつた。周囲は十町あつた。小さな島であつた。島には、相思樹や椰子や芭蕉などが、鬱蒼と茂り合つてゐた。

『ここだ、ここだ、ここに俺たちの、住むをきめよう』

青木たちは、舟から上ると、島の周りをかこんでゐる、濃藍色の潮を眺めながら、異口同音に、斯う呼ばはつた。

『これから自分たちは、どうなることか分らない。それで、一應、こゝで解散することにしよう。どうか、めい／＼、これからは自由に、自分の行く路を切り開いて貰ひ度い』

青木は、岩窟の中にかたまつてゐる病者たちに、斯うした宣告をして、ひとまづ、群の解散をすると、極く少数の、信仰と運命とを共にしようとする同志と共に、一艘の小舟を手に入れて、此の小さな孤島へとやつて來たのであつた。

孤島の土を踏んだものは、みんなで十八名だつた。知念はいつでも、青木の腰に、くつついてゐた。

無人島は、大宜味の人々によつて、ジャルマと言はれてゐる珊瑚礁の島であつた。

新しい生活が、彼らにはまた、始められた。

彼らは大いそぎで先づ家をつくつた。

幸ひ大きな巖が、屏風のやうに突立つてゐたので、その下に、小さな家がいくつか並べられた。それは、沖縄名物の、暴風を避けるには、もつて来いの場所であつた。家をつくりながら、彼らは、井戸掘りをはじめた。

始め数日の間は、夜に入つてから、こつそりと舟で對岸の部落へ渡つて、水を樽に詰めて運んで来たのであつたが、それが若しかして、巡察の眼か、部落民の眼にでもとまつたら、又どんな面倒が起らないとも限らないので、井戸を掘ることにしたのである。

井戸掘りの道具としては、たつた一本の鍬があるばかりであつた。併し、彼らは、屈しなかつた。一本の鍬は、次から次にと、人々の手に握られた。一尺、二尺、三尺と、さんご礁の堅い地の中に、穴がつけられて行つた。水はなかなか湧いて来なかつた。けれども彼らは、仕事を止めなかつた。

二週間近くもかゝつて、やつと、水脈に鍬が觸れた。少し濁つた、そして時々鹹味を含んだ水ではあつたが、こんくと、爽かな音をたて、そこに湧き出て来た時には、一同の口からは、期せずして、萬歳の聲があがつた。

芭蕉はたわわに果を結んでくれた。パイヤも一二本野生のものがあつたが、おいしい果が、

幾つもく結びましたのであつた。

『此の無人島に、神さまは、生命の樹の果をそなへて下さつたのだ』

彼らは、一生懸命になつて、芭蕉に肥料をやつたり、パイヤの根元から、雑草を取つてやつたりした。

少しの空閑地も残さないやうに、彼らは、奴力に努力を重ねた。そこには甘藷がうゑられたり、野菜の種子が蒔かれたりした。

又彼らは、時々そつと舟を漕いで、部落へ出かけて行つては、いろんな方法で桶やら、樽やらを集めて来て、雨水をそれに貯へて、最上の飲料水として、清潔な木の蔭に保存した。

食物も、充分といふわけにはいかなかつたが、其の日々の腹を満たすだけは、いろいろな方法で、あたへられた。

郵便の連絡の方法もついた。

回春病院の徳田からは、十圓の爲替を送つて来た。沖縄出身の入院者たちの、まごころ込めた贈物であつた。

『熊本の空から、祈の風が、吹いてくるのだ』

青木はかう思つて、涙ぐみながら、十圓の爲替を抱きしめるのであつた。

ジャルマに移つて四ヶ月の後にはじめて、宮古へ出かけて行つた、大城嘉元から、手紙を受取つた。

『嘉元たちは、どうしてるんだらう、うまくやつてくれたか知ら？』

青木は一日として、嘉元たちのことを思はない日はなかつたことゝて、胸をおどらせながら、封をおし切つた。

『……お別れしてから、長い日が経ちました。私たち三人の者は、非常なる苦心のうちに、那覇の港から、臺灣行の汽船に乗込み、やつとのことで、こゝ宮古島へと着きました。——私たちは、直ちに、保養院へと参りました。保養院は平良の町から可なり離れたところ、裏海に臨んだところに、設けられてありました。……私たちは事務所へ行つて、どうぞ、入院させて下さいと、お頼み致しました。「何處から来たか」と問はれますので、嘘を言ふわけにも行かず、「實は遙々と、大宜味の方から来たものであります」とお答へしましたところ、直ちに頭の上に飛んで来たものは、「馬鹿ッ」といふ雷のやうな一喝でした。「他郡の者は入れ

ることは出来ない、すぐに歸れッ」と言はれるのです。勿論死を決して来た私たち三人です。此のくらのことに驚くやうな兵兒垂れではありません。私たちは平身低頭して、「どうぞ、特別のお慈悲を以て、入院させて下さい」と、幾度も幾度も、おたのみしました。さうかうしてゐる所へ見えたのは、温厚な、相當年配の、立派な方でありました。そして、その方が、院長さんであることは、すぐに分りました。院長さんは、事務の方の話を聞かれた後で、又、私たちに、いろ／＼と、やさしくお尋ね下さつたのであります。私たちが、發病以來のつらい身の上話をも、いち／＼うなづきながら、お聞き下さいました。そしておつしやることに「實は此の保養院は、宮古のために縣の方で立てたものだから、他郡の病者を收容するといふことは、おほつびらには、ちと面倒なんだが、併し、君らのやうに、かうやつて来てしまつた者を、今更追ひ返すわけにも行かない、それで入れてやることにするから、安心するがよい、併し何しろ開院早々のことゝて何かと設備もとゝのつてゐないのだから、此點充分に忍んで、これからは、自分の家だと思つて、みんなで心を合せて、立派な保養院にして貰ひ度いと思ふ」と、まア斯う仰しやるではありませんか。あゝその時のうれしさ、思はず私たちは、すゝり泣をはじめました。……』

青木は、思はず、ほろりと、涙を流した。——そしてまた、読みつづけた。

『……さて、つつがなく入院をした私たちは、いよ／＼これから、最初の目的に従つて、仕事をせねばならぬのです。キリストの福音を傳へねばならぬのです。實際入院者たちは、まったく荒み切つた生活をして居ります。喧嘩もある、口論もある。其他一寸人様の前では書けないやうな悪いこともあるといふ具合で、實際あらつぽい生活を、人々はやつて居ります。數十人の病者たちには、何ら心の光となるものとはなく、ほんたうにそれは、失望と自暴自棄の状態なのです。——斯うした人々の間に立つて、私たちは、救ひの證明をはじめたのです。はじめの間、人々は、全然私たちを相手にしてはくれませんでした。併し私たちは元氣をおとさずに、ほんたうに一生涯命になつて、人々に親切をしてあげました。』

すると、或日のことでした。私たち三人が、波うち際のアダン林の蔭で、お祈りをしてるところへ、ひよつこりと、顔を出した人があります。びつくりして見ますと、それが院長さんなのです。「お前たちはこゝで何をしてるか」斯う院長さんはおたづねになりました。「私たちはお祈りをしてをります」仕方がないから私はかう答へました。「その本は何だ」とおつしやいますから、「これは聖書です」と正直に答へました。すると、院長さんは、ぢいつと私

共を見つめてゐらつしやいましたが、「では君たちはクリスチャンだな」と言はれるのです。こゝで曖昧なことを言つてはならぬと考へた私は、言下に、はつきりとした聲で、「お言葉のとほりであります、私共三人は、クリスチャンであります」と、大膽に申しました。するとどうでせう、院長さんが、斯う仰しやるではありませんか、「さうか、お前たちは信者なのか、いや、よくはつきりと言つてくれた。實は僕も基督を信じてる一人なのだ。至つて薄信な者ではあるが、聖書を読むことと、祈をすることは、一日として缺かしたことはない。自分はこの保養院開設以來、何とかして、入院者一同に、まことの人生の喜びを知つて貰ひ度いと祈つてゐたところだ。恰度よいところへ君らが来てくれた。これから一緒に、信仰の道をすゝむことにしよう」と。ああ、此の時のうれしさ、有難さ、餘りの喜びに、私たちは、暫らくの間は、ぼかんとして、たゞ院長さんのお顔を眺め入るばかりでありました。その後、私共は、大きな喜びと感激とを以て、愛の挺身者としてのつとめをはたすやう、努力してゐます。……』

ながい嘉元の手紙を読み終つたとき、青木の眼には、一杯涙がたまつてゐた。

『知念さん、この手紙をよんで下さる』